

第115図 古墳時代(2)の遺構位置図

### 第4節 古墳時代(2)

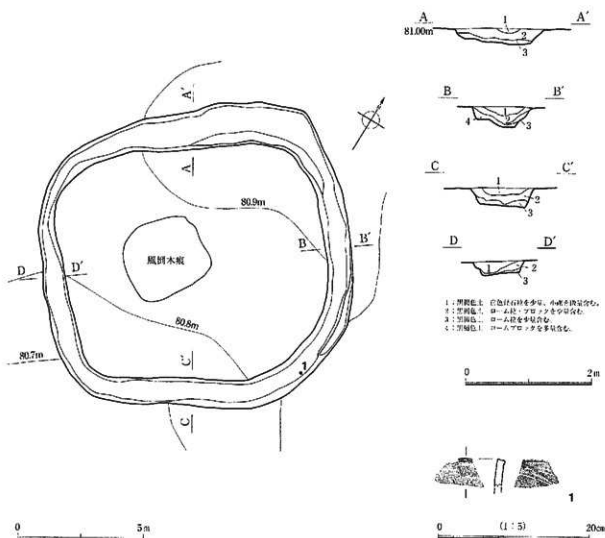
#### (1) 古墳

1号古墳 (遺構：第116図、P.L.69 遺物：第116図、P.L.91、観察表P.27)

位置：H16～I17グリッド。16号古墳の南西に隣接。形態：円墳としたが長方形に近い形態であり、方形周溝墓の可能性もある。規模：長軸10.5m。墳丘：既に削平。墓石：なし。主体部：削平のため不明。中央部の穴は風倒木痕である。墳丘部面積：83.0㎡。周溝部面積：51.3㎡。周溝：全周。断面形態は箱状を基調。上端最大幅1.67m。下端最大幅1.15m。残存深度29cm。埋没土はローム粒・白色軽石粒を含む黒褐色土でFAの堆積は認められない。時期：不明。備考：本遺構は形態から方形周溝墓の可能性も考えられるが、周溝から川筒埴輪片が出土していることから古墳と判断した。

遺物出土状態：先述のように周溝内から少量の川筒埴輪片が出土しているが、何らかの影響で本遺構に紛れ込んだ可能性も否定できない。

遺物：円筒埴輪片を確認している。1は外面縦ハケのみで内面に条線のヘラ記号がある。掲載遺物1点。



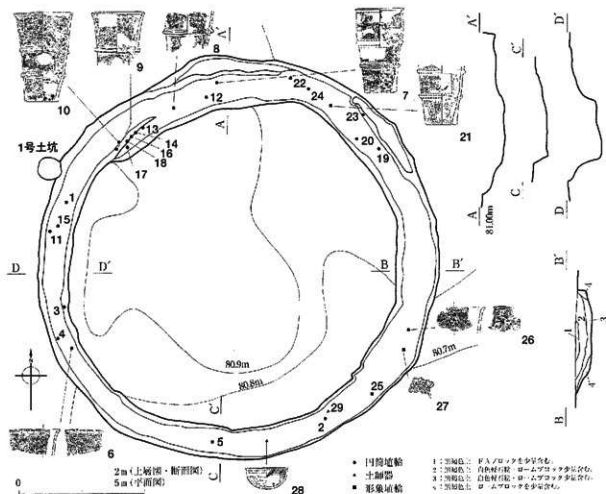
第116図 1号古墳と出土遺物

## 2号古墳 (遺構：第117図、P.L.69 遺物：第118・119図、P.L.91・92、観察表P27)

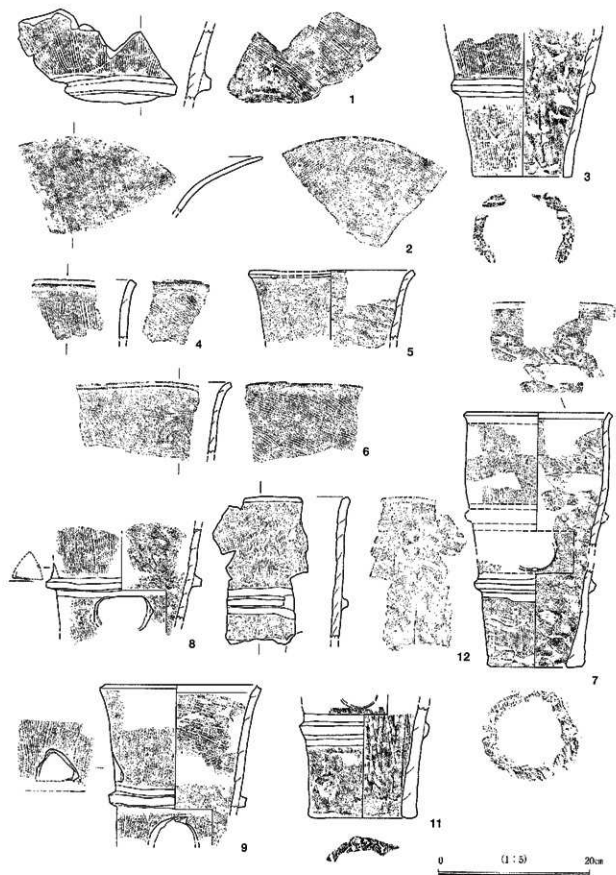
位置：G18～H19グリッド。北東に1号古墳、南西に4号古墳が隣接。重複：1号・3号方形周溝溝底を切り、1号土坑に切られる。形態：円墳。規模：径13.3m。墳丘：既に削平。墓石：なし。主体部：削平のため不明。墳丘部面積：133.8㎡。周溝部面積：74.3㎡。周溝：全周。断面形態はじ字状～箱状。上端最大幅2.02m。下端最大幅0.92m。残存深度54cm。埋没上はローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土を基調とし、底面より20cmほど上の1層中にFAブロックが認められる。時期：5世紀後半と想定される。

遺物出土状態：すべて周溝内に流れ込んだ状態である。円筒埴輪は西から北東部にかけて多い傾向が認められる。南東部からは人物埴輪の冠部分が、また、南側からは土師器埴輪が出土している。

遺物：朝顔形円筒埴輪・円筒埴輪・人物埴輪、土師器埴輪がある。朝顔形円筒埴輪は破片のみで、器形の全容は不明。円筒埴輪はすべて凸帯2条3段構成で、凸帯は台形状のものが多く、器形の全容が判断できるものは10のみで、器高35.5cmである。外面整形は、一次縦ハケのみのものが大半で、部分的にせよ横ハケ(B種)を施すものは5%前後と推定される。透し孔は、第2段上側に円形・半円形・楕円形のものが見られ、8・9・10は第3段下端にも三角形透し孔を1か所、第2段透し孔と直角の位置に穿つ。ヘラ記号は、5・6・7・14・18・19・20の7点で確認している。また、円筒埴輪の73%に赤彩が施されている。27は、男子人物埴輪の冠部分で外面には赤彩が施される。人物埴輪としては群馬県内最古期に位置付けられるものである。土師器埴輪は内斜口縁で2点を確認している。遺物総重量29.0kg。掲載遺物29点。

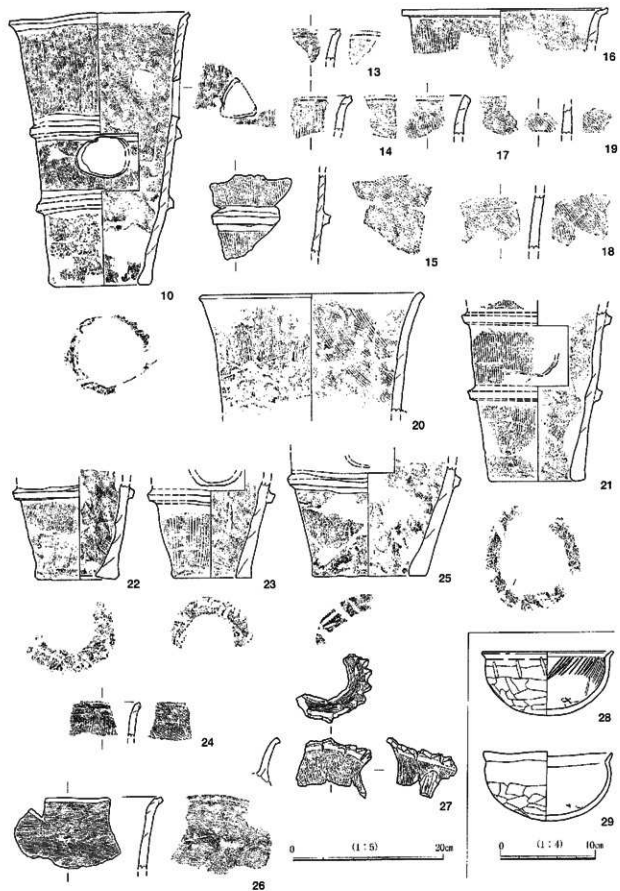


第117図 2号古墳



第118図 2号古墳出土遺物①





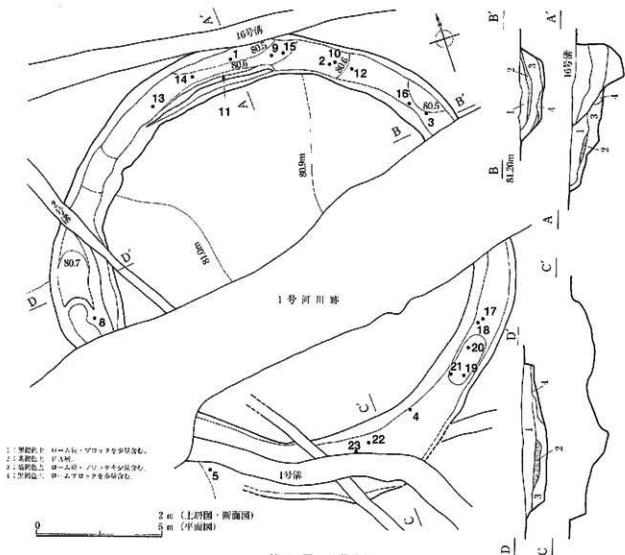
第119図 2号古墳出土遺物②

3号古墳 (遺構：第120図、P L 70 遺物：第121～123図、P L 92～94、観察表P 29)

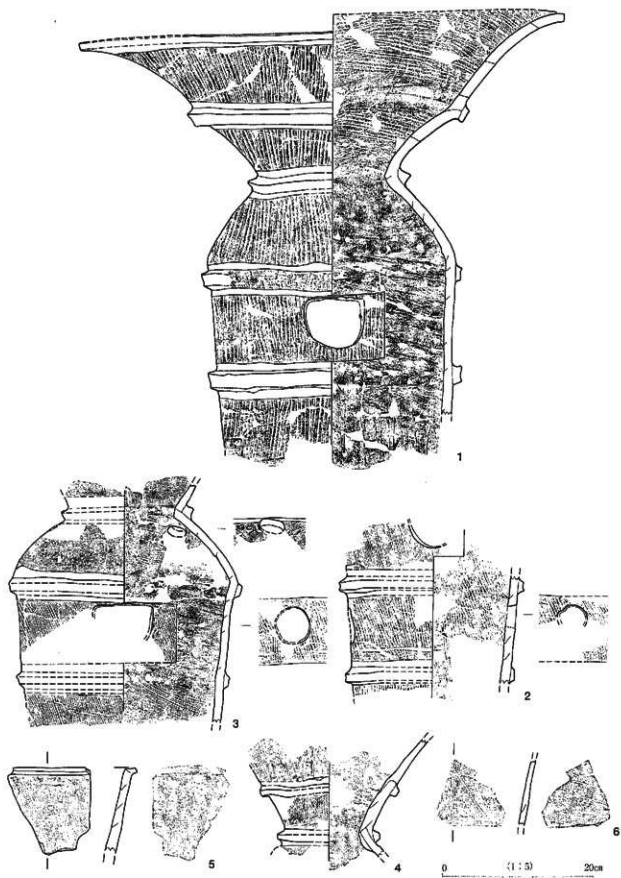
位置：K18～L20グリッド。南西に9号古墳、北西に12号古墳が隣接。重複：1号河川跡、1・2・16号溝に切られる。形態：円墳。規模：径14.8m。墳丘：既に削平。葺石：周溝内に多量の河原石が存在しており葺石が施されていた可能性がある。主体部：削平のため不明。墳丘部面積：推定167.4㎡。周溝部面積：推定91.8㎡。周溝：全周する。断面形態はU字状～箱状。上端最大幅1.98m。下端最大幅1.37m。残存深度40cm。埋没土はローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土を基調とし、底面より15cmほど上にF A (2層)の堆積が認められる。時期：5世紀後半と想定される。

遺物出土状態：周溝埋没土1層中からの出土が大半である。北側から北東部にかけて1・2・3の朝顔形円筒埴輪が4mほどの間隔で出土している。須恵器壺は1号河川跡に切られた部分からの出土である。

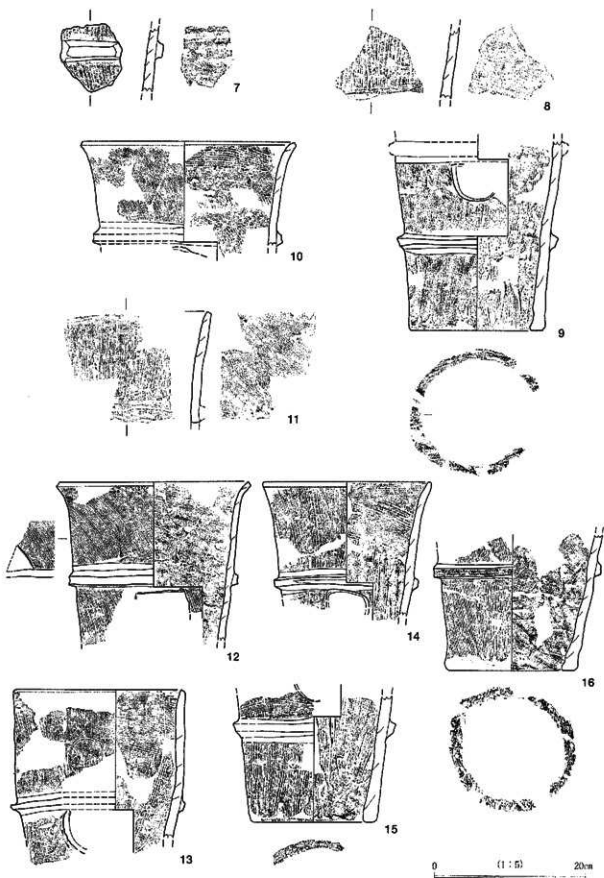
遺物：朝顔形円筒埴輪は比較的大形であり、1の口径は63.8mである。疑似口縁上に最上段を接合している。円筒埴輪は凸帯2条3段構成と想定される。凸帯はM字～台形。外面整形は一次縦ハケ・斜めハケのみで、二次横ハケはみられなかった。透し孔は確認できたものすべてが半円形であり、12には第3段下端にも三角形透し孔を1か所穿つ。ヘラ記号は、6の外面に「×」、13・18の外面に「○」がみられる。赤彩が確認された円筒埴輪は全体の20%程度であった。遺物総重量54.7kg。掲載遺物24点。



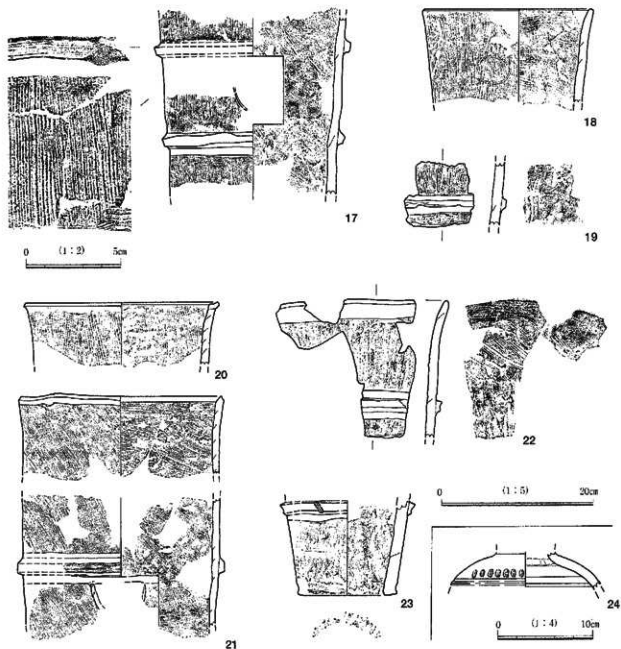
第120図 3号古墳



第121圖 3号古墳出土遺物①



第122図 3号古墳出土遺物②



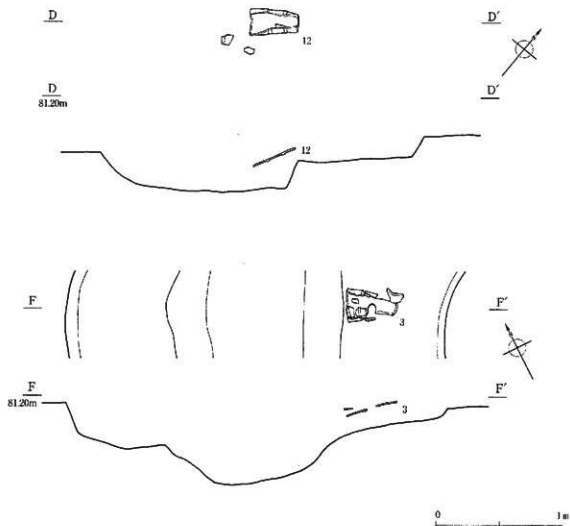
第123図 3号古墳出土遺物③

## 4号古墳 (遺構:第124・125図, P.L.70 遺物:第126~128図, P.L.95・96, 観察表P.30)

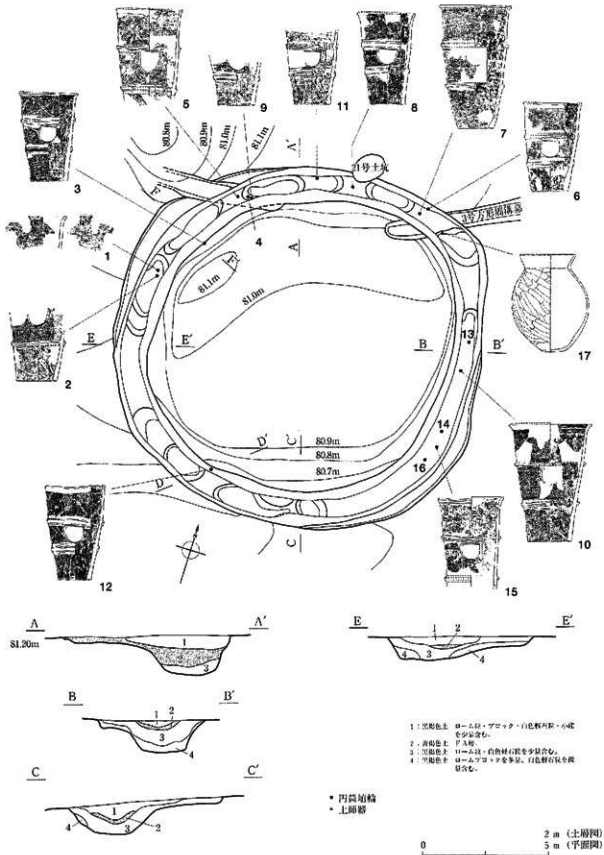
位置: G20~H21グリッド。北東に2号古墳, 南西に5号古墳が隣接する。重複: 21号土坑に切られ, 3号方形周溝溝底を切る。形態: 円墳。規模: 径12.8m。墳丘: 既に削平。葺石: なし。主体部: 削平のため不明。墳丘部面積: 108.7㎡。周溝部面積: 67.4㎡。周溝: 全周。断面形態はU字状。上端最大幅1.60m。下端最大幅1.10m。残存深度55cm前後。周溝掘り方には長さ2~4m程度の土坑状の凹みが認められ, これは周溝掘削の作業単位である可能性がある。1区画単位に1人が掘りつたと想定した場合, 10~15人ほどが本古墳の周溝掘削に関わったと推測される。埋没土は, ローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土を基調とし, 底面より15~35cm上にF.A(2層)が堆積する。時期: 5世紀後半と想定される。

遺物出土状態：すべて周溝内に流れ込んだ状態あるいは倒れ込んだ状態で、大半がF A層の上層（1層）から出土している。北東部に土師器甕がみられる他は、すべて円筒埴輪である。

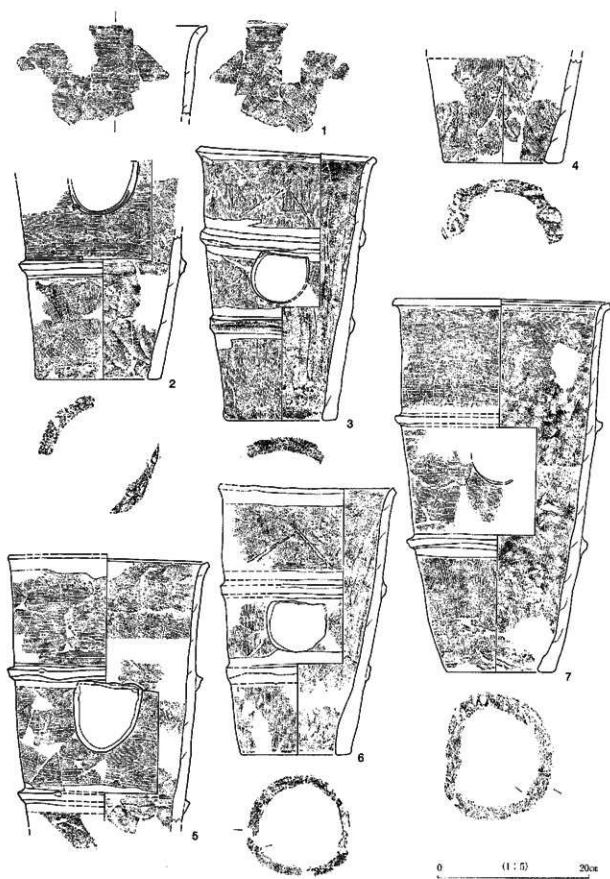
遺物：円筒埴輪はすべて内帯2条3段構成で、一次縦ハケ整形のみもの（4Ⅰ類）と第2・3段に二次横ハケ（B種）を施すもの（4Ⅱ類）とに大別される。組成比率は4Ⅰ類・約62%、4Ⅱ類・38%であり他の古墳に比較して横ハケ整形の存在比率が高い。4Ⅰ類は、器高34.8～37.4cm、凸帯は低く幅広で台形～弱いM字状、透し孔は半円形である。4Ⅱ類は、器高46.8～48.3cmと4Ⅰ類に比して大振りで、凸帯は台形状のものが多く、透し孔は半円形である。ヘラ記号は4Ⅰ類で5点、4Ⅱ類で1点を確認している。4Ⅰ類のヘラ記号は、第3段外面・第2段透し孔の上側にあり、5点とも開いた逆V字状（「∧」）に施す。おそらく本類に共通するヘラ記号と思われる、他の本類円筒埴輪にも施されていた可能性が高い。4Ⅱ類では15の第3段内面に条線のヘラ記号がある。円筒埴輪の胎土には砂礫を特徴的に含み、これは4Ⅰ類・4Ⅱ類に共通する。また、赤彩も4Ⅰ類・4Ⅱ類に共通して第2・3段を中心に施されており、第1段部分で確認できないものもあるが、おそらく100%に近い個体に赤彩が施されていたと考えられる。なお、本古墳からは朝顔形円筒埴輪は確認されていない。土師器甕は胎土に結晶片岩を含んでいる。遺物総重量56.2kg。掲載遺物17点。



第124図 4号古墳遺物出土状態図

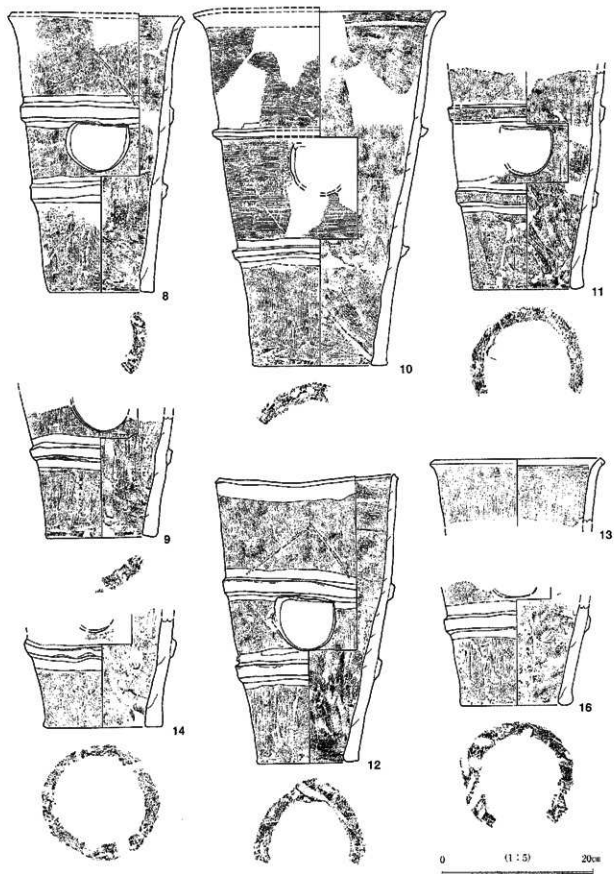


第125図 4号古墳

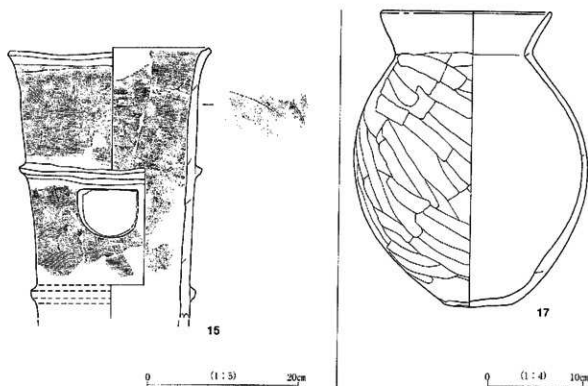


第126図 4号古墳出土遺物①





第127図 4号古墳出土遺物②



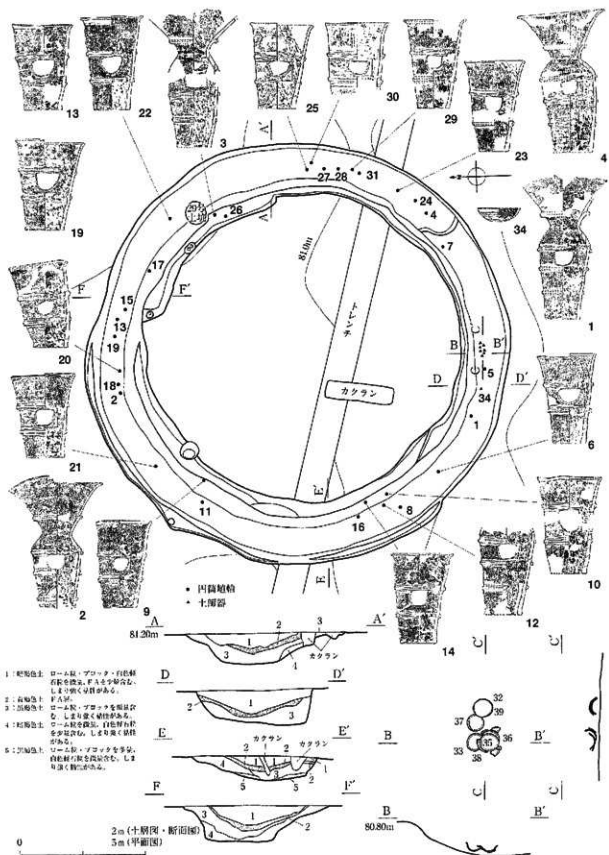
第128図 4号古墳出土遺物③

5号古墳 (遺構：第129図、P L 71 遺物：第130～134図、P L 97～100、観察表 P 31)

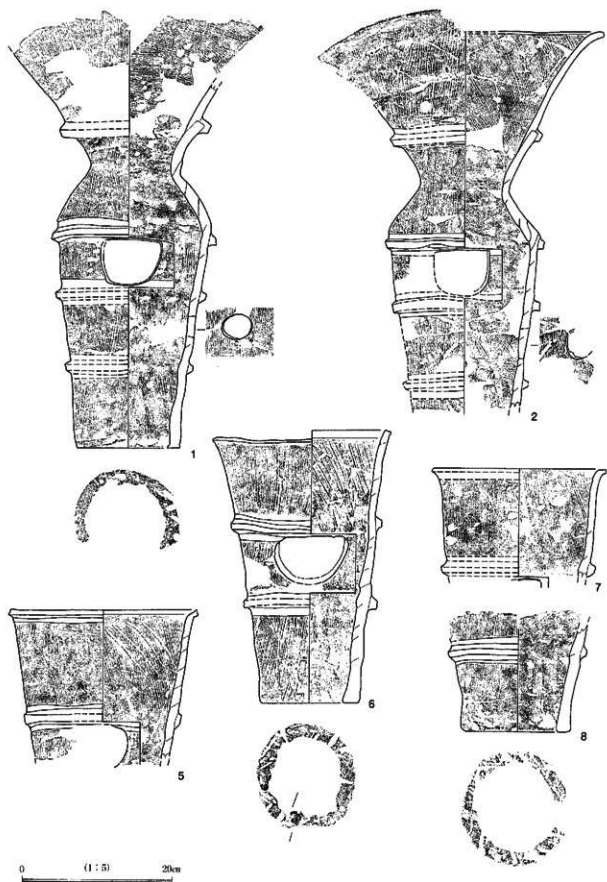
位置：G21～G22グリッド。北東に4号古墳、北側に6号古墳、西側に7号古墳が隣接。重複：29号上坑の一部を切られる。形態：円墳。規模：径12.8m。墳丘：既に削平。墓石：なし。主体部：削平のため不明。南側の長方形坑は攪乱。墳丘部面積：125.5㎡。周溝部面積：98.5㎡。周溝：全周。断面形態はU字状～箱状。上端最大幅2.08m。下端最大幅1.46m。残存深度55cm。掘設土はローム粒・ロームブロック・白色軽石粒を含む暗褐色土～黒褐色土で、底面より7～15cm上にFA（2層）が堆積する。時期：5世紀末葉～6世紀初頭と想定される。

遺物出土状態：すべて周溝内に流れ込んだ状態あるいは倒れ込んだ状態で、円筒埴輪の大半がFA層の上層（1層）から出上している。また南側では周溝底面に土師器環が7点集中する部分のみみられた。

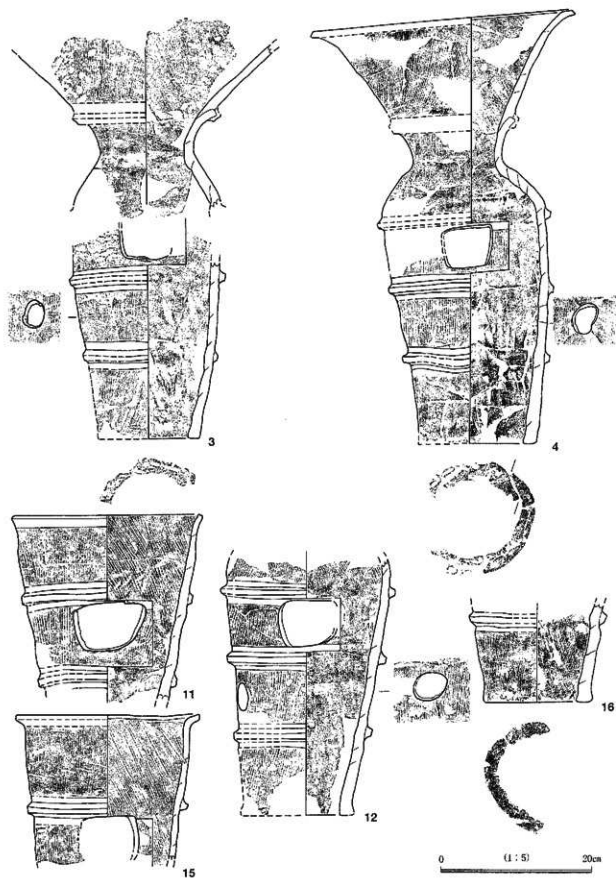
遺物：朝顔形円筒埴輪と円筒埴輪は、1：5ほどの比率で存在する。朝顔形円筒埴輪・円筒埴輪ともに色調は明赤褐色～橙で、いずれも胎土に結晶片岩を含んでおり、本古墳出土埴輪の特色である。9のように白色針状粒が観察されたものもみられた。朝顔形円筒埴輪は擬似口縁上に最上段を接合する。なお、本古墳の朝顔形円筒埴輪は括弧部に凸帯が施されないが、括弧部下を第4段、上を第5段とし、観察表には全体を6段構成として記述した。円筒埴輪はすべて凸帯2条3段構成で、凸帯は台形、透し孔は半円形を基調とする。外面整形は一次縦ハケのみで、二次横ハケ整形はみられない。口縁端部が外折するもの（5 I a類）と、しないもの（5 I b類）がある。ヘラ記号は、5・13・14・15・20・21・22・23・25・29の10点に認められ、いずれも第3段内面に4本または5本の斜め条線を施している。赤彩を施すものは認められなかった。土師器環には、丸底で内斜口縁のものと、小さめの平底でやや内傾気味に立ち上がる口縁のものがある。遺物総重量128.5kg。掲載遺物39点。



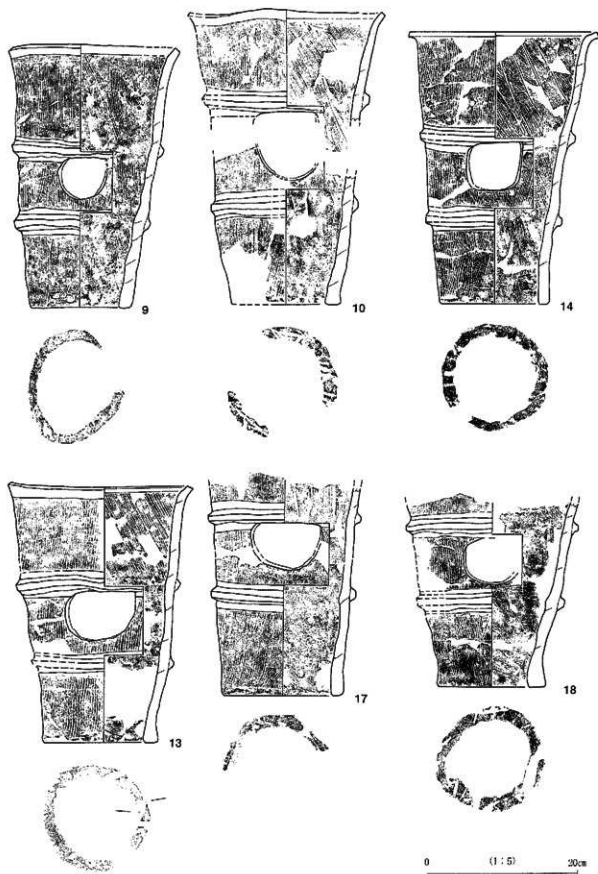
第129図 5号古墳



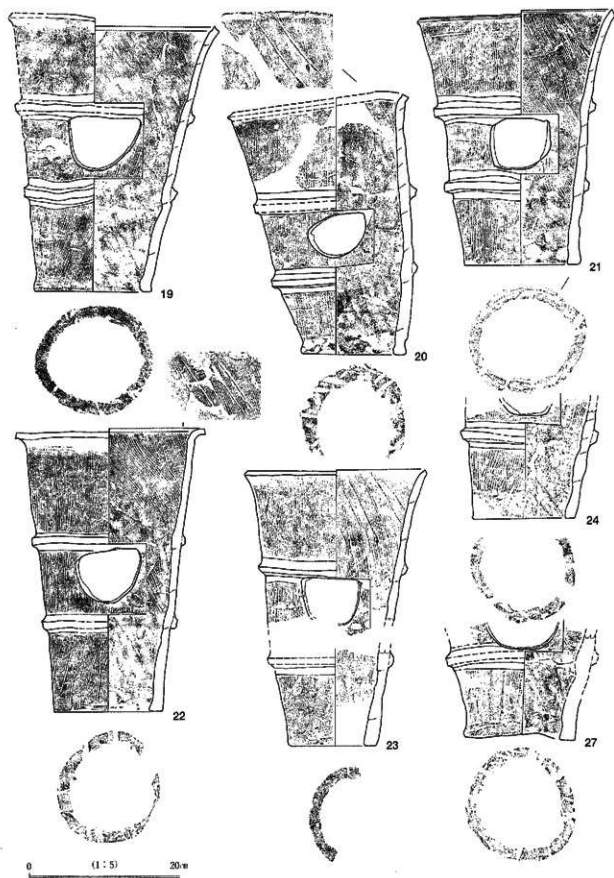
第130図 5号古墳出土遺物①



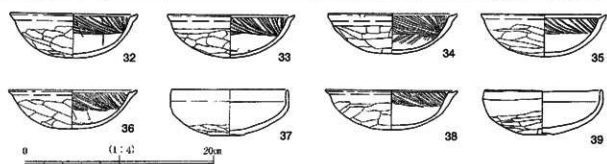
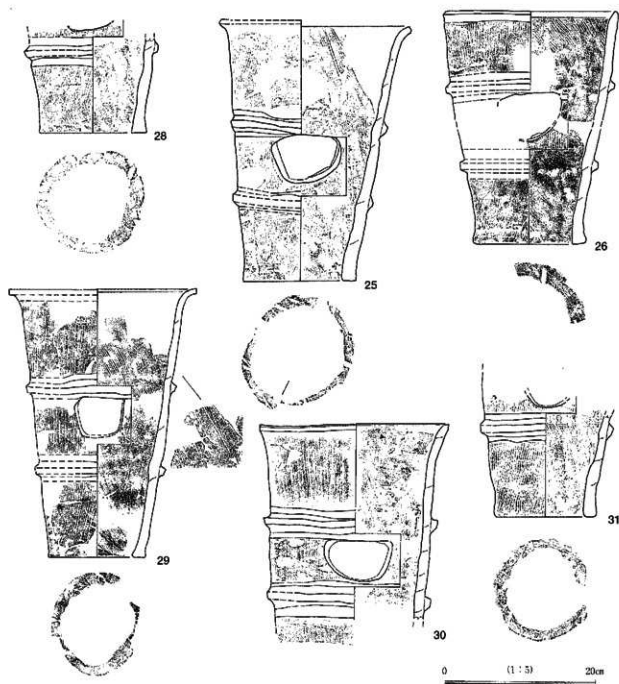
第131図 5号古墳出土遺物②



第132図 5号古墳出土遺物③



第133図 5号古墳出土遺物④

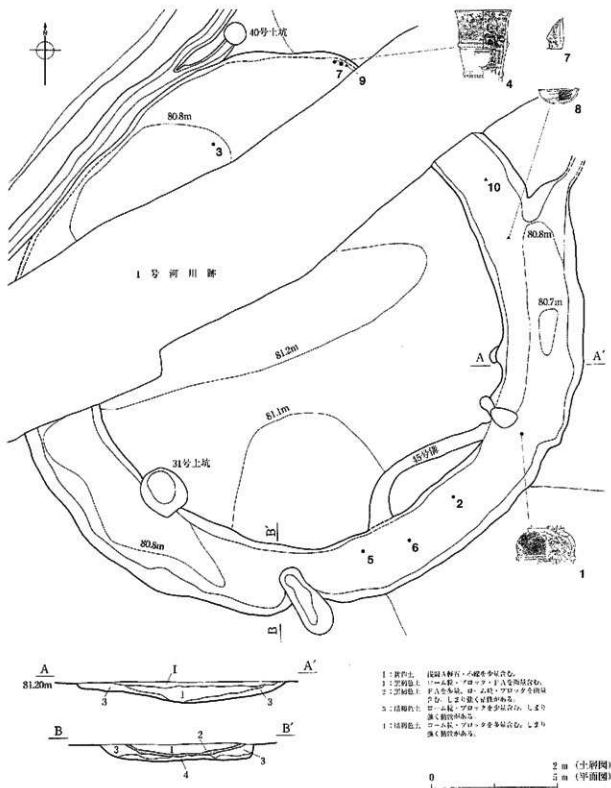


第134図 5号古墳出土遺物⑤



6号古墳 (遺構: 第135図、P L 72 遺物: 第136図、P L 101、観察表P 34)

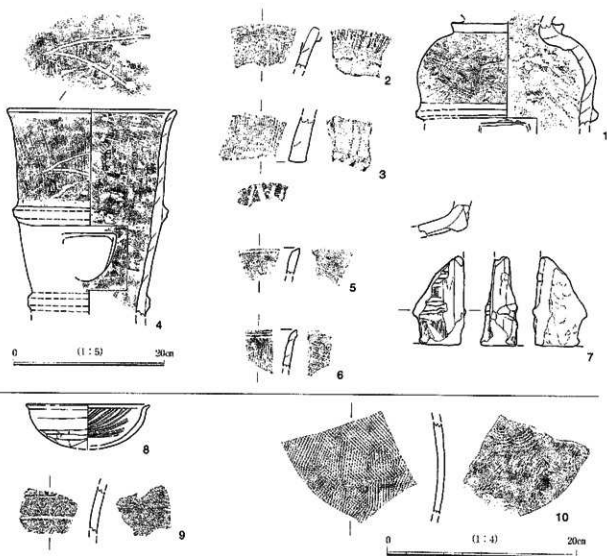
位置: H21~J23グリッド。南側に5号古墳、南西に7号古墳、北西に8号古墳が隣接。重複: 1号河川跡及び31号土坑に切られ、45号溝を切る。形態: 円墳。規模: 径16.9m。墳丘: 既に削平。墓石: なし。



主体部：削平のため不明。墳丘部面積：推定224.1㎡。周溝部面積：推定174.0㎡。周溝：全周するものと想定される。断面形態は箱状～皿状。上端最大幅3.34m。下端最大幅2.61m。残存深さ32cm。埋没土はローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土～暗褐色土で、底面より5cmほど上の2層にF Aブロックを混入する。時期：5世紀末葉～6世紀初頭と想定される。

遺物出土状態：すべて周溝内に流れ込んだ状態で、ややまばらな分布状態である。北側から北東部にかけては土師器・須恵器の分布がみられる。

遺物：朝顔形円筒埴輪・円筒埴輪・家形埴輪片・土師器・須恵器破片がある。朝顔形円筒埴輪1には、外面に紐状の凹痕が数条認められ、成・整形後に移動する際の紐掛け痕跡の可能性ある。円筒埴輪は、全容が明らかでないが、各段の状況から判断して凸帯2条3段構成と想定される。凸帯は弱いM字状で、透し孔は半円形。外面整形は一次縦ハケのみで、二次横ハケ整形はみられない。ヘラ記号は、4の第3段外面に「<」がみられる。朝顔形円筒埴輪・円筒埴輪とも赤彩が施されるものは認められなかった。7は家形埴輪の軸部コーナ部分の破片で、胎土に結晶片岩・白色針状粒が観察される。土師器坏は丸底で内斜口縁のものである。遺物総重量27.1kg。掲載遺物10点。



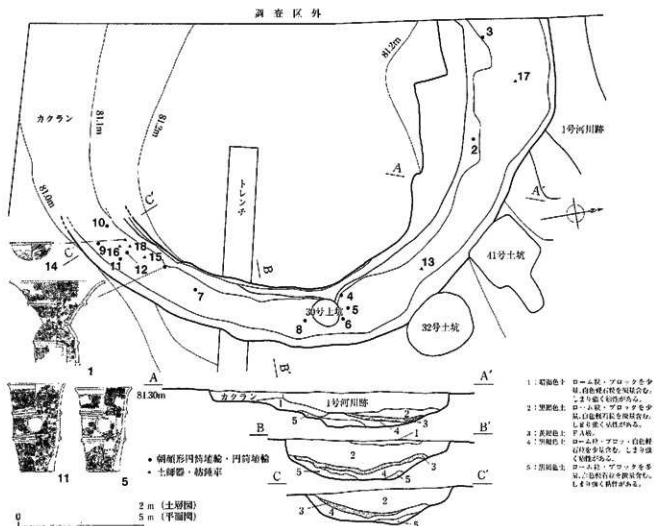
第136図 6号古墳出土遺物

## 7号古墳 (遺構:第137図, P.L.72・73 遺物:第138図, P.L.101・102, 観察表P.34)

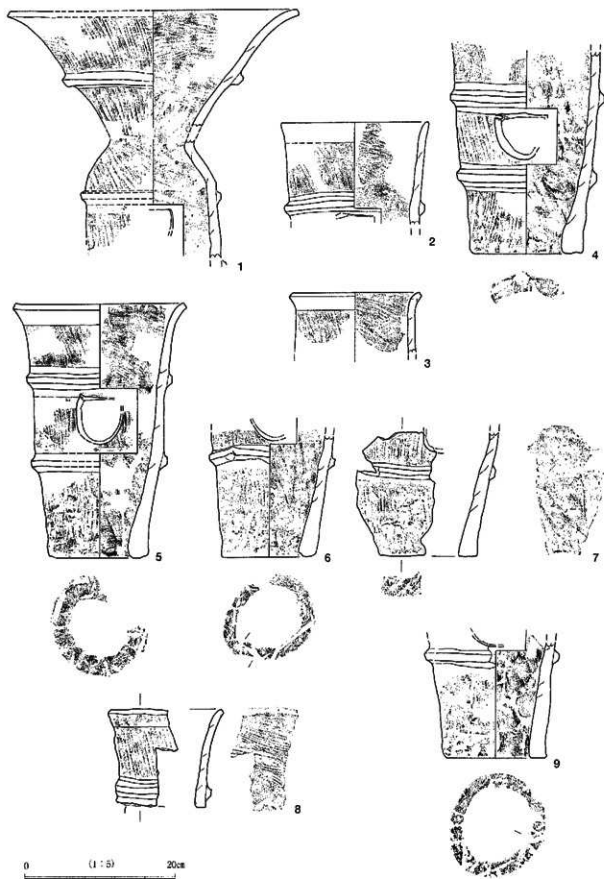
位置: G22~H24グリッド。東側に5号古墳, 北東に6号古墳, 北側に8号古墳が隣接。西側は半分近くが調査区外。重複: 1号河川跡・30号土坑・32号土坑・41号土坑に切られる。周溝南側の現況は深いゴミ穴が掘られていた。形態: 円墳と想定される。規模: 不明。墳丘: 既に削平。墓石: なし。主体部: 削平のため不明。墳丘部面積: 不明。周溝部面積: 不明。周溝: 断面形態はU字状。上端最大幅2.90m。下端最大幅2.00m。残存深度61cm。埋没上はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土・黒褐色土で、底面より10cmほど上にF.A(3層)が堆積する。なお、本古墳のF.Aについてはテフラ分析を行っている(第5章第1節)。時期: 5世紀後半~末葉と想定される。

遺物出土状態: すべて周溝内に流れ込んでいる状態で、F.Aより上層の2層中からの出土が多い。

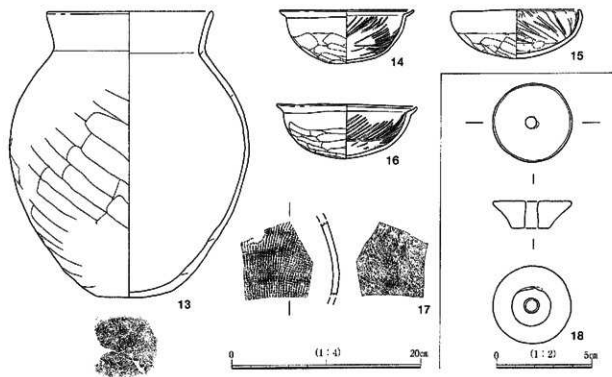
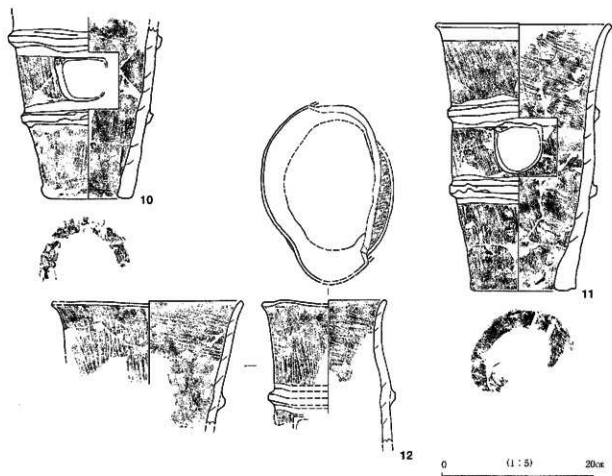
遺物: 朝顔形円筒埴輪・円筒埴輪・土師器(甕・坏)・須恵器破片・紡錘車1点がある。本古墳の朝顔形円筒埴輪・円筒埴輪は整形時のハケ目が太いのが特徴である。円筒埴輪は凸帯2条3段構成で、凸帯は台形、透し孔は半円形を基調とする。12のように器形が重み、上方からみると楕円形の円筒埴輪もある。ヘラ記号は認められなかった。また、赤彩を施す埴輪もみられない。土師器坏には内斜口縁のものと、口縁部が内湾するものがある。遺物総重量48.8kg。掲載遺物18点。



第137図 7号古墳



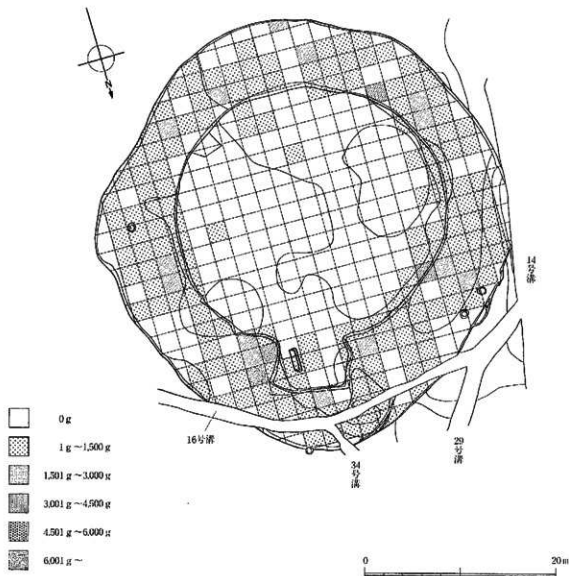
第138図 7号古墳出土遺物①



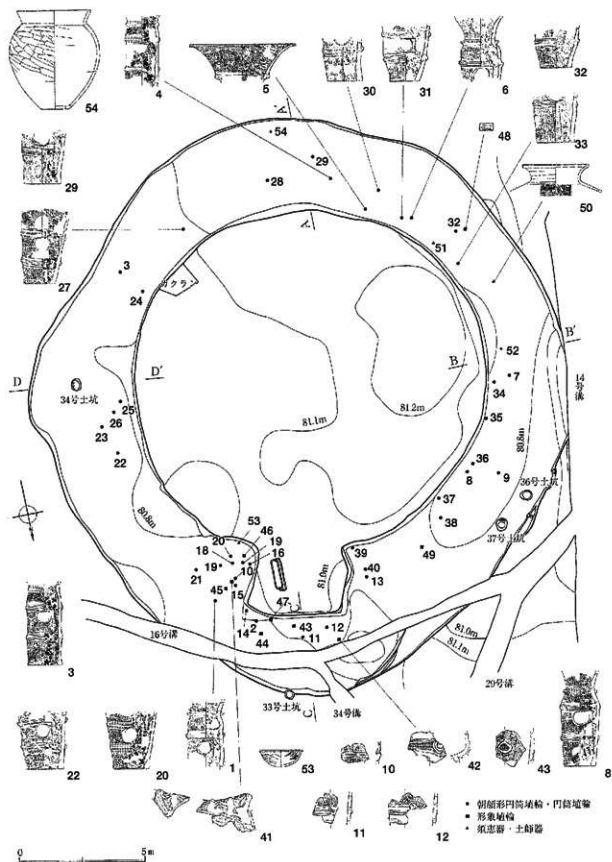
第139図 7号古墳出土遺物②

8号古墳 (遺構: 第140~142図、P.L.73・74 遺物: 第143~147図、P.L.103~106、観察表P.36)

位置: J23~M26グリッド。北東に11号古墳、南東に6号古墳、南側に7号古墳、西側に27号古墳、北西に29号・22号古墳が隣接。重複: 北側周溝を16号溝に、西側周溝を14号溝(中世館跡の堀)に切られる。33号・34号・36号・37号土坑に切られる。調査前には中央部に南北方向のアスファルト道路が存在していた。形態: 軌立貝形古墳。北側に方形部。主軸方位N-163°-W。規模: 全長32.9m。円丘部径27.9m。方形部長5.1m、方形部幅7.3m、括れ部幅6.9m。墳丘: 遅くとも中世館構築時には削平されていたものと考えられる。墓石: なし。主体部: 削平のため不明。方形部東寄りに長方形坑(2.62×0.76m・残存深度12cm)が位置するが本古墳との関係は判断できなかった。墳丘部面積: 631.8㎡。周溝部面積: 推定874.3㎡。周溝: 卵形状に全周する。南東部は6号古墳の周溝を避ける状態にある。断面形態は箱状。上端最大幅8.75m。下端最大幅8.30m。残存深度29cm。埋没上は暗褐色土を基調とし、底面及び数cm上にF.A.(6層)が堆積する。時期: 5世紀末葉~6世紀初頭と想定される。



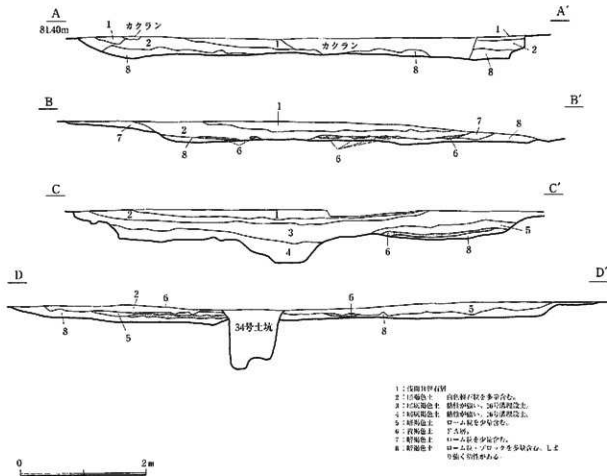
第140図 8号古墳遺物出土状態図



第141図 8号古墳

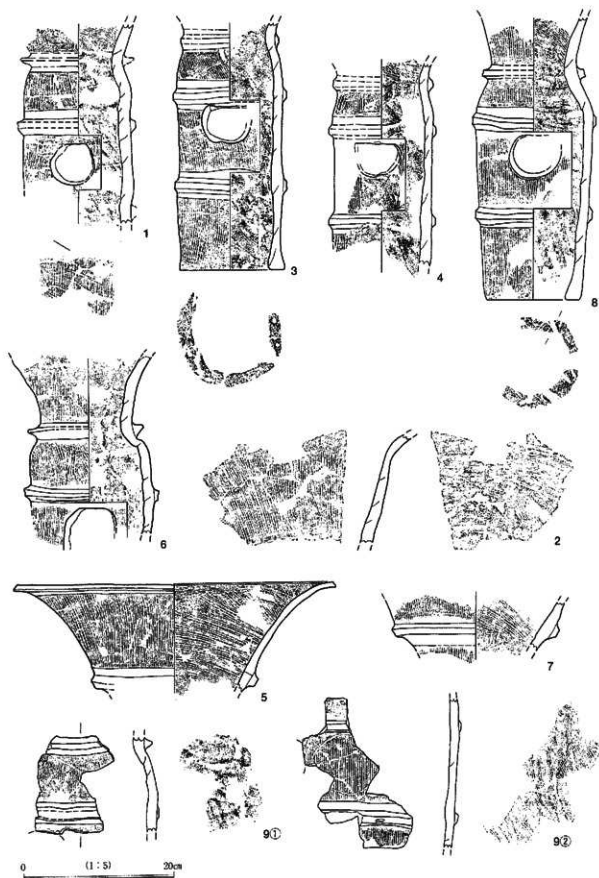
遺物出土状態：周溝に流れ込んだ状態のものが大半で、特に方形部東側周溝からの出土が多い。また、削平時に移動したと思われる遺物が墳丘部からも少量出土している。方形部周辺には、馬形埴輪、家形埴輪がみられる。

遺物：朝顔形円筒埴輪・円筒埴輪・馬形埴輪・家形埴輪・須恵器甕・土師器甕・土師器坏がある。朝顔形円筒埴輪は5を除き底径12.0～13.9cmと比較的小振りである。括れ部の凸帯は三角形のもの、M字状～台形のものがある。円筒埴輪はすべて円帯2条3段構成と想定され、8 I a類と8 I b類に大別できる。8 I a類は、凸帯M字状～台形で、第1段高が8.2～10cm前後と8 I b類に比べて短く、第3段下端の第2段透し孔と直角の位置に小円形孔を穿つもの(10・11・12・24・27)がみられる。8 I b類は33・35・37などが相当し、凸帯三角形で、第1段高は8 I a類に比べて長い。また、8 I b類は胎土に結晶片岩・白色針状粒を含んでいる。比率的には8 I a類が大半を占め、8 I b類は客体的である。両類とも外面整形は、次縦ハケのみで、部分的に横ハケを施すものもあるが、基本的に二次横ハケ(B種)はみられない。赤彩は朝顔形円筒埴輪・円筒埴輪全体の18%ほどに施される。ヘラ記号は1・9・17・39の4点で確認され、1は条線、9は「○」が描かれる。馬形埴輪には左側頭部片(42)や障泥部分(43)などがある。家形埴輪には人母壘造り屋根部分(41)や堅魚木(48)などがある。なお、形象埴輪の多くには、胎土に結晶片岩・白色針状粒の含有が認められる。須恵器甕は、内面の同心円文をナゲ消している。土師器坏(53)は丸底で内斜L縁のものである。遺物総重量100.9kg。掲載遺物54点。

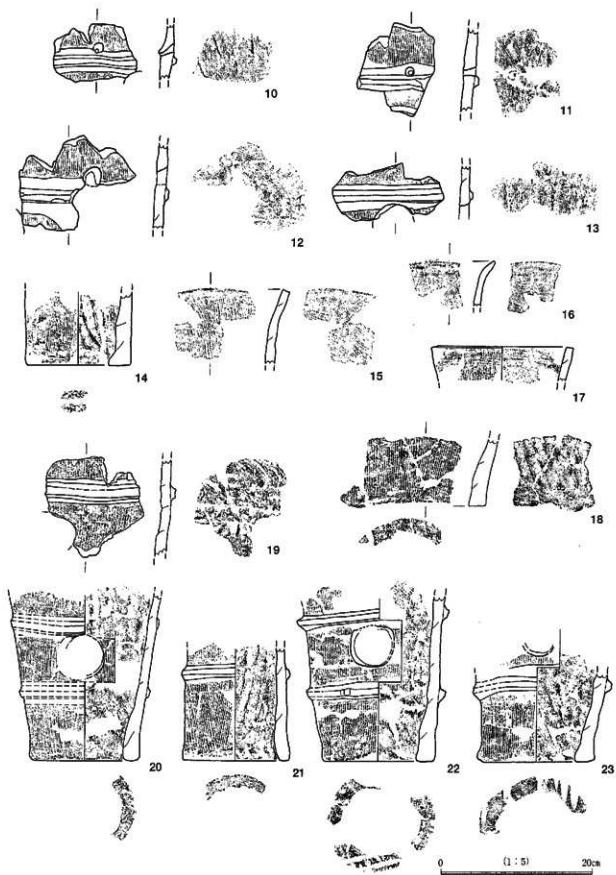


第142図 8号古墳周溝土層図

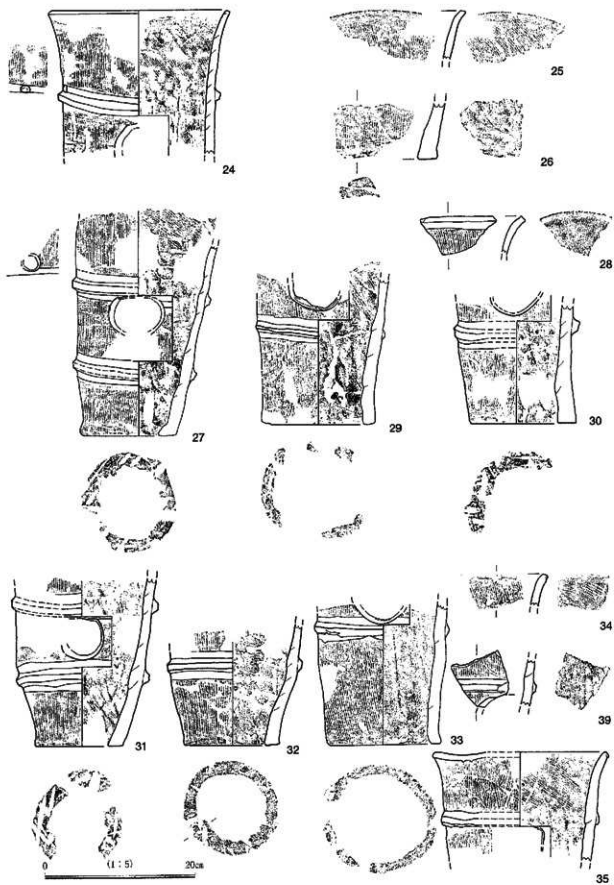




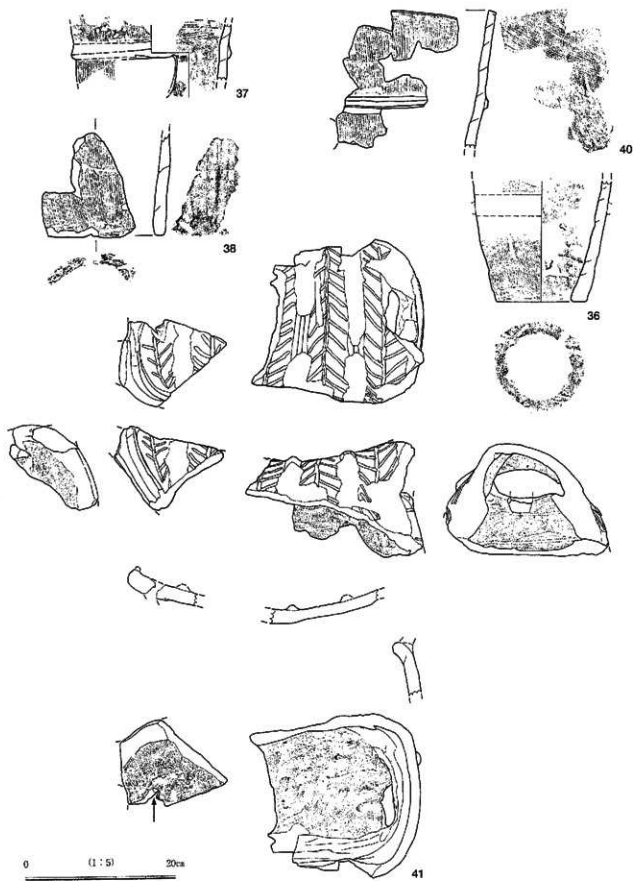
第143図 8号古墳出土遺物①



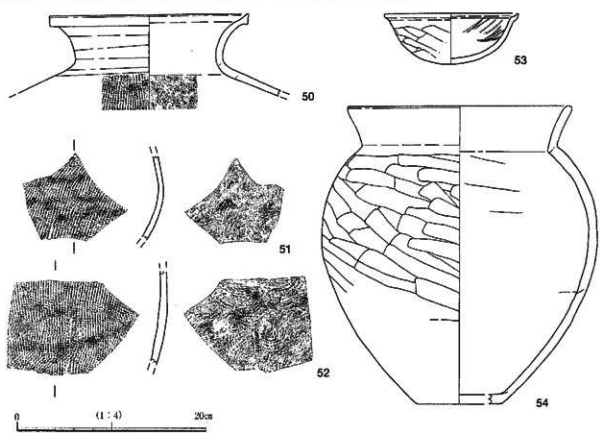
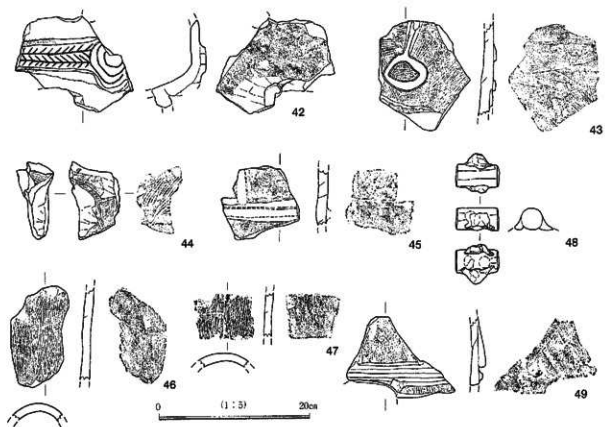
第144図 8号古墳出土遺物②



第145図 8号古墳出土遺物③



第146図 8号古墳出土遺物④



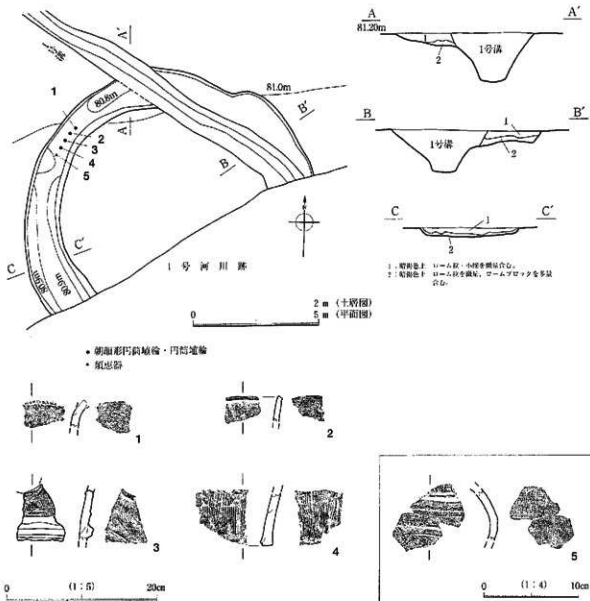
第147図 8号古墳出土遺物⑤

9号古墳 (遺構:第148図、P.L75 遺物:第148図、P.L106、観察表P.39)

位置:K20~K21グリッド。北東に3号古墳、南西に6号古墳が隣接。重複:1号溝・1号河川跡に切られ、約1/2が残存する。形態:円墳と推定される。規模:径9m前後と推定される。葺石:なし。主体部:削平のため不明。墳丘部面積・周溝部面積:不明。周溝:断面形態は箱状。上端最大幅2.08m。下端最大幅1.58m。残存深度19cm。埋没土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土を基調とし、残存部分においてFAの堆積は認められなかった。時期:5世紀末葉頃と想定される。

遺物出土状態:すべて周溝内に流れ込んだ状態で、ややまばらであった。

遺物:朝顔形円筒埴輪・円筒埴輪・須恵器があるが、いずれも小破片である。円筒埴輪は外面整形一次縦ハケのみで、二次横ハケ(B種)を施すものはみられない。また、赤彩を施すもの・ヘラ記号のあるものも確認されなかった。須恵器は皿の破片と思われる。胴部に波状文が施されている。遺物総重量22.0kg。掲載遺物5点。



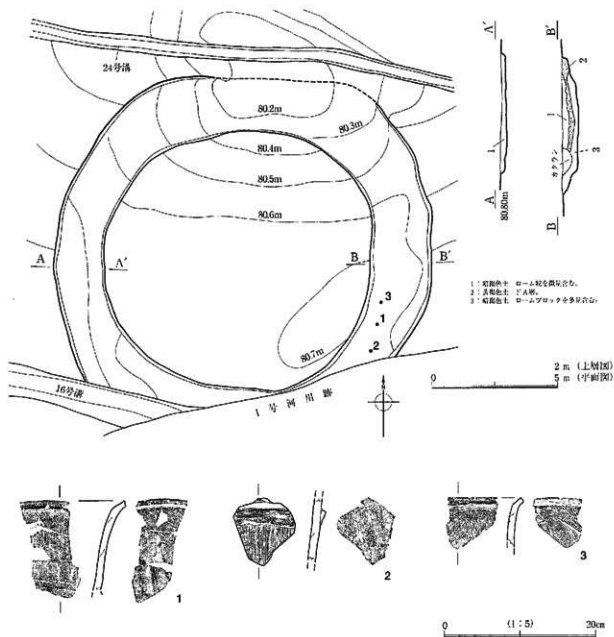
第148図 9号古墳と出土遺物

## 10号古墳 (遺構:第149図、P.L75 遺物:第149図、P.L106、観察表P39)

位置: L16~M17グリッド。東側に17号古墳が隣接。重複: 南側周溝を16号溝・1号河川跡に切られる。形態: 円墳。規模: 径10.8m。墳丘: 既に削平。葺石: なし。主体部: 削平のため不明。墳丘部面積: 91.2㎡。周溝部面積: 不明。周溝: 全周するが西~北側は浅く、削平を受けている。断面形態は逆台形状。上端最大幅2.58m。下端最大幅2.40m。残存深度25cm。埋没土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土で、底面より5cmほど上にFA(2層)が堆積する。時期: 5世紀末葉頃と想定される。

遺物出土状態: 周溝内に円筒埴輪片がまばらに分布する程度であった。

遺物: すべて円筒埴輪の小破片である。外面整形は一次縦ハケのみで、赤彩が施されるものは確認されなかった。3には内面に条線のヘラ記号がある。遺物総重量0.5kg。掲載遺物3点。



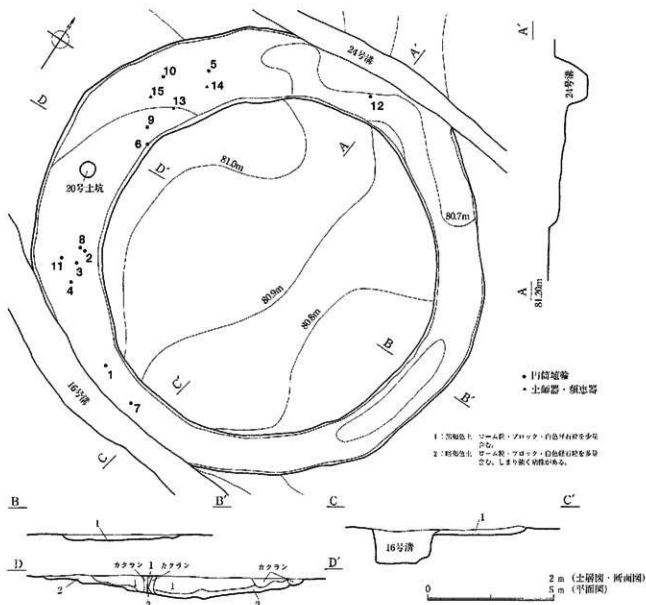
第149図 10号古墳と出土遺物

11号古墳 (遺構：第150図、P.L75 遺物：第151図、P.L106・107、観察表P39)

位置：M21-N23グリッド。北側に12号古墳、南西に8号古墳が隣接。重複：16号・24号溝、20号土坑に切られる。形態：円墳。規模：径13.9m。墳丘：既に削平。墓石：なし。主体部：削平のため不明。墳丘部面積：139.3㎡。周溝部面積：推定123.7㎡。周溝：全周。断面形態は箱状。上端最大幅3.45m。下端最大幅3.12m。残存深度36cm。埋設土はローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土～暗褐色土で、残存部分においてFAの堆積は認められない。時期：6世紀前半頃と想定される。

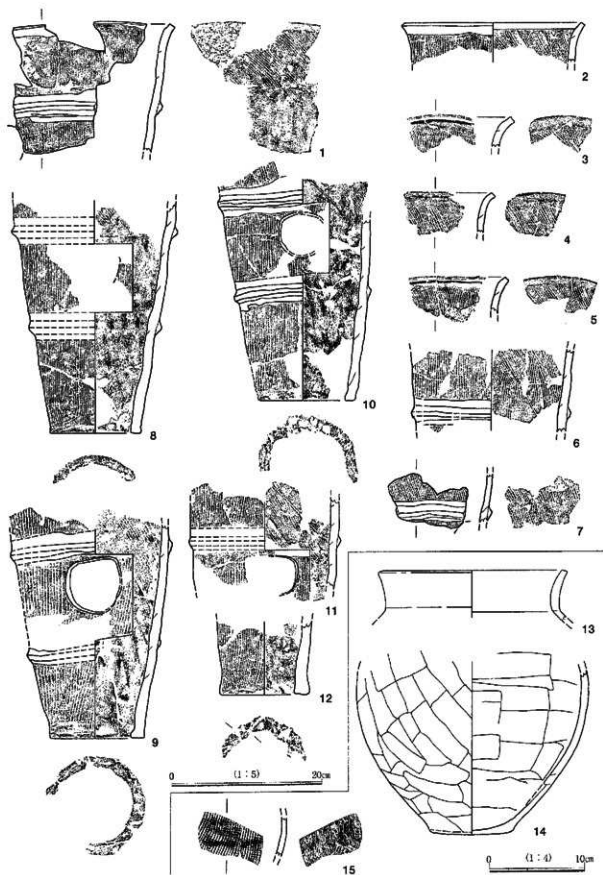
遺物出土状態：すべて周溝内に流れ込んでいる状態で、比較的西半部に多い傾向が認められる。

遺物：円筒埴輪・土師器・須恵器片がある。朝顔形円筒埴輪は確認されなかった。円筒埴輪は凸帯2条3段構成と想定され、凸帯は三角形が多い。外面整形は一次縦ハケのみである。透し孔は半円形のものが多い。赤彩を施すものは確認されなかった。胎土には特徴的に粗い砂粒や塵を含んでいる。また、6・10・11の内面第3段に条線のヘラ記号がある。遺物総重量21.0kg。掲載遺物15点。



第150図 11号古墳





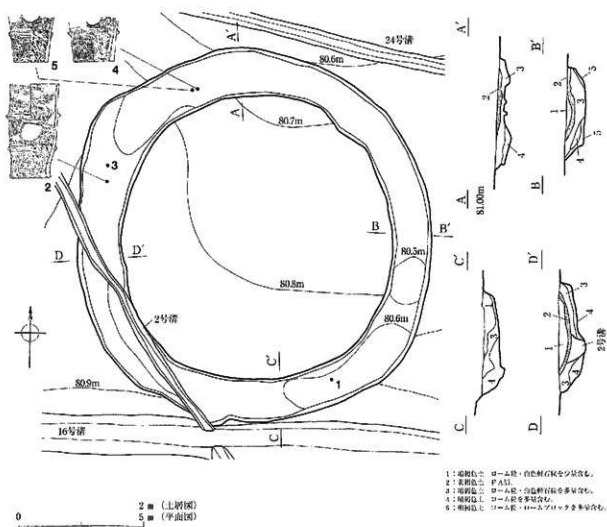
第151図 11号古墳出土遺物

12号古墳 (遺構：第152図、P L 75 遺物：第153図、P L 107、観察表P 40)

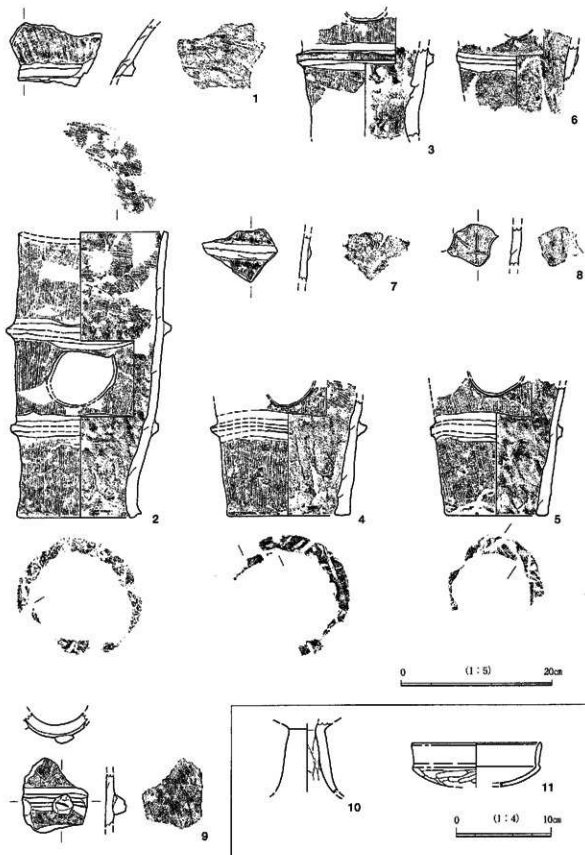
位置：M20～N21グリッド。南東に3号古墳、西側に11号古墳が隣接。重複：2号溝に周溝南西部を切られるが、周溝の最終埋没は2号溝よりも新しい時期と考えられる。形態：円墳。規模：径11.4m。墳丘：既に削平。葺石：なし。主体部：削平のため不明。墳丘部面積：96.0㎡。周溝部面積：85.8㎡。周溝：全周。断面形態は箱状を基調とするが、北側周溝は凹凸がある。上端最大幅2.53m。下端最大幅2.28m。残存深度35cm。埋没土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土で、底面より15cmほど上にF A（2層）の堆積が認められる。時期：5世紀末葉頃と想定される。

遺物出土状態：すべて周溝内に流れ込んだ状態で、F Aより上層（1層）からの出土が大半を占める。

遺物：朝顔形円筒埴輪・円筒埴輪・形象埴輪片・土師器高坏・土師器坏がある。朝顔形円筒埴輪は疑似口縁上に最上段を接合する。円筒埴輪は凸帯2条3段構成で、凸帯は台形状・三角形状・弱いM字状のものがみられる。全容が判断できるものは2のみで器高37.6cm、透し孔は半円形である。外面整形は一次襷ハケのみであるが、部分的にナデを施すものがある。ヘラ記号は2・8の2点で確認している。また、円筒埴輪の約25%に赤彩が施される。なお、6・7・8は胎上に結晶片岩・白色針状粒を含有する。土師器坏は口縁部が体部との境に稜を持ち、直線的に立ち上がるものである。遺物総重量23.7kg。掲載遺物11点。



第152図 12号古墳



第153図 12号古墳出土遺物

## 13号古墳（遺構：第154図、P.L76・77 遺物：第155～175図、P.L108～120、観察表P41）

位置：K7～O9グリッド。北側に21号古墳、東側に19号・20号古墳、南西に16号・25号古墳、西側に14号古墳が隣接する。重複：周溝東側を6号溝に切られる。また、周溝南側は平安時代に水田跡（浅岡B畦石下）に利用されていた。墳丘部及び方形部には弥生時代後期～古墳時代前期の5号・6号・7号住居跡と時期不明の11号土坑が位置する。形態：帆立貝形古墳。南側に方形部。主軸方位N-5°-W。規模：全長40.0m。円丘部径29.8m。方形部長9.3m。方形部幅10.2m。括れ部幅5.5m。墳丘：既に削平。葺石：なし。主体部：削平のため不明。念のため円丘部にサブトレンチを設定して調査したが、主体部は検出されなかった。方形部西側に位置する11号土坑（2.15×0.92m・残存深度53cm）は、同じ帆立貝形の8号古墳長方形形と位置関係が類似しており、本古墳に関連する可能性もある。なお、同土坑からの出土遺物は皆無であった。墳丘部面積：841.6㎡。周溝部面積：1,186.4㎡。周溝：卵形状に全周する。断面形態は箱状で、底面は多少の凹凸・起伏はあるが全体的に平坦である。上端最大幅9.45m。下端最大幅8.55m。残存深度85cm。埋込土は、ローム粒・ロームブロック・白色軽石粒を含む黒褐色土～黒色土で、底面から5～15cmほど上にFA（7層）が堆積する。時期：5世紀後半と想定される。

遺物出土状態：北西部や東側の一部及び方形部では墳丘裾部に倒壊した状態で円筒埴輪が出土している。そのほかは、周溝内に流れ込んだ状態であるが、比較的墳丘部寄りに多い状況がうかがえる。FAより上層からの出土が大半であり、特に2層からの出土が目立つ。また、形象埴輪・土馬・鳥付き円筒埴輪などは方形部周辺に集中する傾向がみられる。

遺物：朝顔形円筒埴輪・円筒埴輪・馬形土製品（土馬）・形象埴輪（鶏）・埴がある。朝顔形円筒埴輪と円筒埴輪の比率は1：10程度と推定される。なお、滑石製模造品等は検出されなかった。

朝顔形円筒埴輪は、6段構成で疑似口縁上に最上段を接合する。凸帯はM字状で括れ部凸帯のみ三角形である。第2段に円形透し孔・第3段に半円形透し孔を穿つもの（1）、第2段・第3段とも半円形透し孔のもの（6・7・8）とがある。外面整形は一次縦ハケ・斜めハケのみである。全容が判断できるものは、1・8の2点のみで、1は器高56.2cm、8は推定56.1cm。2～7は酸化焰焼成であるが、1・8は還元焰で焼成されている。

円筒埴輪は、すべて凸帯2条3段構成と想定されるが、いくつかのバラエティが認められる。ここでは全容が判断できるものを中心に、外面整形が一次縦ハケのみのものを13I類、二次横ハケ（B種）を施すものを13II類と大別し、さらに各類を以下のように細分した。

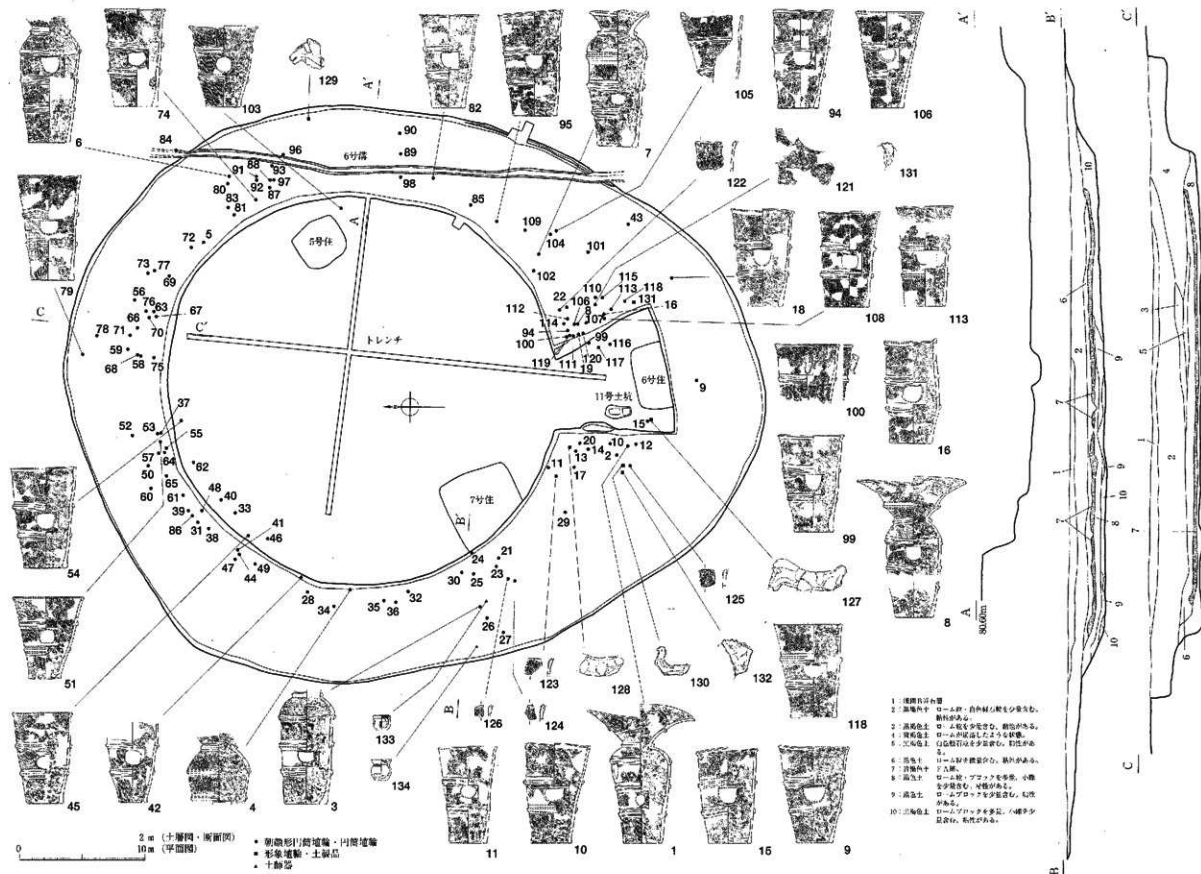
13I a類：器高37.4～42.1cmで、口縁端部が短く外折するものを本類とした（11・15・54・74・82・95・99）。口唇部が凹むものが多い。凸帯はM字状、透し孔は半円形。ヘラ記号は、15・54・74の第3段外面に「V」がみられる。

13I b類：器高38.6～42.1cmで、13I a類とほぼ同様であるが、口縁端部が外折しないものを本類とした（10・16・79・94）。凸帯・透し孔・ハケ目の状態等も13I a類と差異はない。ヘラ記号は、4点とも第3段外面に「V」がみられる。

13I c類：器高は37.5～38.0cmと13I a類・同b類と大差ないものの、底径：口径比が大きく、口縁部に向かって開く器形のもの（9・118）。色調は、9が青灰色、118が褐色で還元焰焼成されている。

13I d類：器高36.2cmとやや小振りで、外面のハケ目が比較的太いもの（45）。45も色調は青灰色で還元焰焼成されている。内面第3段に条線4本のヘラ記号がある。

13I e類：器高32cm程度と小振りで、底径：口径比が1：2程度と大きく、口縁部が広がる器形のもの



第154図 13号古墳

(51・103)。外面のハケ目も比較的太い。51は還元焙焼成される。2点とも内面第2～3段に条線3本のヘラ記号がある。

13Ⅱa類：第2・3段にB種横ハケを施すもの。105が相当するが、破片であり全容は不明である。

13Ⅱb類：第3段にB種横ハケを施すが、第1・2段は一次縦ハケのみのもの(106)。

円筒埴輪全体の約80%は13Ⅰa類・13Ⅰb類で占められ、およそ3:1の比率で13Ⅰa類が多い。13Ⅰc類・13Ⅰd類はそれぞれ3%前後、13Ⅰe類は8%前後である。B種横ハケを施す13ⅠⅠ類は全体の5%前後で、極めて客体的に存在する。また、13Ⅰc類・同d類・同e類のほとんどが還元焙焼成されており、特徴的である。赤彩は全体の約50%に施されている。

ヘラ記号は、前述したように13Ⅰa類及び13Ⅰb類の外面第3段に「V」が、13Ⅰc類・同d類・同e類には内面に条線3本～4本が施される。「V」は21点、条線のヘラ記号は5点を確認している。

13Ⅰa類には、100のように外面第3段に鳥が付けられたものがある。また、水鳥形の上製品(130)があり、これは底部の状態から円筒埴輪の口唇部に付けられていたものと考えられる。13Ⅰb類の161にも小像を貼り付けていたと思われる剥離痕がある。さらに13Ⅰa類・同b類の破片である122～126にも同様の痕跡が認められ、複数の小像付き円筒埴輪が存在していたことを示している。

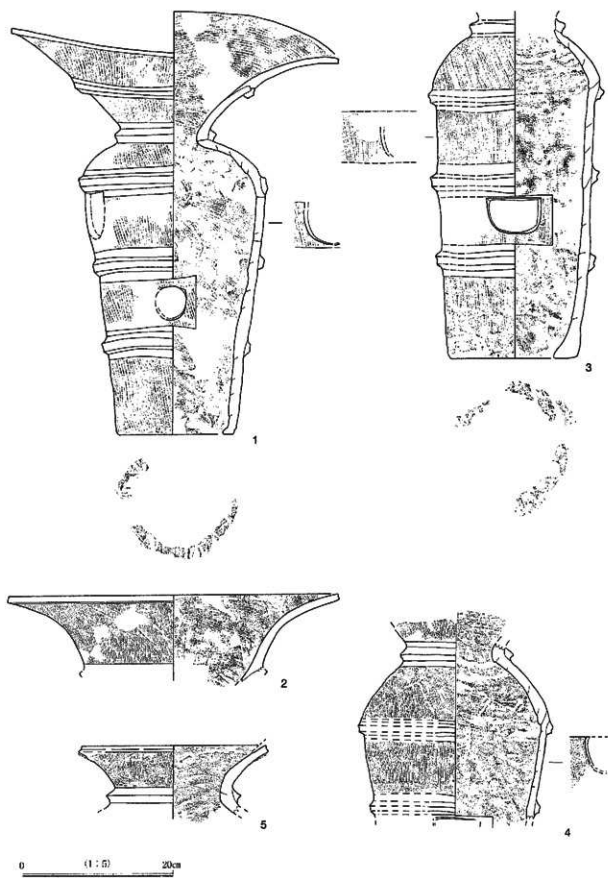
これらの朝顔形円筒埴輪と円筒埴輪の出土状態を再検討してみたい。朝顔形円筒埴輪は各個体が10m前後の間隔を持って出土しているようであり、ある一定の間隔で樹立されていたと想定される。朝顔形円筒埴輪の内、還元焙焼成の1は方形部西側周溝から、同じく8は方形部東側周溝から出土している。円筒埴輪は13Ⅰa類及び13Ⅰb類がほぼ全体に万遍なく出土している状態にあり、おそらく大半に両類が樹立され、その間隙に13Ⅰc類・同d類・同e類が樹立されていたものと推定される。13Ⅰ類は南東部に分布が限定される状態にある。また、13Ⅰa類・同b類の内、小像の付くもの・小像の剥離痕のあるものは南半部に多い傾向が認められる。

土馬は、127・128・129の3点を確認している。127は方形部南西端、128は方形部西側の周溝から、129は東側周溝外寄りからの出土である。いずれも、中実造りで重量感があり、円筒埴輪に付けられていた可能性は低い。129は127に比べて写実的な造りである。

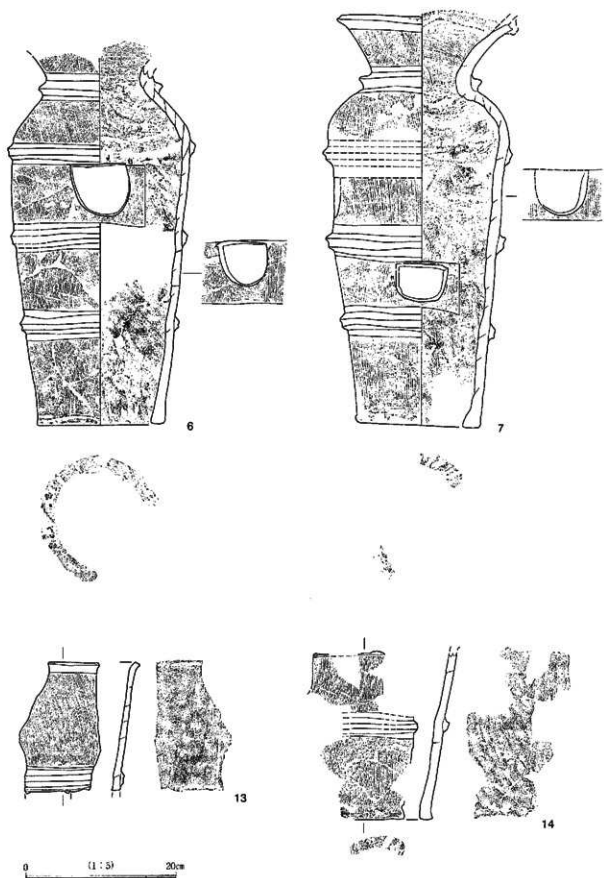
形象埴輪は鶏のみが確認されている(121・131・132)。鶏冠からみて少なくとも大(132)小(131)の2個体が存在していたと考えられる。131は方形部の東側周溝から、132は同じく方形部西側の周溝から出土している。両遺物にあまり大きな移動がなかったと仮定すれば、2個体の鶏形埴輪が方形部の東西端に樹立されていたと推測できる。121は鶏形埴輪の胴部と判断したもので、胴部左側に羽が鋭刻表現されている。方形部東側の周溝から出土したものである。断定はできないが、胎土が131と類似しており同一個体である可能性がある。

埴は133・134の2点が、西側周溝の底面から出土している。

遺物総重量667.6kg。掲載遺物134点。

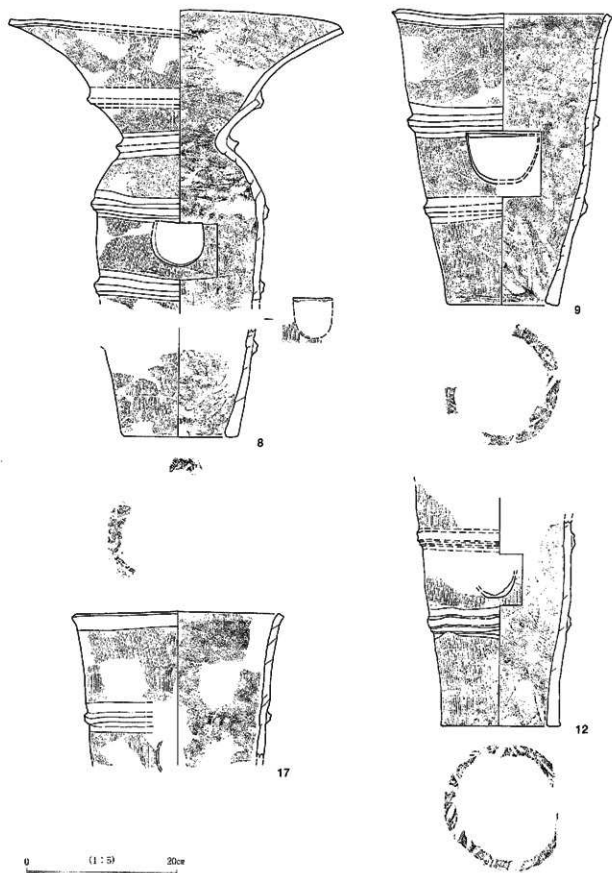


第155図 13号古墳出土遺物①

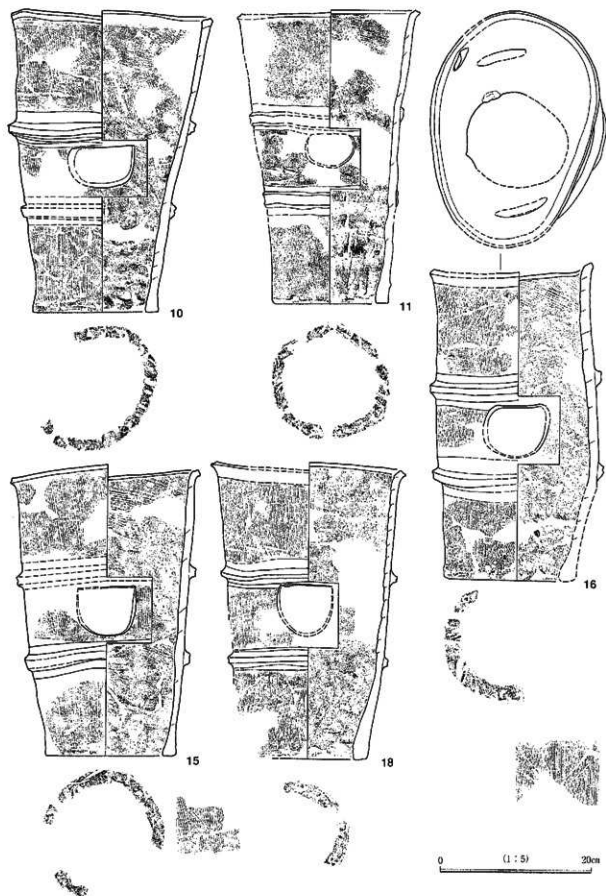


第156図 13号古墳出土土遺物②

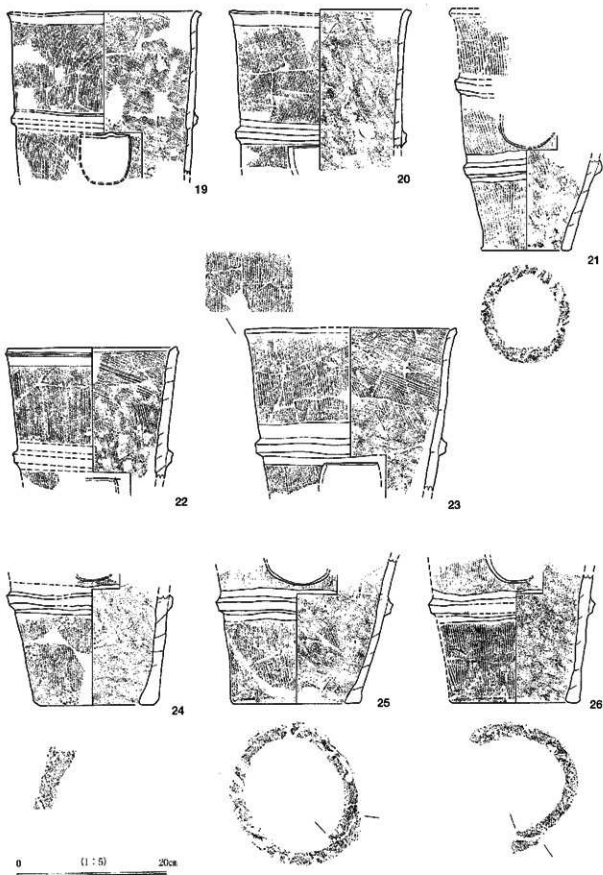




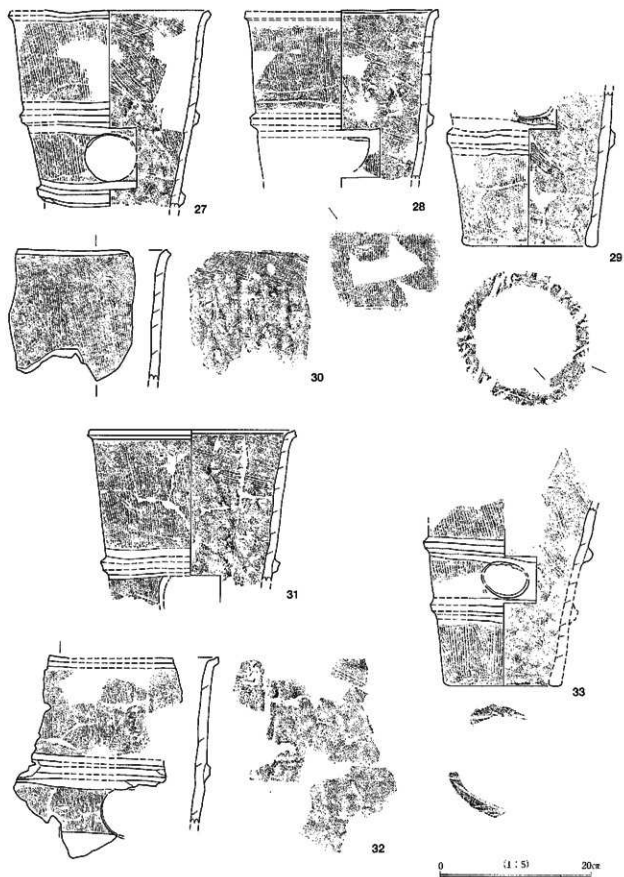
第157図 13号古墳出土遺物③



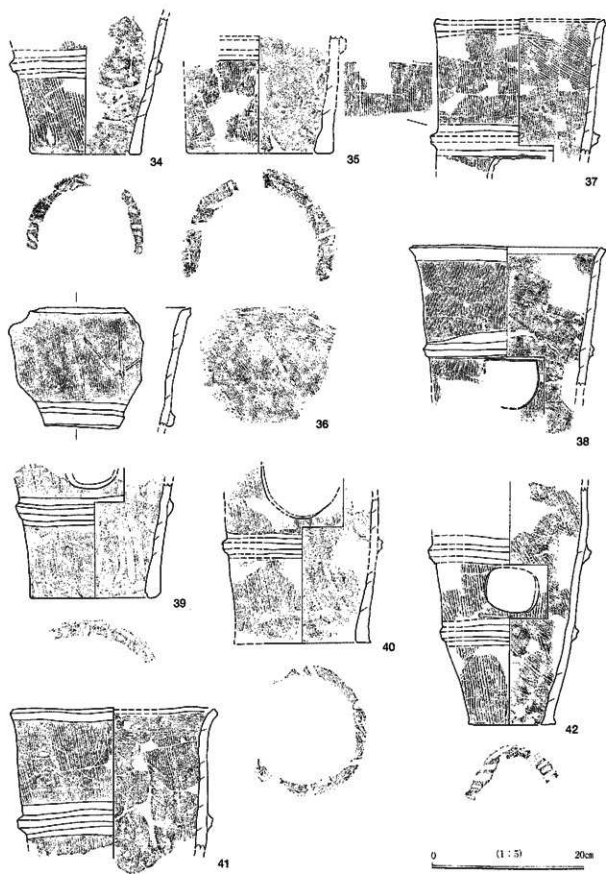
第158図 13号古墳出土遺物④



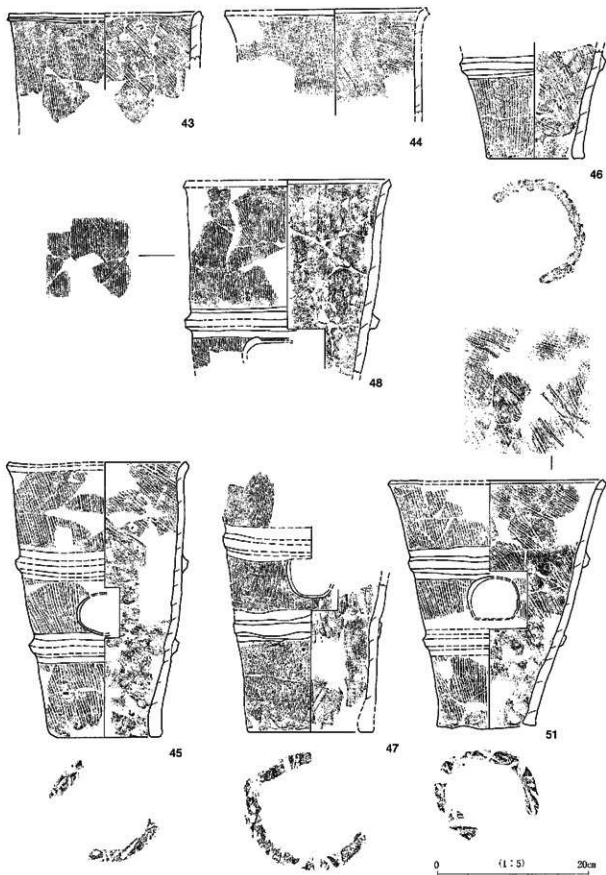
第159圖 13号古墳出土遺物⑤



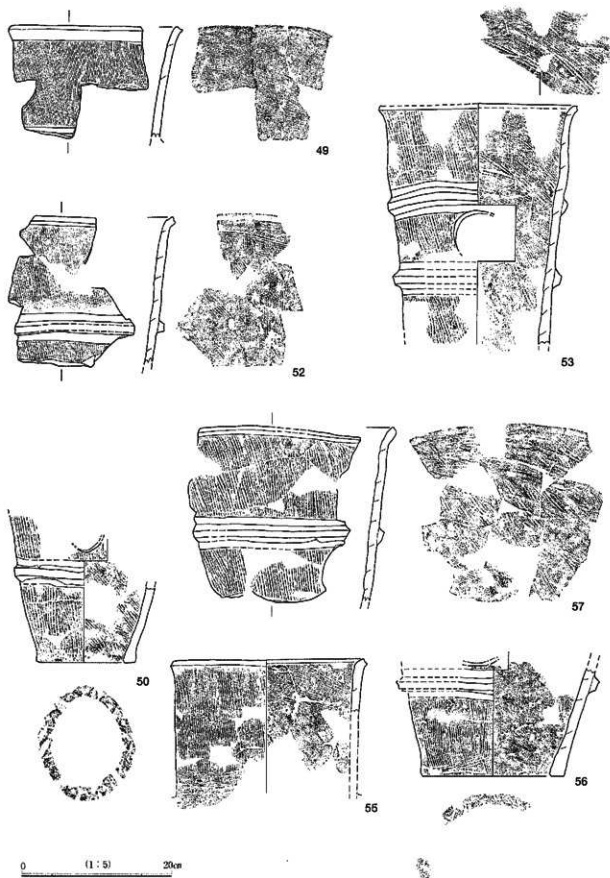
第160図 13号古墳出土遺物⑥



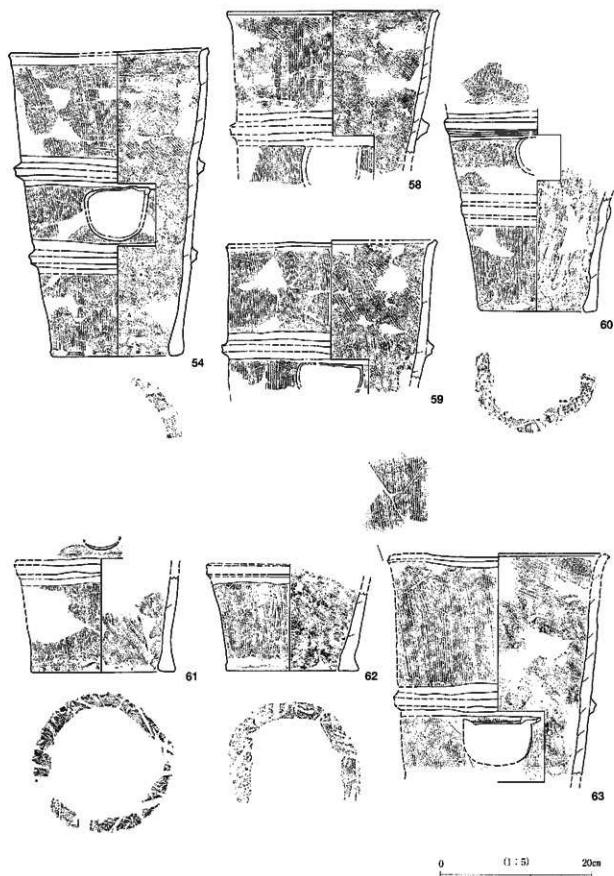
第161図 13号古墳出土遺物②



第162図 13号古墳出土遺物③

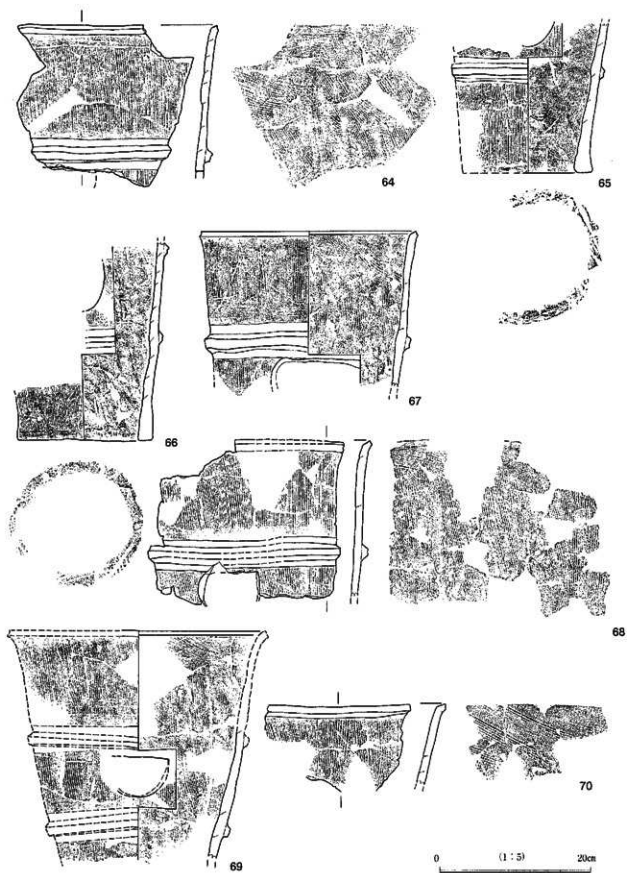


第163図 13号古墳出土遺物⑨

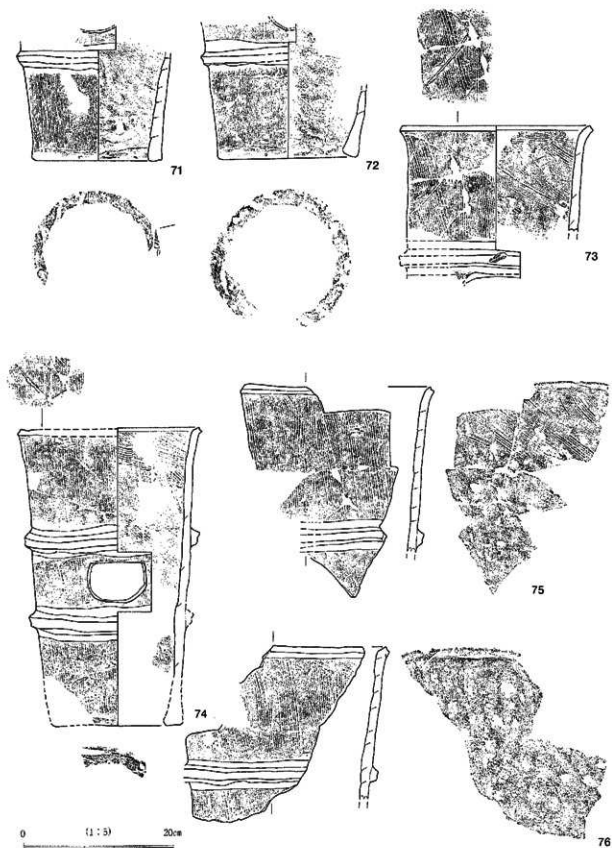


第164図 13号古墳出土遺物④

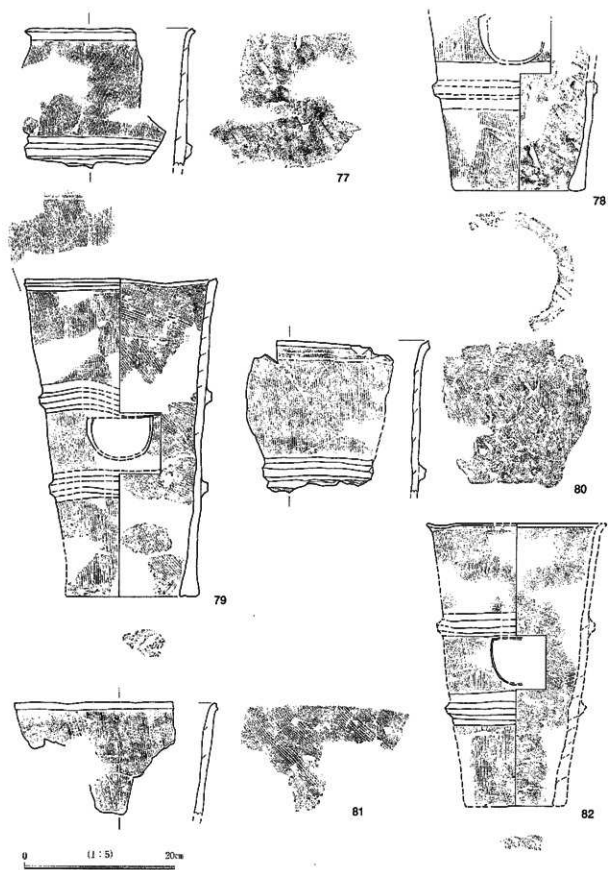




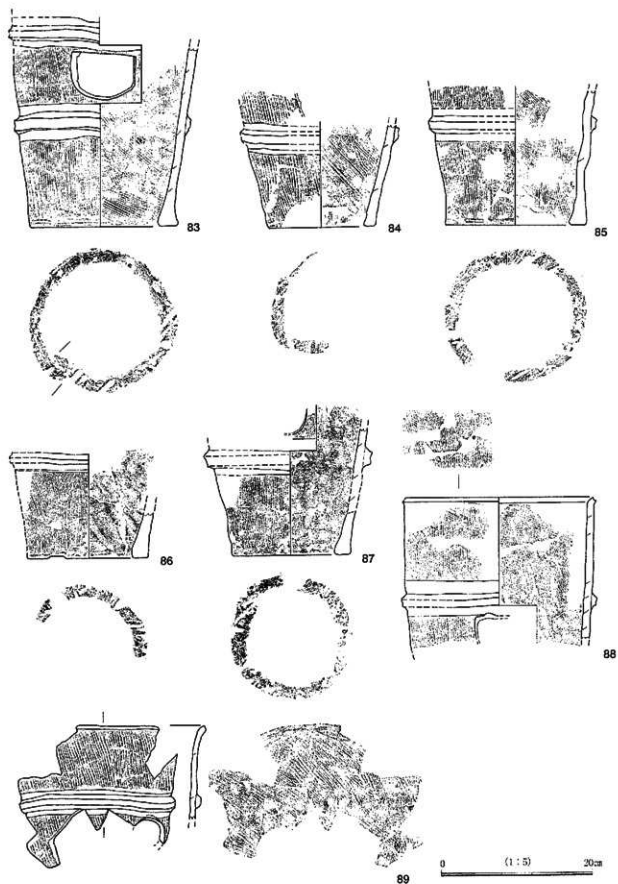
第165図 13号古墳出土遺物①



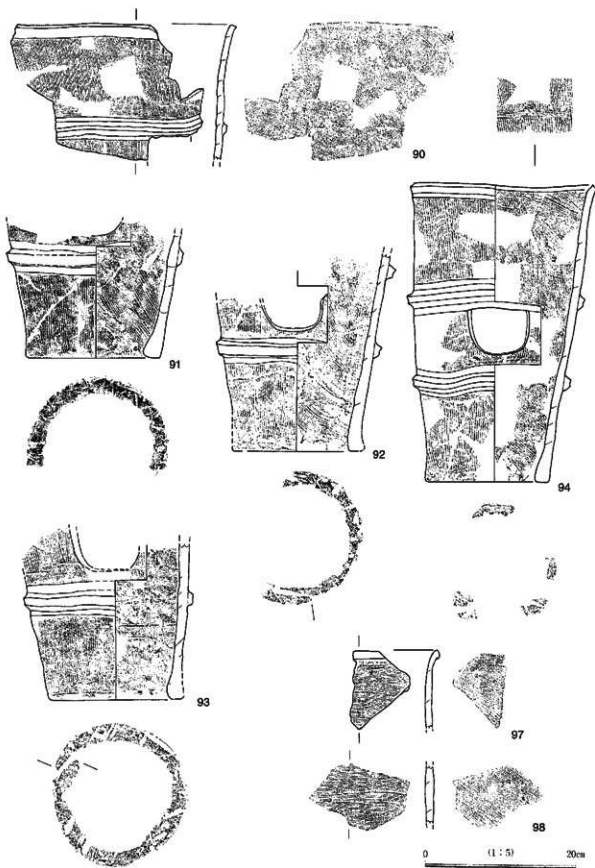
第166図 13号古墳出土遺物②



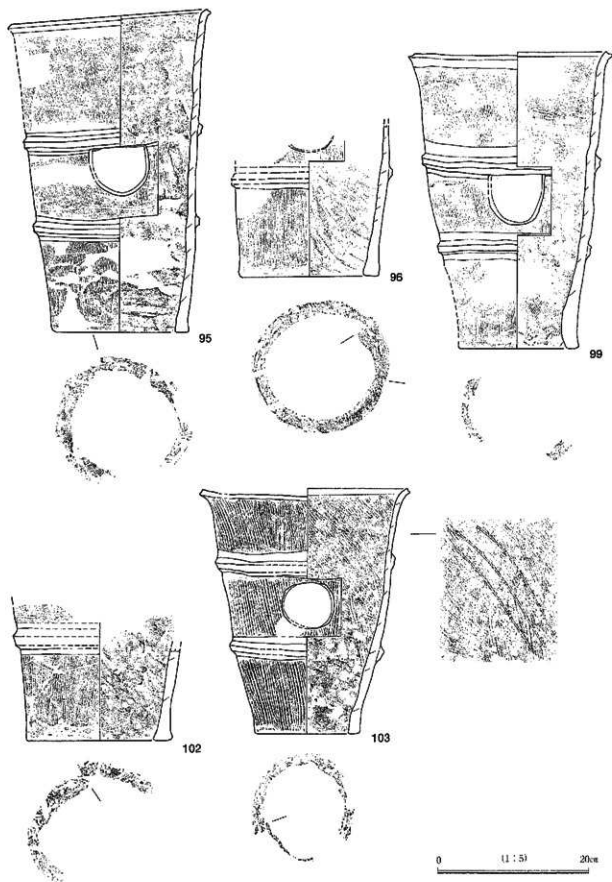
第167図 13号古墳出土遺物③



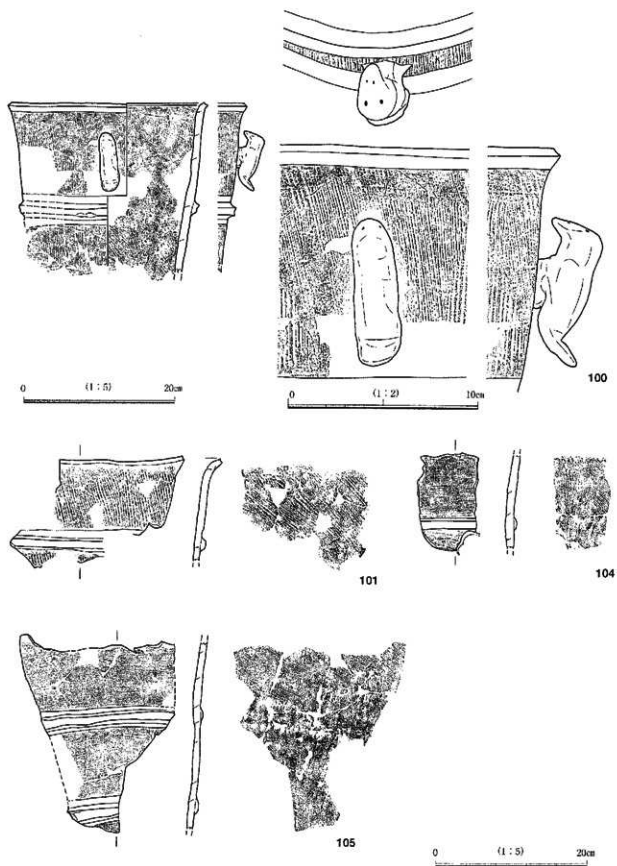
第168図 13号古墳出土遺物②



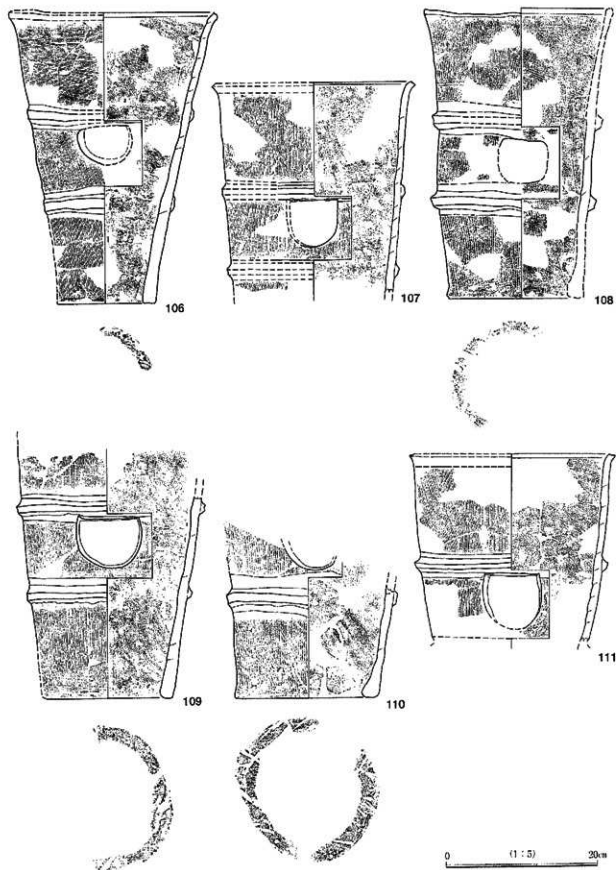
第169圖 13号古墳出土遺物⑮



第170図 13号古墳出土遺物④

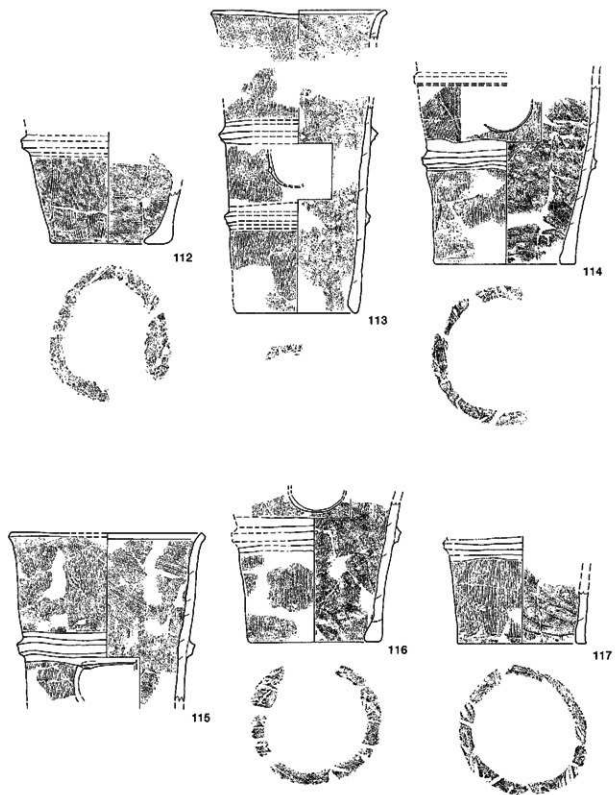


第171図 13号古墳出土遺物(1)

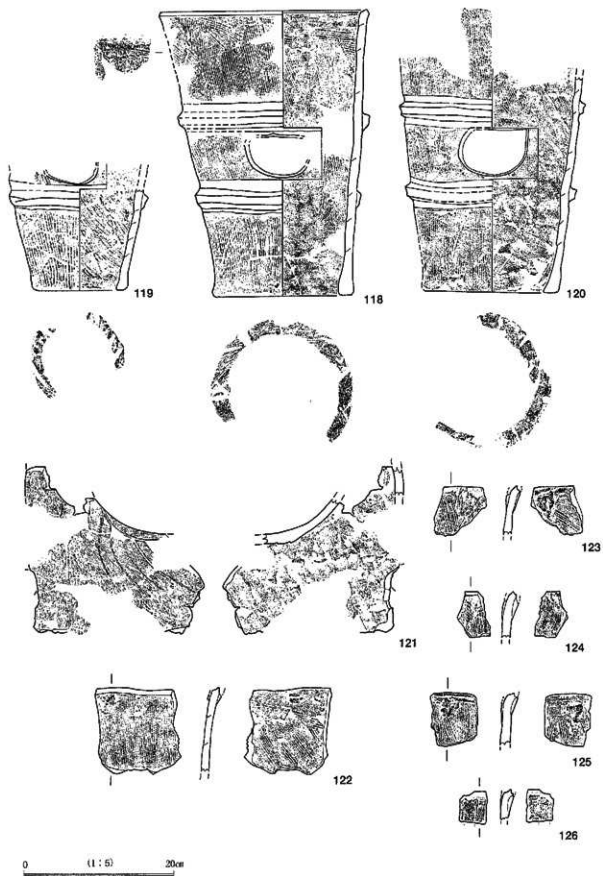


第172図 13号古墳出土遺物⑤

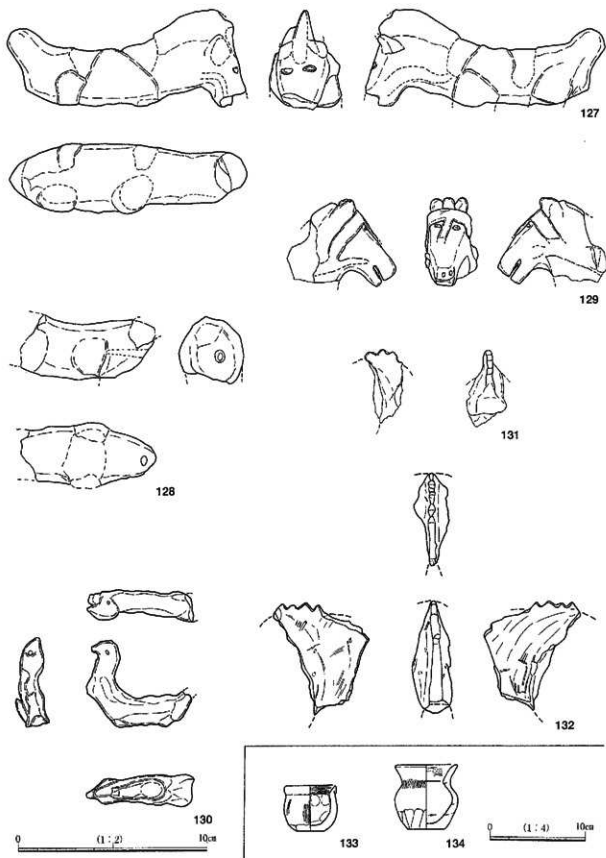




第173図 13号古墳出土遺物⑧



第174図 13号古墳出土遺物②



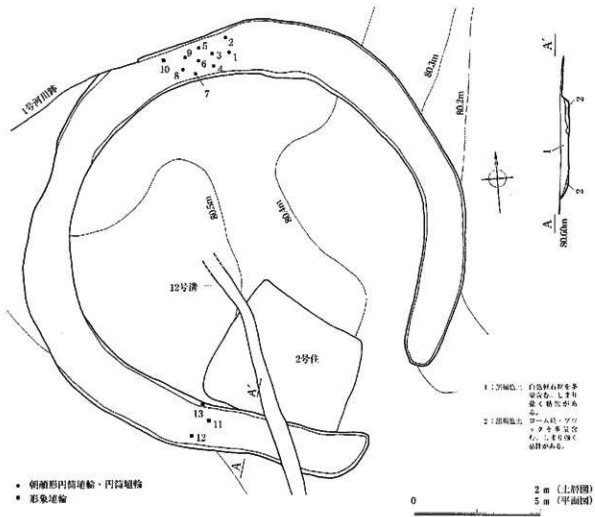
第175図 13号古墳出土遺物②

## 14号古墳 (遺構:第176図、P.L77 遺物:第177図、P.L121、観察表P49)

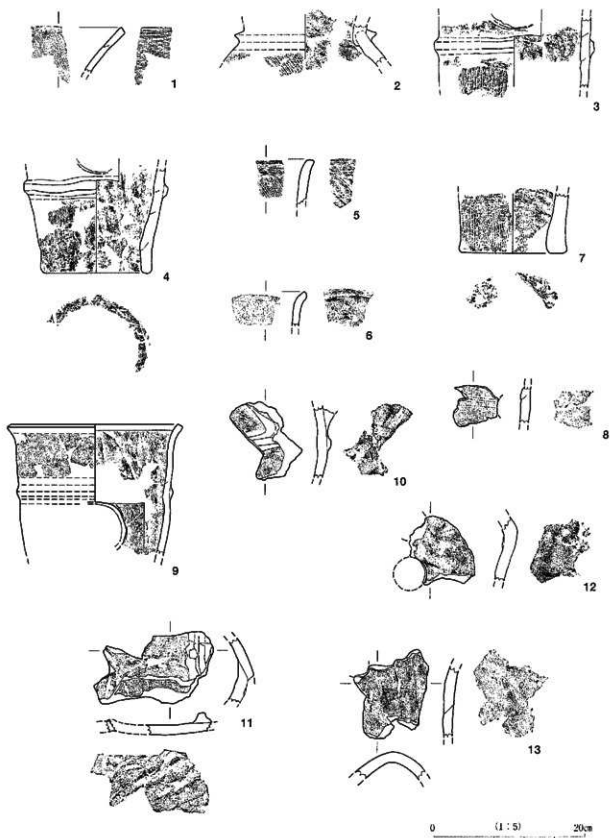
位置:M10~N11グリッド。東側に13号古墳、南西に16号古墳、北西に15号古墳が隣接。重複:2号住居跡を切り、12号溝に切られる。形態:円墳。規模:径16.0m。墳丘:既に削平。墓石:なし。主体部:削平のため不明。墳丘部面積:154.5㎡。周溝部面積:93.3㎡。周溝:南東部にブリッジを有す。断面形態は箱状。上端最大幅2.30m。下端最大幅2.02m。残存深度15cm弱。埋没土は白色軽石粒等を含む黒褐色土で残存部分においてFAは確認されなかった。時期:5世紀後半頃と想定される。

遺物出土状態:遺存状態があまり良好ではないため、まばらな分布状態である。遺物はすべて周溝内に流れ込んでおり、周溝北側から朝顔形円筒埴輪・円筒埴輪、南側から形象埴輪(馬)片が出土している。

遺物:朝顔形円筒埴輪は、いずれも破片で括れ部凸帯は断面三角形である。円筒埴輪は、全容を把握できるものはなかったが、各段の状態から凸帯2条3段構成と推測される。凸帯はM字状~台形で、三角形のもの(9)もある。外面整形は一次縦ハケのものが大半で、二次横ハケ(B種)を施すもの(8)もわずかに存在する。ヘラ記号は5の内面第3段に斜め線がみられる。赤彩は全体の20%程度に確認される。形象埴輪には馬形埴輪があり、10~13はいずれも部分破片であるが同一個体と思われる。一部に赤彩が認められる。遺物総重量6.6kg。掲載遺物13点。



第176図 14号古墳

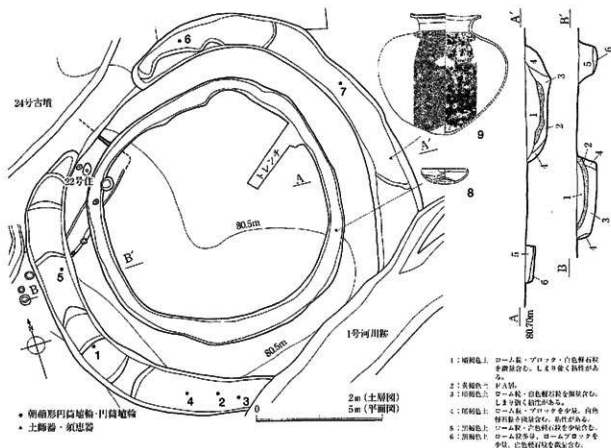


第177図 14号古墳出土遺物

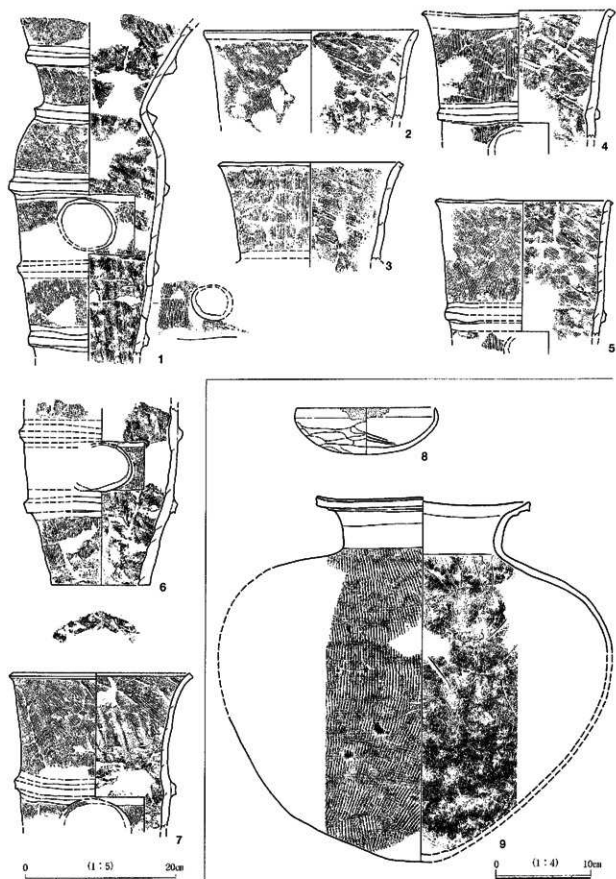
## 15号古墳 (遺構:第178図、P.L.78・87 遺物:第179図、P.L.121・122、観察表P.50)

位置: N12~O13グリッド。北西に24号古墳、南東に14号古墳が隣接。重複: 22号住居跡を切り、南東部の周溝は1号河川跡に切られる。調査前には西側に南北方向のアスファルト道路が存在しており、同道路の側溝は墳丘部下面にまで及んでいた。形態: 円墳。2重の周溝が存在するが、これは墳丘構築工程によるものと思われる。まず内側の「周溝」を掘って中央部に盛り土し、次に外側の周溝を掘って最終的な墳丘を完成させたのであろう。したがって、内側「周溝」は墳丘下に存在していたものと考えられる。規模: 径13.3m。内側径9.2m。墳丘: 既に削平。墓石: なし。主体部: 削平のため不明。墳丘部面積: 126.9㎡。内側60.4㎡。周溝部面積: 外側推定70.2㎡。内側27.7㎡。周溝: 外側周溝は北西部にブリッジを有し24号古墳周溝を避ける状態にある。また、掘削時の作業単位と思われる段差がみられる。上端最大幅1.98m。下端最大幅1.48m。残存深度34m。埋没土はローム粒・ロームブロック等を含む暗褐色土で、底面より4~14cm上にFA(2層)が堆積する。内側周溝は全周する。上端最大幅1.04m。下端最大幅0.85m。残存深度30cm。埋没土は黒褐色土で、FAの堆積は認められない。備考: 24号墳との位置関係から本古墳の方が新しいと判断される。時期: 5世紀後半と想定される。

遺物出土状態: 朝顔形円筒埴輪・円筒埴輪は外側周溝に流れ込んだ状態で出土している。また、須恵器甕が外側周溝のFA下から出土している。内側周溝からは土師器坏が出土しているが、埴輪はみられない。遺物: 円筒埴輪は全容が把握できるものはないが、各段の状態から凸帯2条3段構成と想定される。凸帯はM字状~台形で、透し孔は円形を基調とする。外面整形は基本的に一次擬ハケのみで、斜めにハケ目を施すものも多い。なお、二次横ハケを施すものは確認されなかった。ヘラ記号・赤彩を施すものもみられない。須恵器甕は陶邑編年のTK208段階に位置付けられる。遺物総重量18.2kg。掲載遺物9点。



第178図 15号古墳



第179図 15号古墳出土遺物

## 16号古墳 (遺構:第180・181図, P.L79・80 遺物:第182~197図, P.L123~130, 観察表P51)

位置: H11~L15グリッド。北東に13号・14号・25号古墳, 北西に17号古墳, 南西に1号古墳が隣接。重複: 墳丘部下にあたる位置に、古墳時代前期の4号・8号・9号住居跡、周溝内に時期不明の12号土坑がある。5号方形周溝墓を切る。平安時代には周溝部全体が水田として利用されており(第4章第5節7)、水路と思われる4号・11号・16号・24号などの溝が、周溝外周に沿って位置している。また、調査前には、ほぼ中央に南北方向のアスファルト道路が存在しており、同道路の側溝は墳丘部下面にまで及んでいた。形態: 帆立貝形古墳。西南西に方形部。主軸方位N-65°-E。規模: 全長44.9m。本遺跡古墳群中で最大規模。円丘部径36.1m。方形部長7.9m。方形部幅11.6m。括れ部幅6.8m。墳丘: 既に削平。墓石: なし。主体部: 削平のため不明。墳丘部面積: 1,130.5㎡。周溝部面積: 1,499.3㎡。周溝: 楕円形状に全周する。他の帆立貝形古墳に比べると円形に近い。断面形態は箱状で、多少の凹凸・起伏がみられる。上端最大幅9.70m。下端最大幅9.30m。埋没土は、ローム粒・ロームブロック等を含む黒褐色土を基調とし、底面もしくは底面より5~10cmほど上にFA(4層)が堆積する。時期: 5世紀後半~末葉頃と想定される。

遺物出土状態: 前述したように周溝部が浅間B軒石下水田に利用されていたこともあり、遺物は細かく破砕しているものが多い。周溝部墳丘寄りに流れ込んだ状態のものが多く、墳丘裾部や方形部にも少量の遺物が見られる。また、墳丘部にも削平の際に移動したと思われる遺物がわずかにみられる。朝顔形円筒埴輪はある程度の間隔を持って出土している。形象埴輪は西下部に多い傾向が認められるが、構形埴輪と判断した遺物は南東部の周溝から出土している。方形部には上馬などの遺物がみられる。

遺物: 朝顔形円筒埴輪・円筒埴輪・形象埴輪(鶏・構形、等)・土馬・須恵器(甗・高坏)がある。

朝顔形円筒埴輪は全容が把握できるものはないが、他の古墳出土のものと同様であると判断し6段構成と想定した。疑似口縁上に最上段を接合する。次の2種類に大別される。凸帯M字状~台形で、括れ部凸帯は三角形、外面整形は一次縦ハケで、第4段にのみ二次横ハケを施すもの(3・5・6)。凸帯低いM字状で、括れ部凸帯もM字状、外面整形は一次縦ハケのみのもの(2・4・7)。後者には外面第4段にへら記号がある。

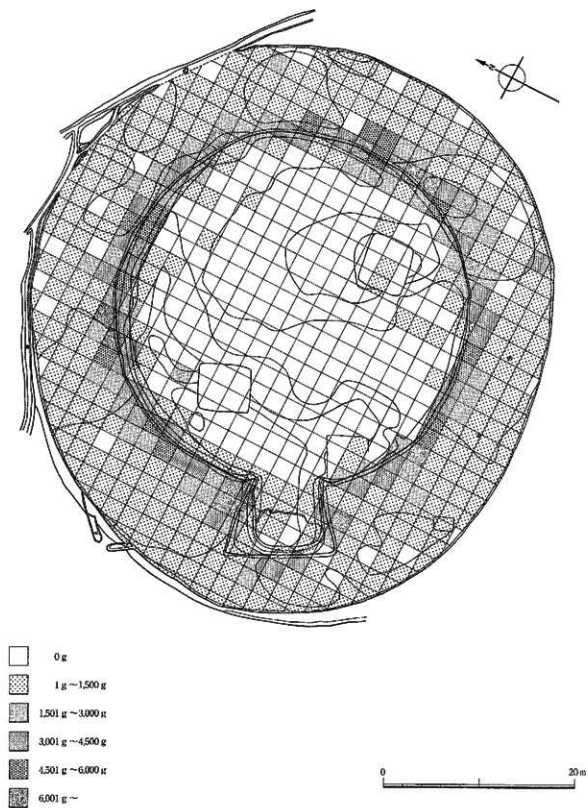
円筒埴輪は凸帯2条3段構成と想定され、円形透し孔・M字状~台形凸帯のものが多く。外面整形は、一次縦ハケのみのものが大半であり、二次横ハケ(B種)を施すものは全体の5%前後で極めて客体的に存在する。また、45のように極端な斜めハケを施すものもわずかに認められる。円筒埴輪の内、全容が把握できるものは13・37・51の3点のみであるが、器高32cm前後のもの(13)、器高36cm前後のもの(37・51)が存在するようである。また、100は藤手の造りで、器面全体に円凸がありやや異質な円筒埴輪である。第3段下端に小円形孔を1か所穿つ。38・39・46・47・53・95・110・111なども100と同種類と考えられる。そのほかにも、いくつかのバリエーションが認められる。へら記号は、内面第3段を中心に条線を描くもの(54)1点を確認している。赤彩は円筒埴輪全体の60%ほどに施されている。

形象埴輪には鶏(118・119)のほか、草摺と思われる破片がある(121・122)。123は鶴の、126は人物埴輪の美豆良の可能性もあるが断定はできない。88・127は凸帯の上が三角形となる破片で構形埴輪と判断した。2点とも横断面は弧状であることから、円筒形の上に運らされていたものと思われる。88の三角形部分は一辺4.1cm、高さ3.1cm、同じく127は一辺3.3cm、高さ2.1cmである。

須恵器甗(116)は、破片であるが口縁部と頸部に波状文がある。高坏(117)は脚部破片であるが長脚1段透し2か所と推測される。

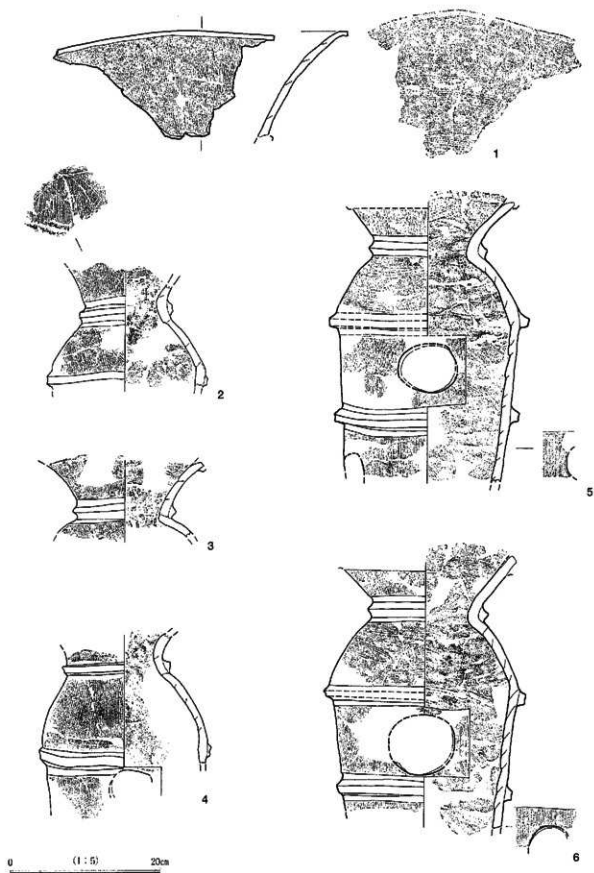
遺物総重量1,130.5kg。掲載遺物127点。



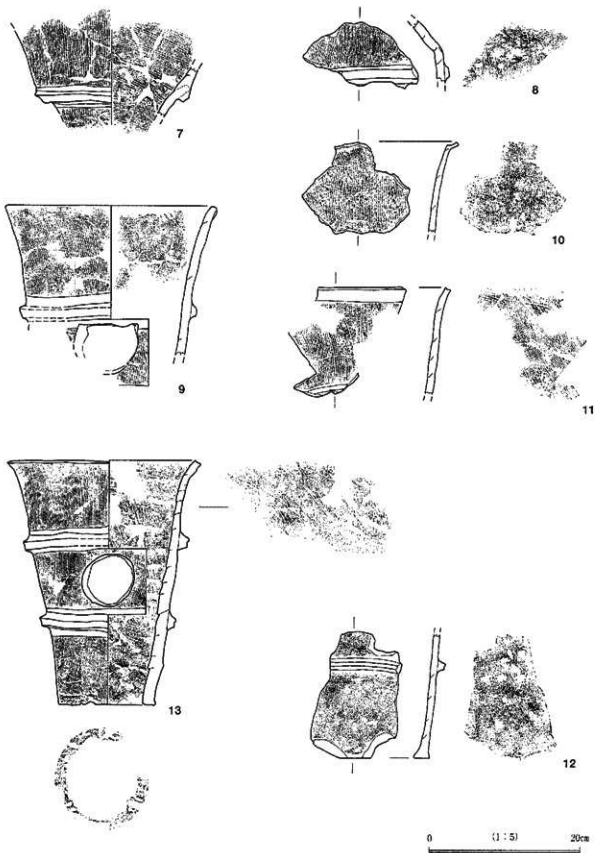


第180図 16号古墳遺物出土状態図

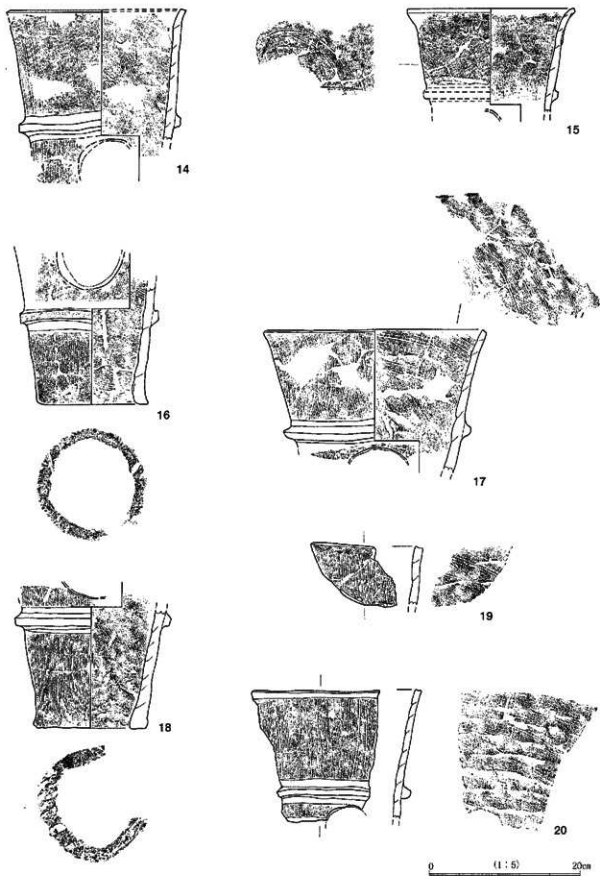




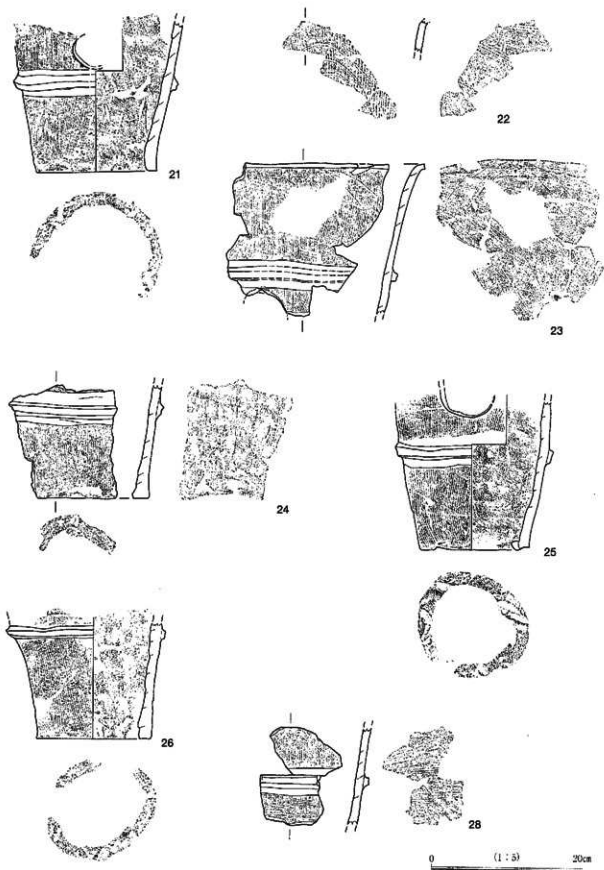
第182図 16号古墳出土遺物①



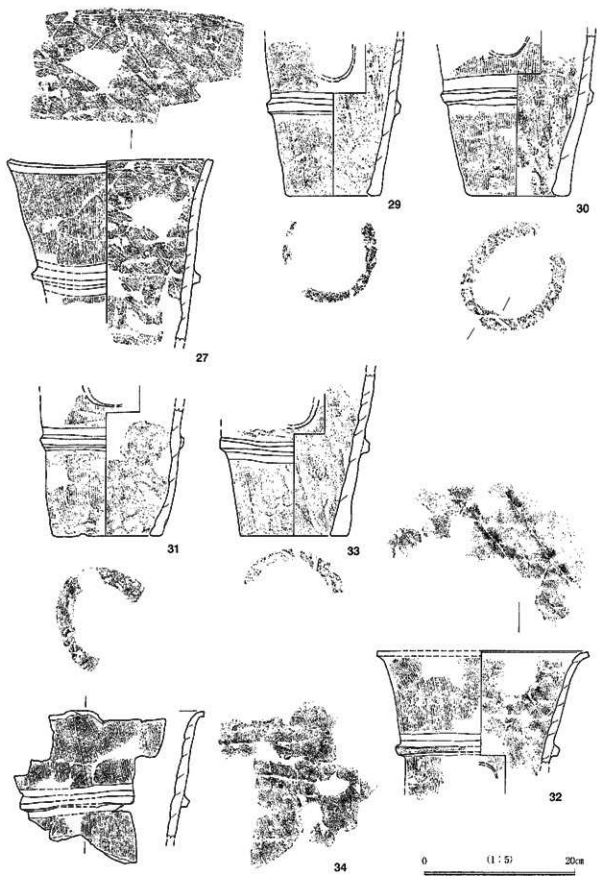
第183図 16号古墳出土遺物②



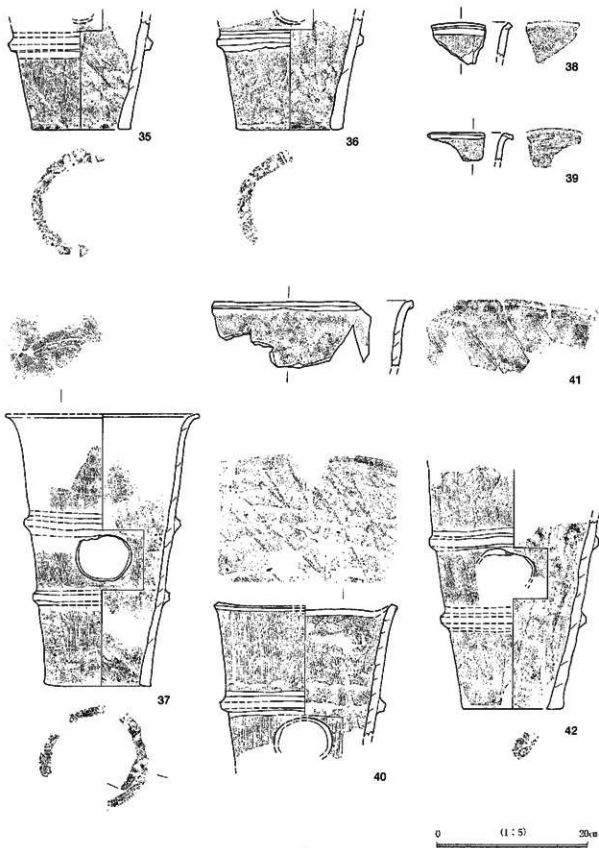
第184図 16号古墳出土遺物③



第185図 16号古墳出土遺物④

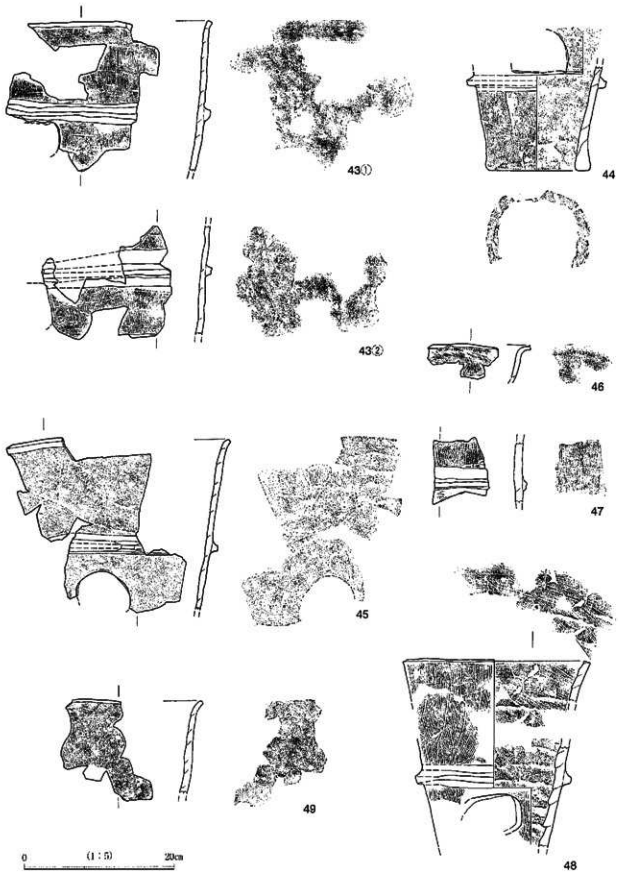


第186図 16号古墳出土遺物⑤

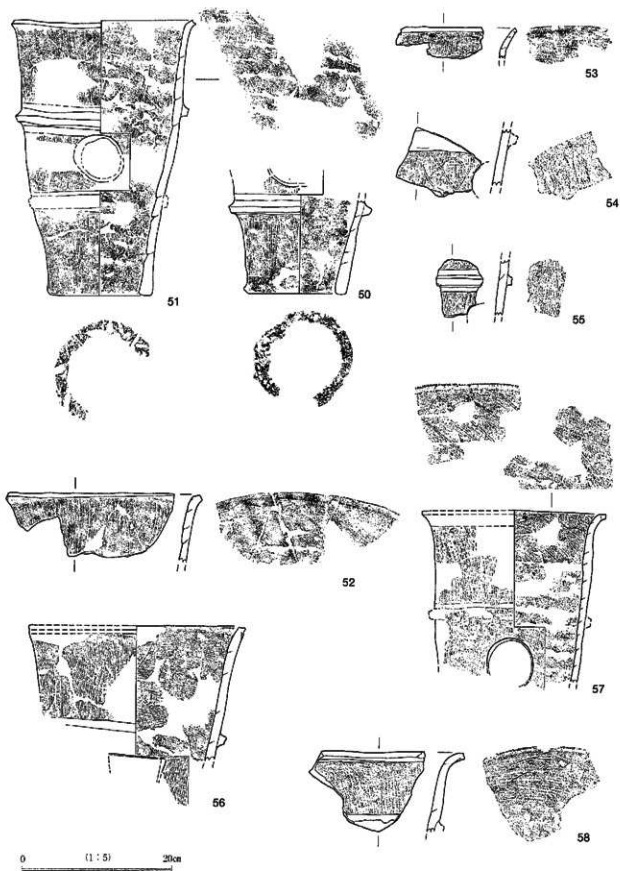


第187図 16号古墳出土遺物⑧

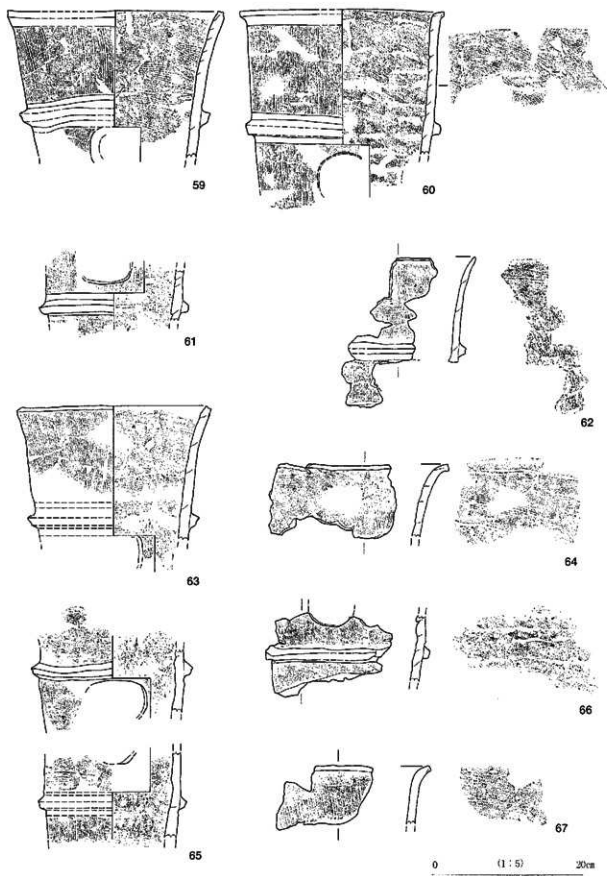




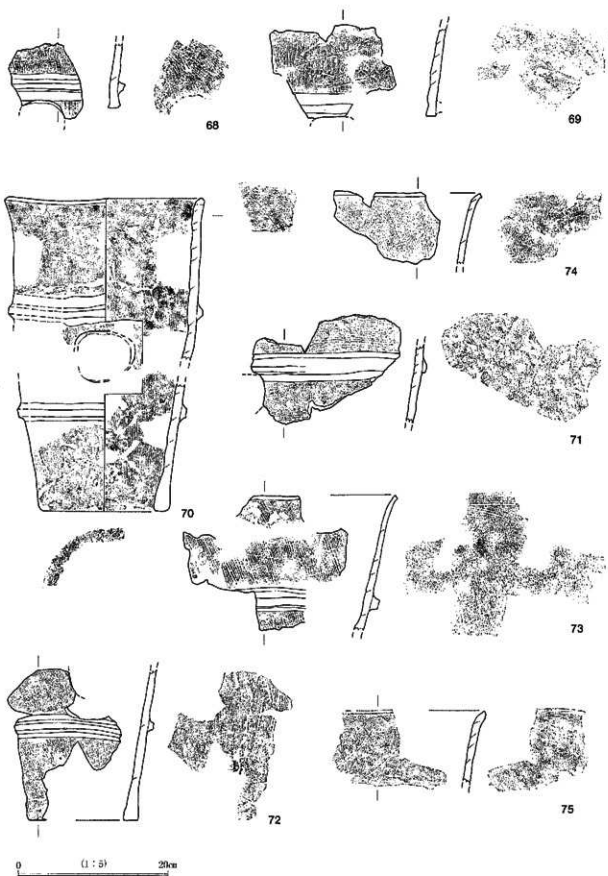
第188圖 16号古墳出土遺物②



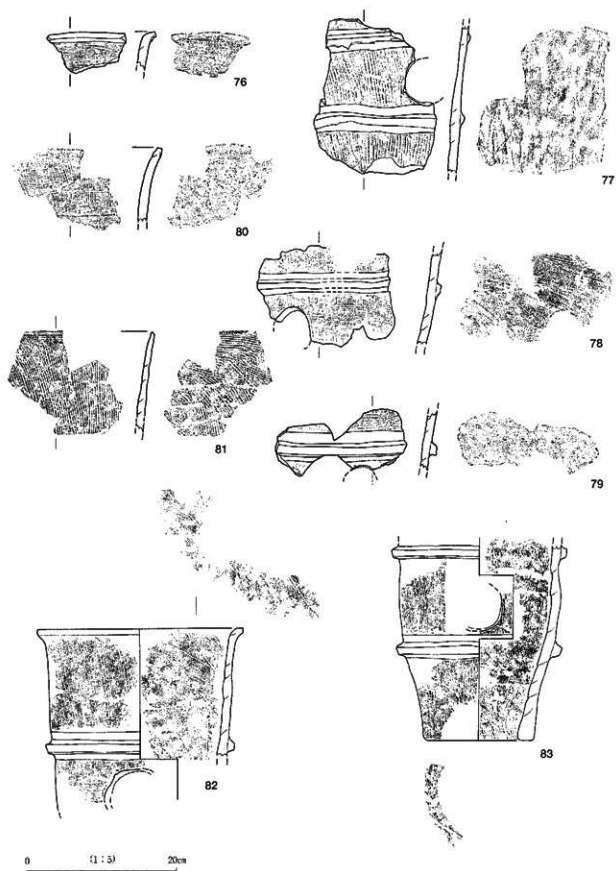
第189図 16号古墳出土遺物⑧



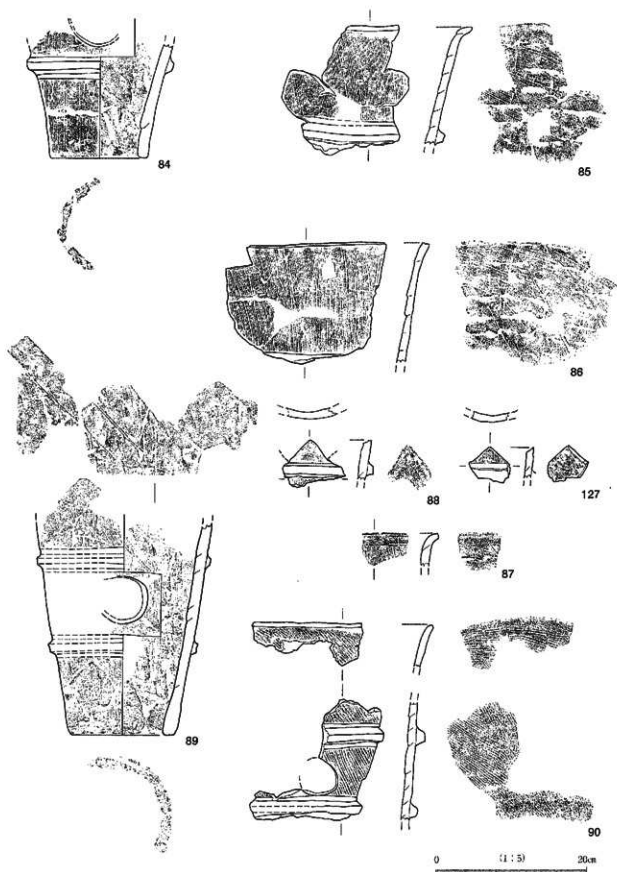
第190図 16号古墳出土遺物③



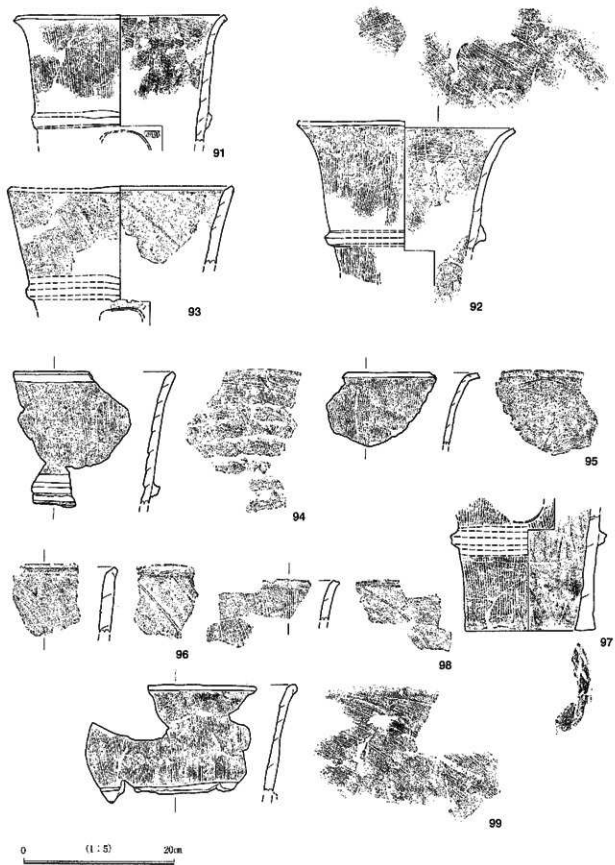
第191図 16号古墳出土遺物⑩



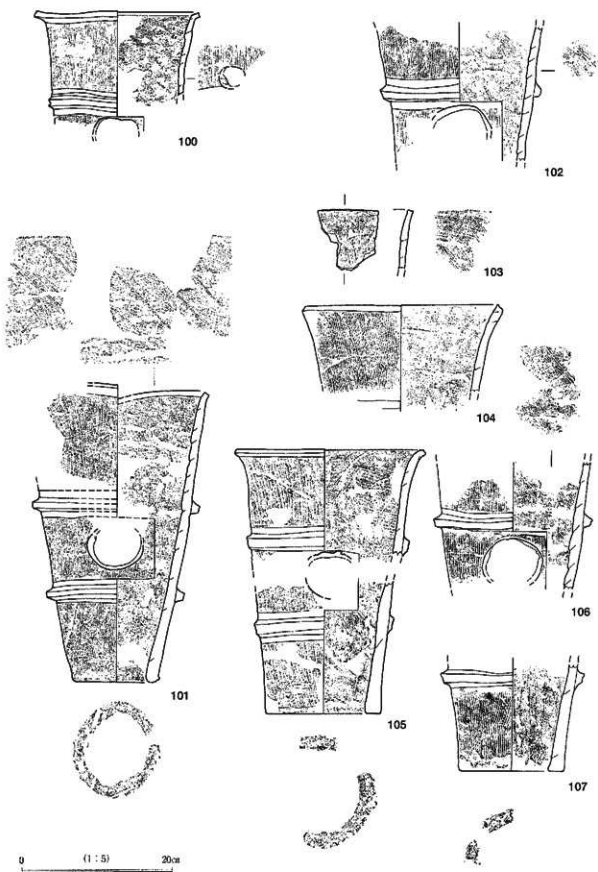
第192図 16号古墳出土遺物①



第193図 16号古墳出土遺物②

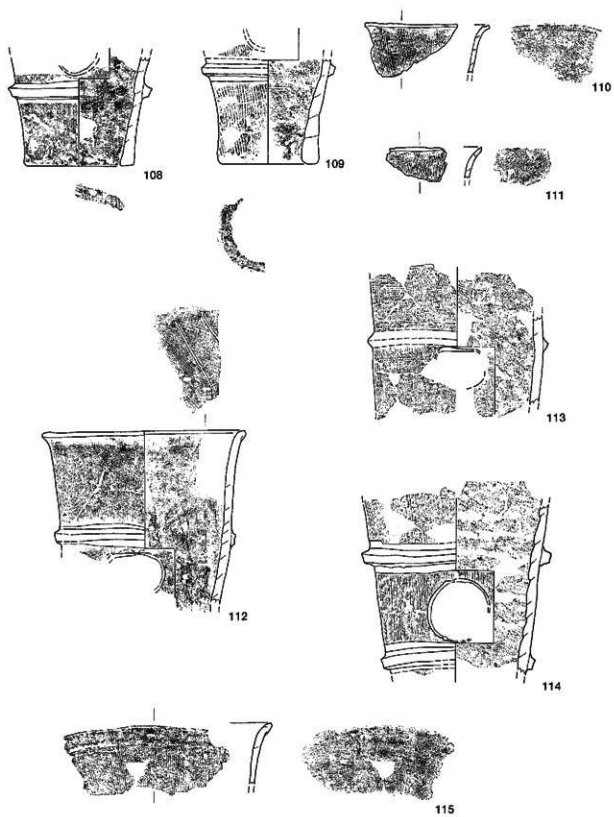


第194図 16号古墳出土遺物③

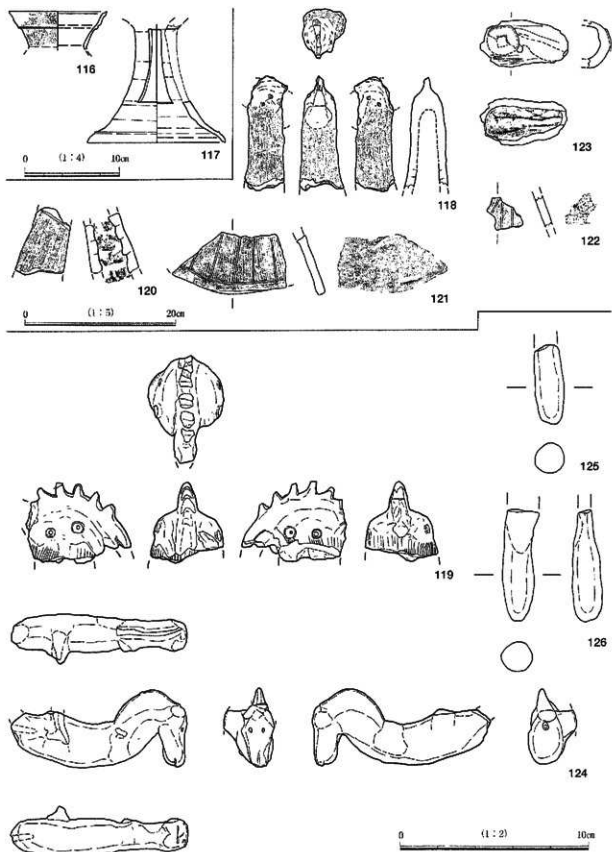


第195図 16号古墳出土遺物④





第196図 16号古墳出土遺物⑤



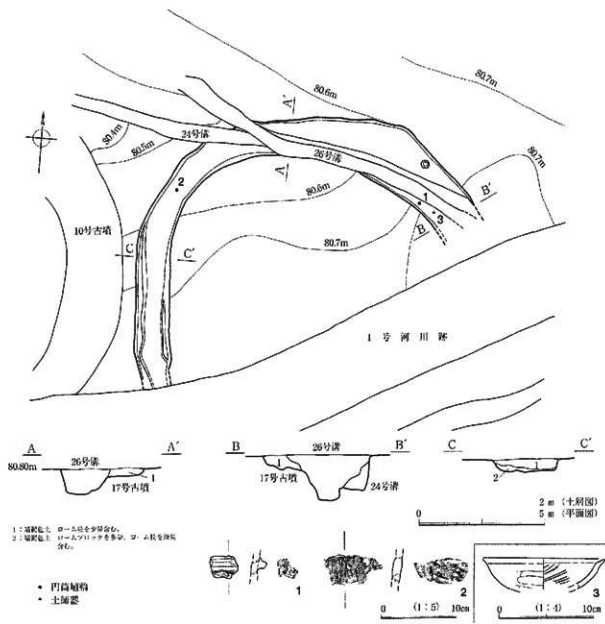
第197図 16号古墳出土遺物<sup>16)</sup>

## 17号古墳 (遺構：第198図、P L 80 遺物：第198図、P L 131、観察表 P 59)

位置：L15～M16グリッド。西側に10号古墳、北側に26号古墳、南西に16号古墳が隣接。重複：24号・26号溝及び1号河川跡に切れ南側半分は残存していない。形態：円墳と想定される。規模：径12.2m。墳丘：既に削平。葺石：なし。主体部：削平のため不明。墳丘部面積・周溝部面積：不明。周溝：断面形態は箱状で底面はやや凹凸・起伏がみられる。上端最大幅2.50m。下端最大幅2.31m。残存深度20cm。埋没土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土で、残存部分においてF Aは確認されなかった。時期：5世紀末葉～6世紀初頭と想定される。

遺物出土状態：すべて周溝内から出土し、まばらな分布状態である。

遺物：円筒埴輪はすべて小破片である。外面整形は一次縦ハケのみである。そのほか内斜口縁の坏(3)がある。遺物総重量0.2kg。掲載遺物3点。



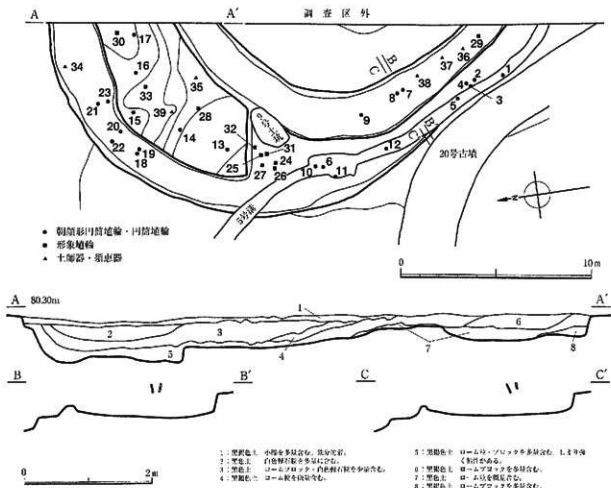
第198図 17号古墳と出土遺物

18号古墳 (遺構：第199図、P.L76 遺物：第200～202図、P.L131・132、観察表P59)

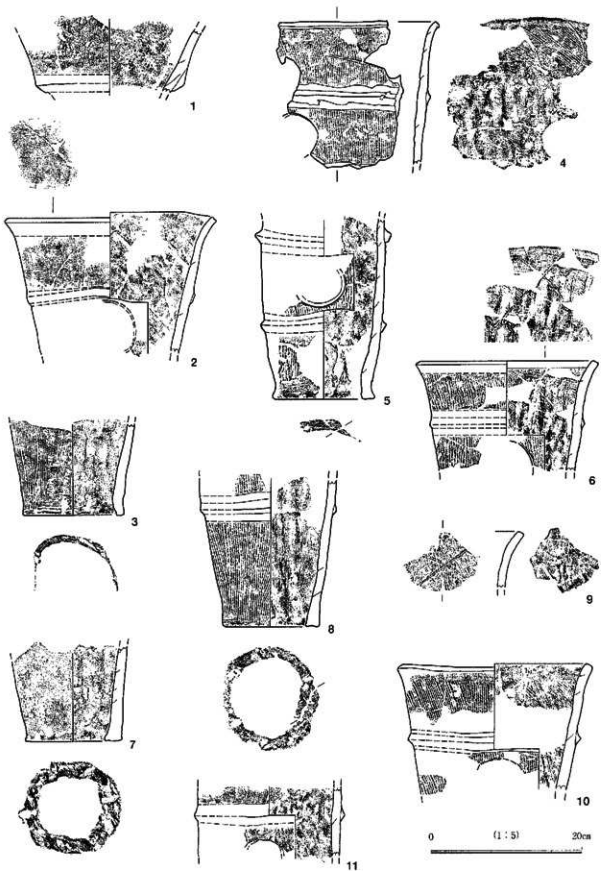
位置：M3～O3グリッド。東大半が南北方向アスファルト道路下の調査区外。西側に19号古墳、南西に20号古墳が隣接。重複：5号溝・9号土坑に切られる。形態：円墳と推定される。規模：不明。墳丘：既に削平。墓石：なし。主体部：不明。墳丘部面積・周溝部面積：不明。周溝：北側は周溝が二重になっているが、どのような性格のものか判断できなかった。土層埋没状態から、外側の周溝が新しと判断され、内側周溝は墳丘構築工程上のものである可能性も考えられる。外側周溝は上端最大幅2.71m・下端最大幅2.32m・残存深度70cm。内側周溝は上端最大幅2.65m・下端最大幅2.19m・残存深度40cm。埋没土は内外周溝ともロームブロック等を含む黒褐色土を基調とする。時期：6世紀中葉頃と想定される。

遺物出土状態：比較的北西部に多く、外側周溝及び内外周溝間に形象埴輪等がみられる。

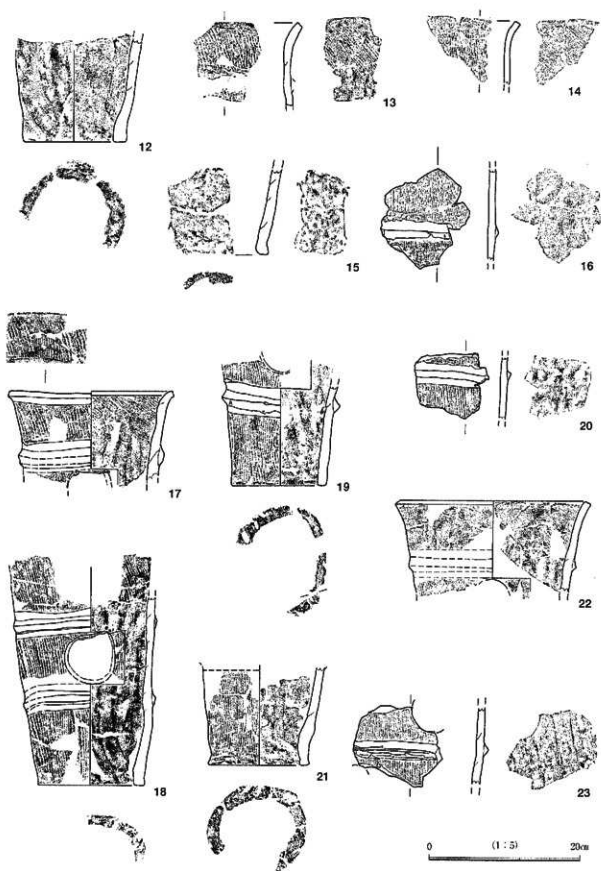
遺物：朝顔形円筒埴輪は破片で全容は不明である。円筒埴輪は全容が把握できるものはないが、各段の状態から凸帯2条3段構成と想定される。外面整形は一次縦ハケのみで、凸帯は三角形のものが大半である。全体の10%ほどに赤彩が施される。ヘラ記号は、外面第3段に「个」(2)、内面第3段に「×」(6・23)、外面第3段に「×」(9)、外面第3段に左上り線1本(4)・同じく2本(17)を確認している。形象埴輪(24～33)は人物と考えられるものが多い。31・32は力士の可能性がある。朝顔形円筒埴輪・円筒埴輪・形象埴輪とも胎土に結晶片岩・白色針状粒の含有が認められる。土師器甕(34)にも胎土に結晶片岩・白色針状粒の含有が認められる。35・36・38は流れ込みの遺物と判断される。遺物総重量107.1kg。掲載遺物39点。



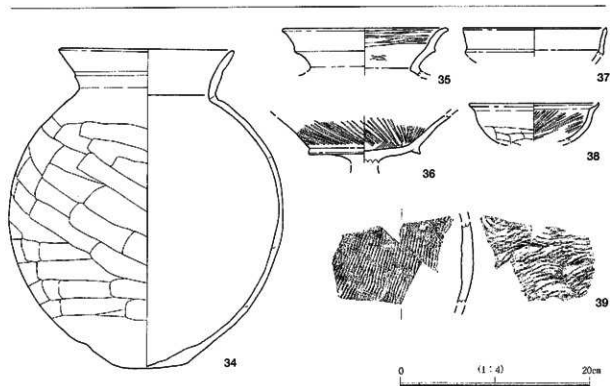
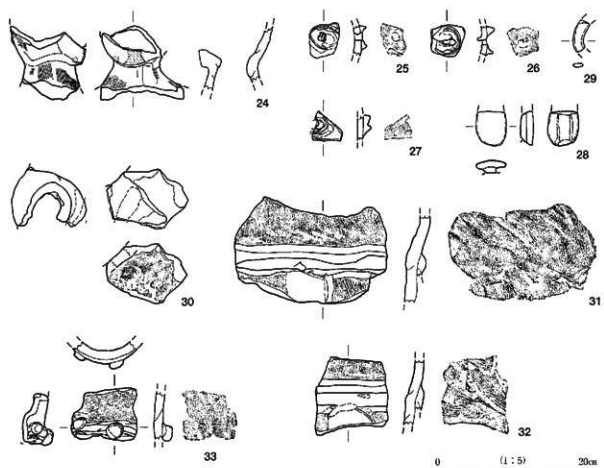
第199図 18号古墳



第200図 18号古墳出土遺物①



第201図 18号古墳出土遺物②

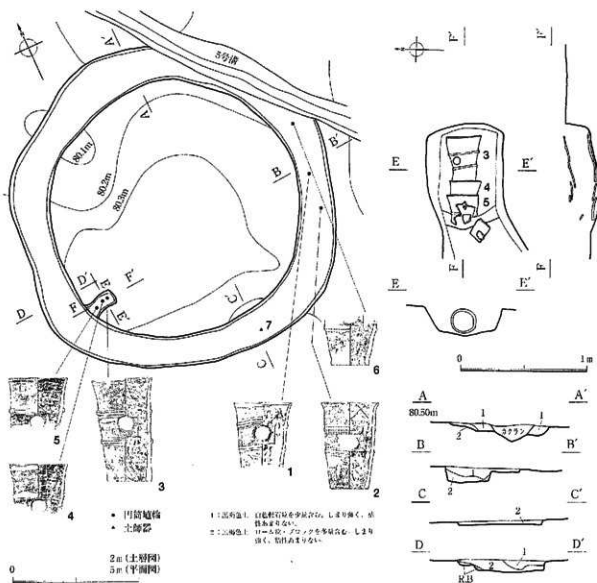


第202図 18号古墳出土遺物③

19号古墳 (遺構：第203図、P.L80・81 遺物：第204図、P.L133、観察表P62)

位置：N4～O5グリッド。東側に18号古墳、南側に20号古墳、西側に13号古墳が隣接。重複：周溝北西側を5号溝に切られる。形態：円墳。規模：径10.4m。墳丘：既に削平。墓石：なし。主体部：削平のため不明。埴輪棺については後述。墳丘部面積：79.1㎡。周溝部面積：57.3㎡。埴輪棺：南西部の墳丘裾に位置。1.10×0.58m・残存深度27cmの長方形土坑を掘り、3個体の円筒埴輪を同方向につなぎ合わせている。3個体の円筒埴輪は東端のものはほぼ完形で、他の2点は上半部のみである。いずれも外面に赤彩が施されている。透し孔の被覆は不明であるが、有機質であった可能性も考えられる。土坑内にはその他の遺物・副葬品等は認められなかった。また、埴輪棺内に骨片は遺存していなかった。周溝：全周。断面形態は箱状を基調とするが北側は凹凸・起伏がやや目立つ。上端最大幅1.92m。下端最大幅1.72m。残存深度20cm。埋設土はローム粒・ロームブロック・白色軽石粒を含む黒褐色土で、残存部分においてF Aは確認されなかった。時期：5世紀末葉～6世紀初頭と想定される。

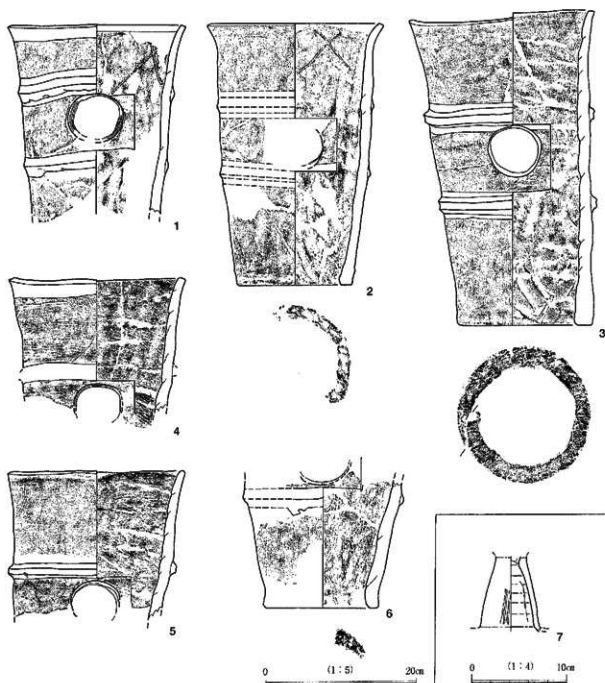
遺物出土状態：埴輪棺のほか、周溝内に流れ込むような状態で円筒埴輪・土師器が出土している。



第203図 19号古墳



遺物：円筒埴輪は周溝内から出土しているもの(19Ⅰ類)と、埴輪棺に使用されたもの(19Ⅱ類)に大別される。いずれも凸帯2条3段構成である。19Ⅰ類(1・2・6)は、器高34.7cm前後と想定され、凸帯三角形で、外面整形は一次縦ハケ後に丁寧なナデを施している。胎土に結晶片岩・白色針状粒の含有が認められる。また、内面第3段にヘラ記号「×」がある。19Ⅱ類は、器高41.6cm前後と想定され19Ⅰ類より大振りである。凸帯はM字状で、外面整形は一次縦ハケ後、部分的に二次横ハケまたは横位のナデを施す。先述したように外面には上半部を中心に赤彩が施される。胎土に結晶片岩・白色針状粒は認められない。遺物総重量21.2kg。掲載遺物7点。



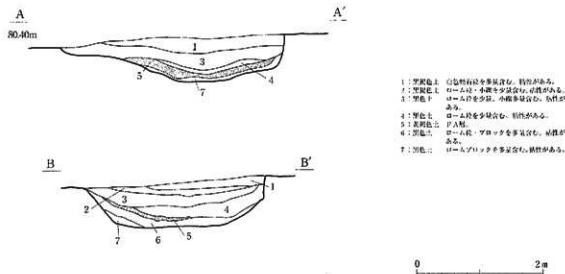
第204図 19号古墳出土遺物

20号古墳 (遺構：第205・206図、P.L.82 遺物：第207～210図、P.L.133～135、観察表P.62)

位置：L3～M5 グリッド。北側に19号古墳、北東に18号古墳、西側に13号古墳が隣接。重複：南側の一部は平安時代水田跡に利用されていた。形態：円墳。規模：18.1m。墳丘：既に削平。墓石：なし。主体部：削平のため不明。墳丘部面積：249.7㎡。岡溝部面積：181.4㎡。岡溝：全周。断面形態はU字状。上端最大幅2.32m。下端最大幅1.84m。残存深度80cm。埋没上はローム粒・ロームブロック・白色軽石粒を含む黒褐色土・黒色土で、底面より5～10cmほど上にF.A(5層)が堆積する。時期：5世紀後半頃と想定される。

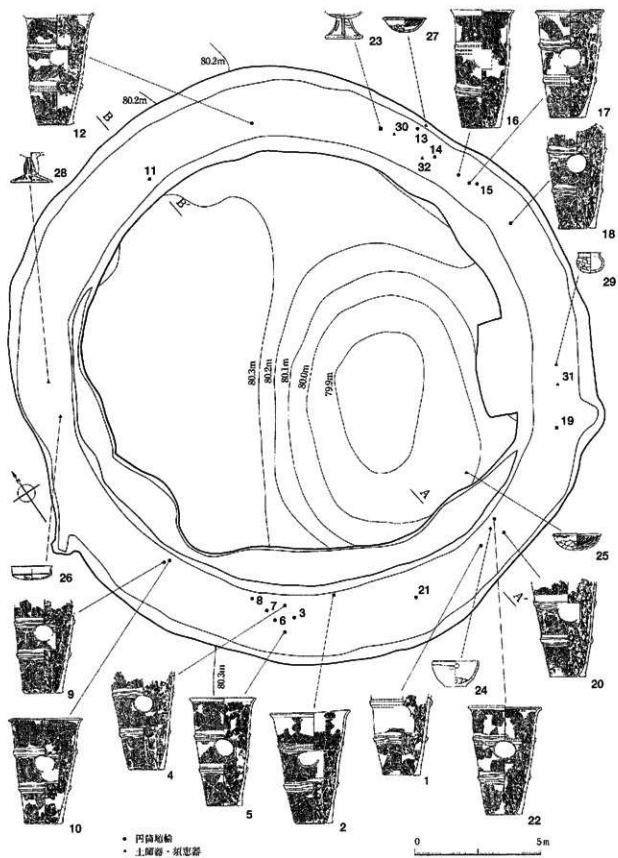
遺物出土状態：すべて岡溝内に流れ込んでいる状態で、比較的岡溝北西部には希薄であった。

遺物：円筒埴輪・形象埴輪片・土師器(埴・坏・高坏・埴)・須恵器(高坏)がある。朝顔形円筒埴輪は確認されなかった。円筒埴輪は凸帯2条3段構成で、口縁部が外反し、凸帯は低い三角形～台形、透し孔は円形・楕円形を基調とする。外面整形は、次縦ハケのみで、10のように上端部に横ハケを施すものもあるが、基本的に二次横ハケ整形はみられない。器高42.1～44.8cmで、底径：口径比が1：1.9～2.1と口縁部に向かって大きく開く20 I a類(2・5・10・17・22)と、器高46.7cmで、底径：口径比が1：1.6と筒状の20 I b類(16)に大別されるが、器形以外には陶類にそれほど顕著な差異は認められない。円筒埴輪の内、13・16・17・18・20・21・22には胎土に白色針状粒の含有を確認しているが、結晶片岩は含んでいないようである。ヘラ記号を施すものは確認されなかった。19には小像が剥離したような痕跡が認められる。赤彩は外面上半部を中心に円筒埴輪全体の60%程度に施されている。また、円筒埴輪を製作台から離しやすくするために底部に棒状のものを置き、それが圧痕となって残った「棒状圧痕」が確認されるが、本古墳円筒埴輪の棒状圧痕は太いものが多い傾向にある。13には底部に太い棒を差し込んだような痕跡がある。形象埴輪(23)は小破片であるが、胎土に結晶片岩・白色針状粒の含有が認められる。土師器坏には、内斜口縁のもの(25・27)と、口縁部と体部との境に稜を持つもの(26)とがある。須恵器高坏(32)は短脚1段透かし4か所のもので、陶器編年のTK208段階に位置付けられる。遺物総重量123.1kg。掲載遺物32点。



- 1：埋没土 白色軽石を多量含む。粘性がある。
- 2：埋没土 ローム粒・小礫を少量含む。粘性がある。
- 3：埋没土 ローム粒を少量。小礫を多量含む。粘性がある。
- 4：埋没土 ローム粒を少量含む。粘性がある。
- 5：埋没土 F.A類。
- 6：埋没土 ローム粒・ブロックを多量含む。粘性がある。
- 7：埋没土 ロームブロックを多量含む。粘性がある。

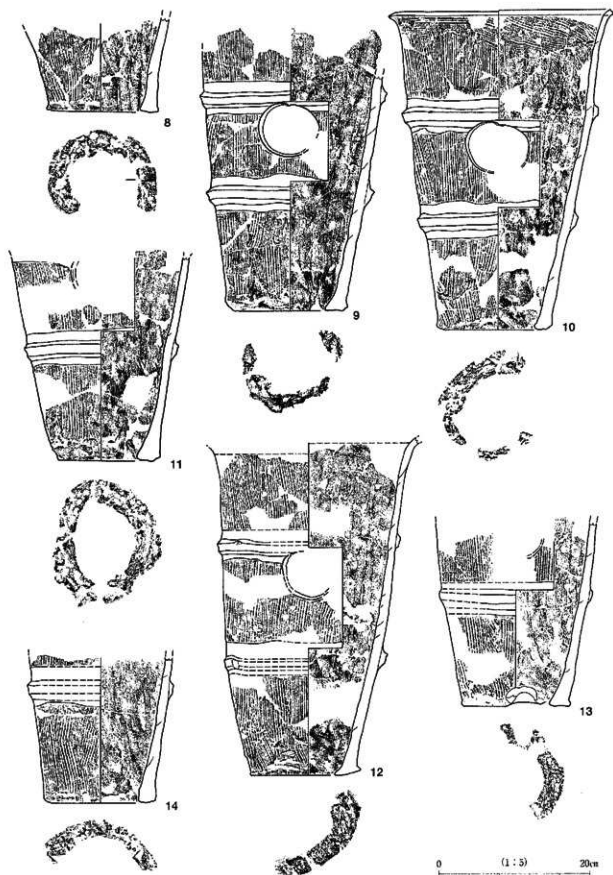
第205図 20号古墳岡溝土層図



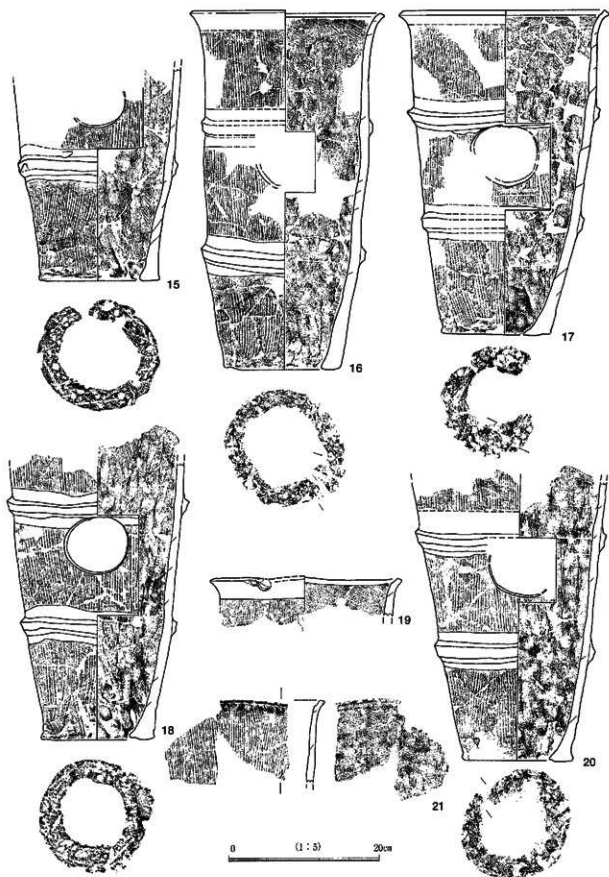
第206図 20号古墳



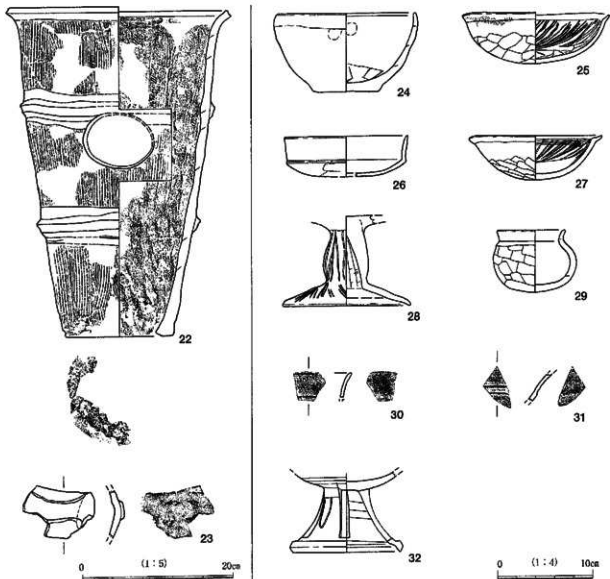
第207図 20号古墳出土遺物①



第208圖 20号古墳出土遺物②



第209図 20号古墳出土遺物③



第210図 20号古墳出土遺物④

21号古墳 (遺構：第211図、P L 82~84 遺物：第212~222図、P L 136~144、観察表P64)

位置：P 6~T 8 グリッド。南側に13号古墳が隣接。北東方向には古墳時代後期の集落が展開する。重複：南側から東側にかけて1号河川跡に切られる。ほぼ中央部に東西方向のアスファルト道路が現存する。形態：周溝の形態等から帆立貝形古墳と判断される。方形部は現道路下及び1号河川跡に切られているが東~南東部に位置していたと推測される。規模：全長31.9m + a。門丘部径31.9m。方形部長・幅は不明。墳丘：大半を既に削平される。葺石：なし。主体部：念のためトレンチ調査を行ったが、調査区域内からは検出されなかった。墳丘部面積・周溝部面積：不明。周溝：楕円形状に全周すると推測される。断面形態は箱状で、底面は多少の凹凸・起伏がみられる。上端最大幅9.10m。下端最大幅7.20m。残存深度80cm。北側調査区埋没土の上には浅間B軽石層(Ⅱ)が堆積する。埋没状態から判断して、同層堆積時には墳丘は残存していたとみられる。埋没上はローム粒・ロームブロック・白色軽石粒を含む暗褐色土~黒褐色土で、底面より5cmほど上にFA(8層)が堆積する。時期：5世紀末葉頃と想定される。

遺物出土状態：周溝内に流れ込んでいる状態のものがほとんどで、北側調査区では比較的墳丘付近から多く出土している。一部墳丘裾部に倒壊した状態のものもみられる。形象埴輪・須恵器・土師器は方形部が存在していたと想定される位置周辺からの出土が多いようである。南側周溝東寄りから馬形埴輪及び鶏形埴輪の頸部が出土している。北東部周溝には須恵器・土師器がやや集中してみられる。また、同じく北東部墳丘寄りから人物小像付き円筒埴輪が、11mほど離れた北側周溝から人物小像が出土している。

遺物：朝顔形円筒埴輪・円筒埴輪・形象埴輪（馬・鶏）・須恵器（甕）・土師器（甕・壺・杯）がある。朝顔形円筒埴輪と円筒埴輪は、およそ1：6の比率で存在する。

朝顔形円筒埴輪は6段構成で、疑似口縁上に最上段を接合するものが多く、最上段端部は大きく外反して開く。凸帯はM字状を基調とし、透し孔は第3段に円形もしくは半円形、第2段に比較的小さめの円形孔を穿つ。上半部を中心に赤彩を施す。外面整形のハケ目（木口）状工具には太目・細目の2種類がみられ、太いハケ目のみのもの（2）と第1段～第3段を太いハケ目・第4・5段を細いハケ目を施すもの（7）に分けられるようである。全容を把握できるものはないが、後者も最上段は太いハケ目を施すものと推測される。外面整形は基本的に一次縦ハケで、第4段にのみ二次横ハケを施すものが多くみられる。

円筒埴輪は凸帯2条3段構成で、外面整形は59のように顕著な斜めハケ後に縦ハケを施すものもみられるが、基本的に一次縦ハケのみで、二次横ハケ整形を施すものは確認されなかった。全容を把握できるものは7点と少ないが、外面整形のハケ目数・透し孔形状を観点に次の4類に分類した。

21 I a 類：外面のハケ目12～20本/2cmで、基本的に半円形の透し孔をもつものを本類とした（29・30）。器高は37.0～40.2cm程度である。30は器形が激しく歪んでいる。

21 I b 類：外面のハケ目7～10本/2cmで、円形・楕円形の透し孔をもつものを本類とした（13）。器高は36.2cm程度である。

21 I c 類：外面のハケ目4～7本/2cmと粗く、長方形・逆台形状もしくは半円形の透し孔を持つものを本類とした（26・28・52）。器高は36.7～39.0cm程度である。先述の59も本類と判断している。37は最上段高が8.7cmと他と比較して極端に短く、透し孔も円形と推定されるが、外面のハケ目数は6本/2cmであり、とりあえず本類に含めた。

21 I d 類：外面のハケ目22～24本/2cmと細く、明瞭な斜めハケを施すもの（62・71）。

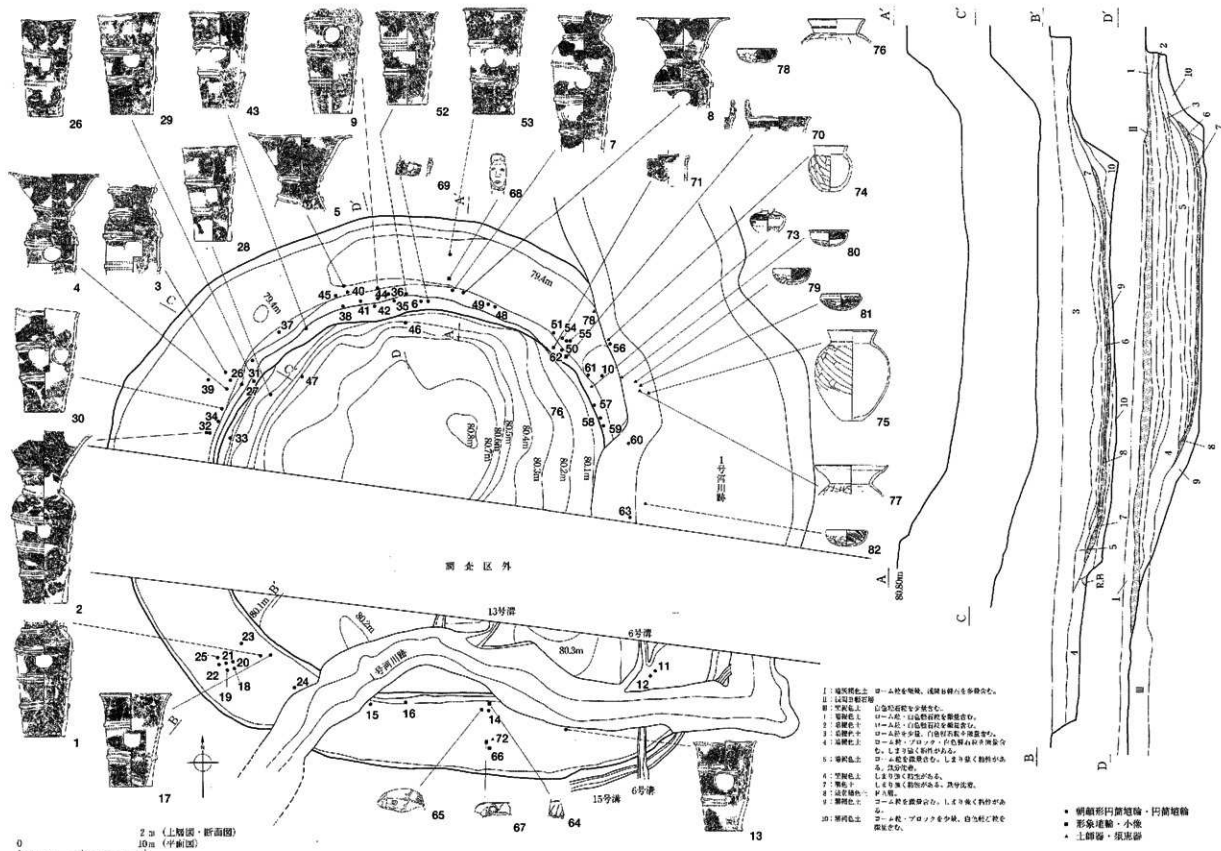
破片等も外面のハケ目数を基に分類した結果、円筒埴輪全体の各々の比率は21 I a 類が19.6%、21 I b 類が26.8%、21 I c 類が50.0%、21 I d 類が3.6%で、半数が21 I c 類であった。各々の出土位置には顕著な偏りは認められなかった。ヘラ記号は各々ごとに特徴的であり、21 I b 類・57の外面第2段に「×」、21 I c 類・18・19・26・28・34・40・50・52・55・56・60・61の内面第3段に複数の条線、21 I d 類・62の外面第3段に鐘形状のものがみられる。また、円筒埴輪全体の50%程度に赤彩が施されている。なお、21 I b 類・70の口唇部には男子人物小像が貼り付けられている。ほかにも女子人物小像の頭部破片（68）があるが、70とは出土地点が離れており、別個体と思われる。68の近接地点からは小像剥離痕のある円筒埴輪片（69）が出土しており、68は69に取り付けられていた可能性が高い。

形象埴輪は鶏と思われるもの（64）と馬形埴輪（65～67）を確認している。

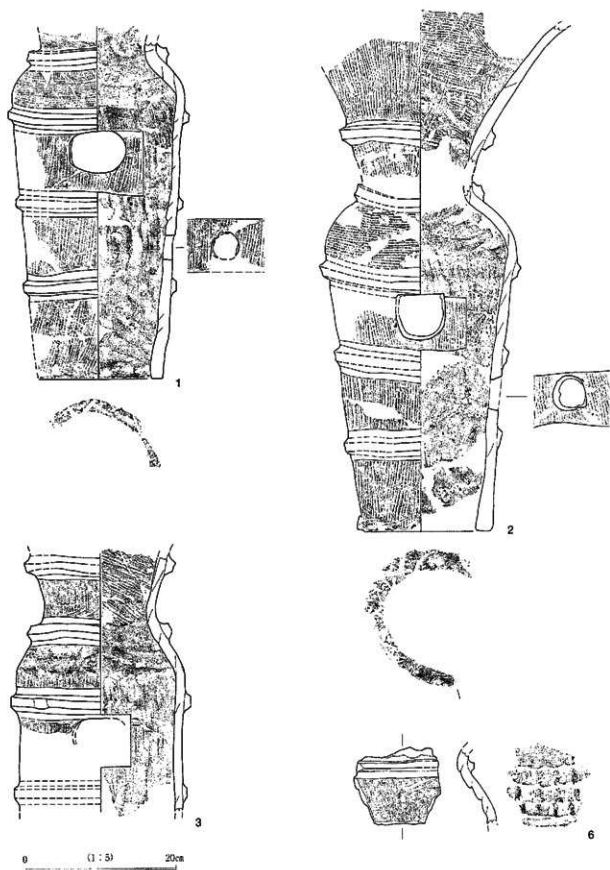
土師器甕・壺（74～77）には胎土に結晶片岩を含有するものが多い。土師器杯には口縁部が内湾するもの（78・79・82）、内斜口縁のもの（80）、口縁部が弱い縁を持って内傾するもの（81）とがある。須恵器甕（73）は陶器編年のTK47段階に位置付けられる。

遺物総重量391.0kg。掲載遺物82点。

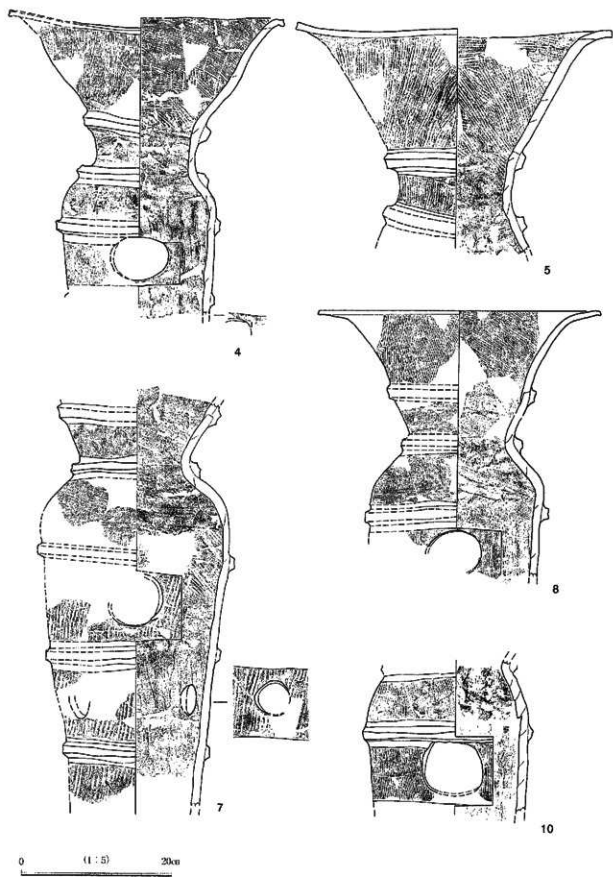




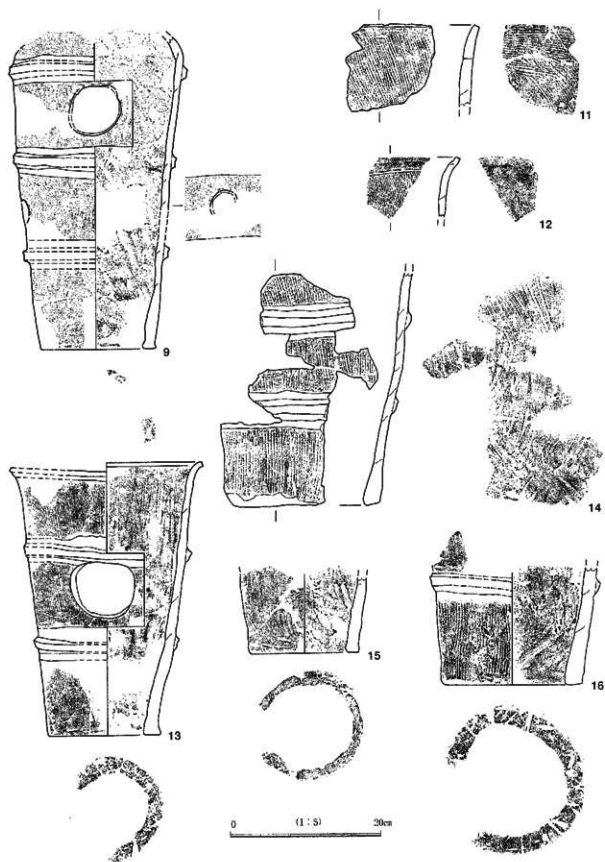
第211図 21号古墳



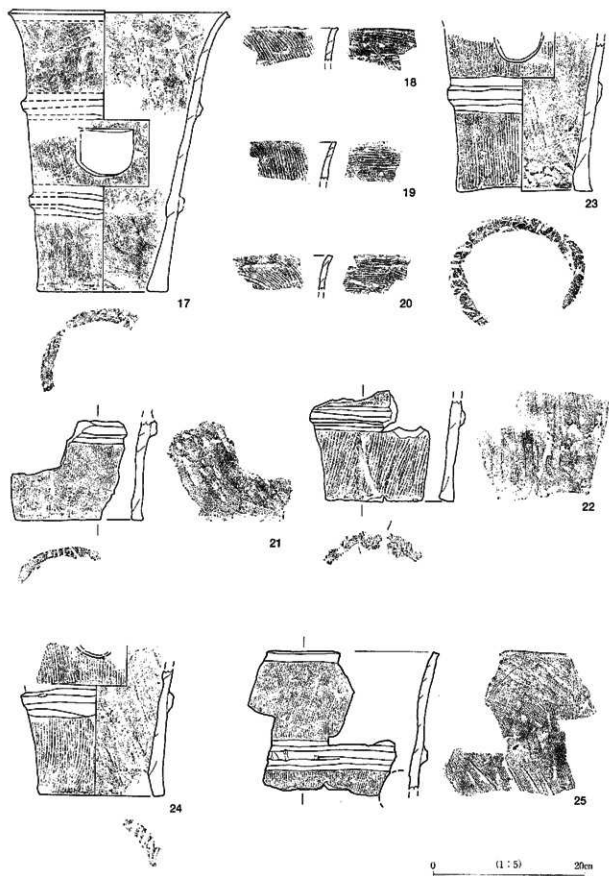
第212図 21号古墳出土遺物①



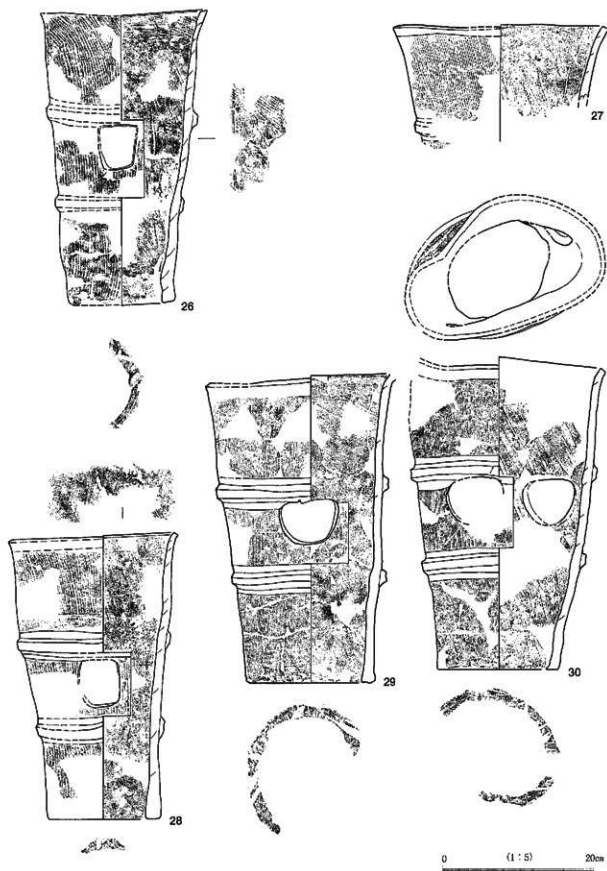
第213図 21号古墳出土遺物②



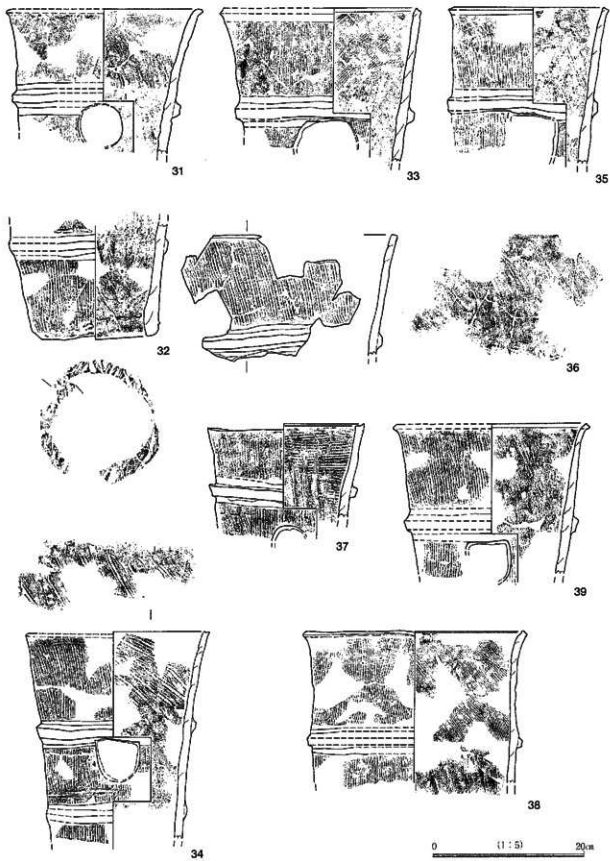
第214図 21号古墳出土遺物③



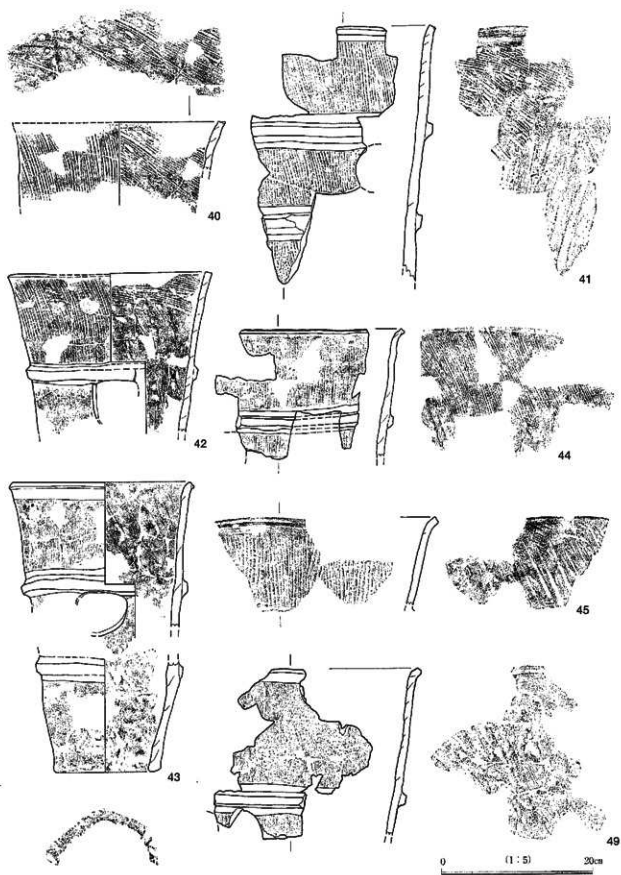
第215図 21号古墳出土遺物④



第216図 21号古墳出土遺物③

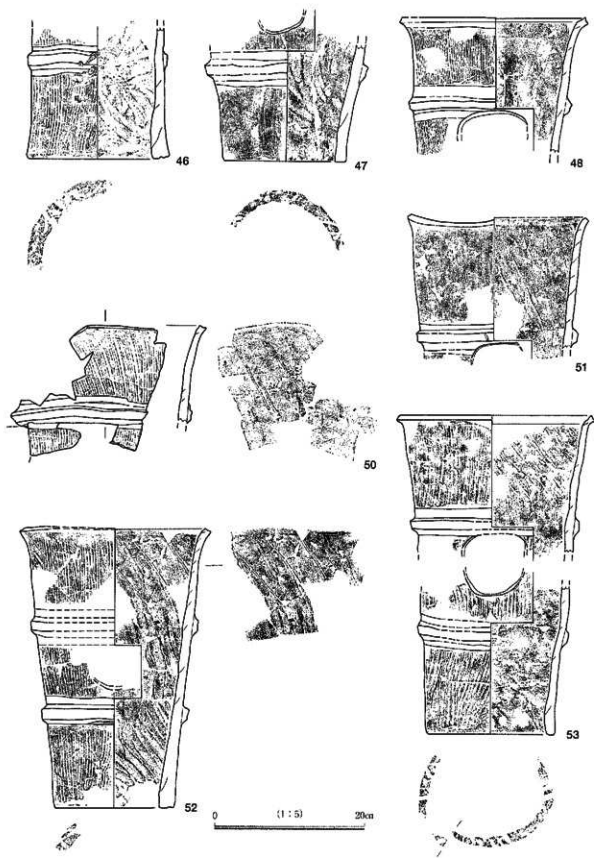


第217図 21号古墳出土遺物⑥

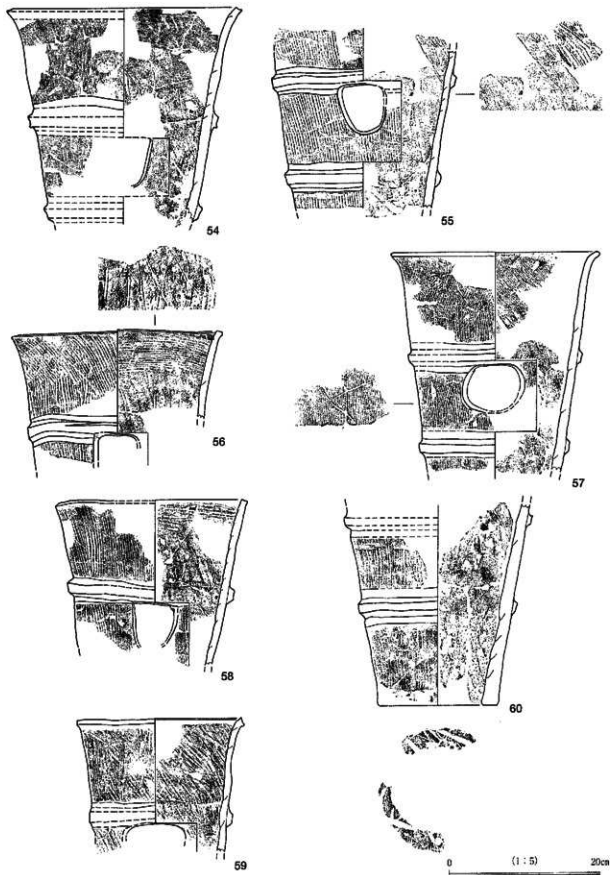


第218図 21号古墳出土遺物②

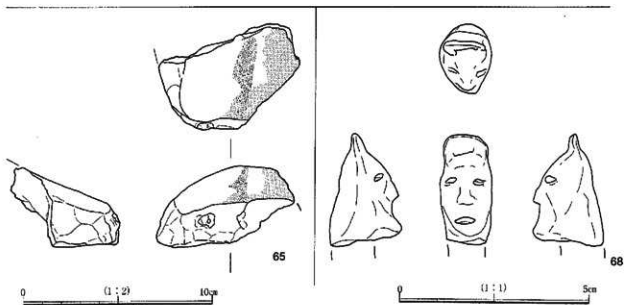
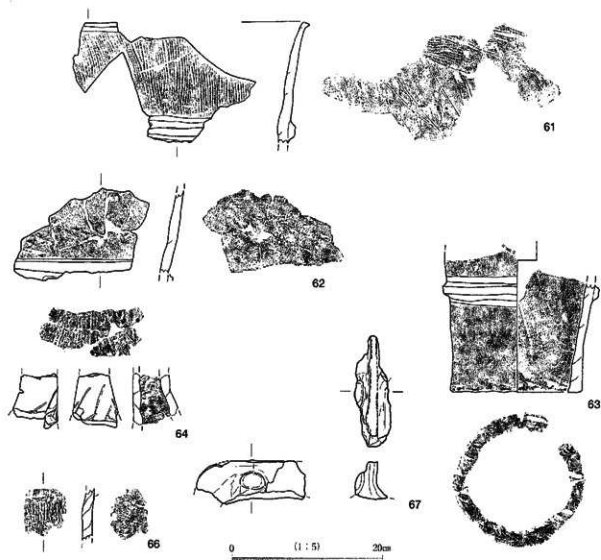




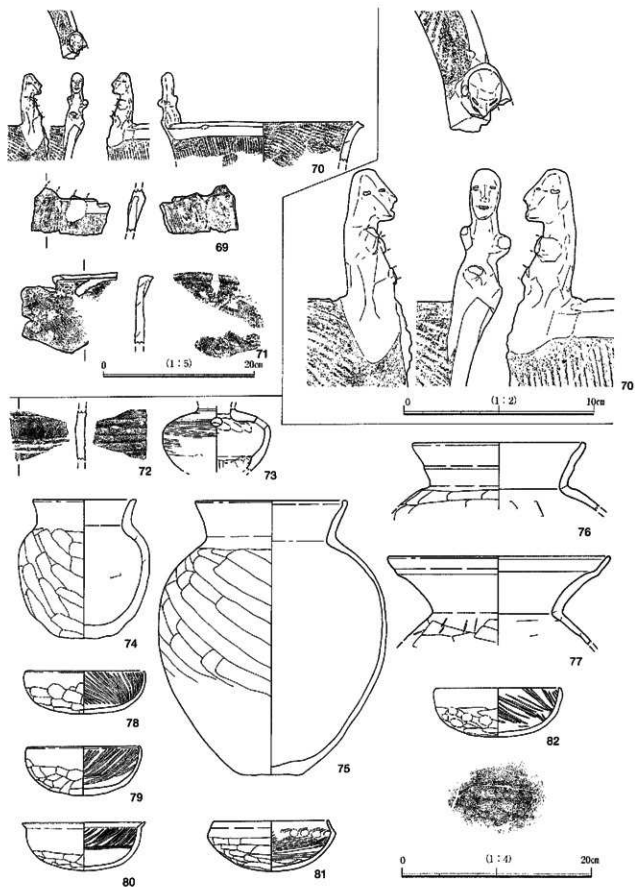
第219図 21号古墳出土遺物⑧



第220図 21号古墳出土遺物⑨



第221図 21号古墳出土遺物①



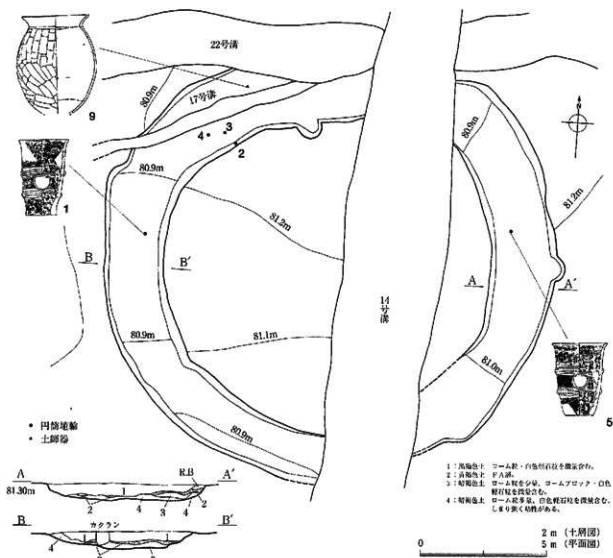
第222図 21号古墳出土遺物①

22号古墳 (遺構：第223図、P.L.85・86 遺物：第224図、P.L.145、遺物観察表P70)

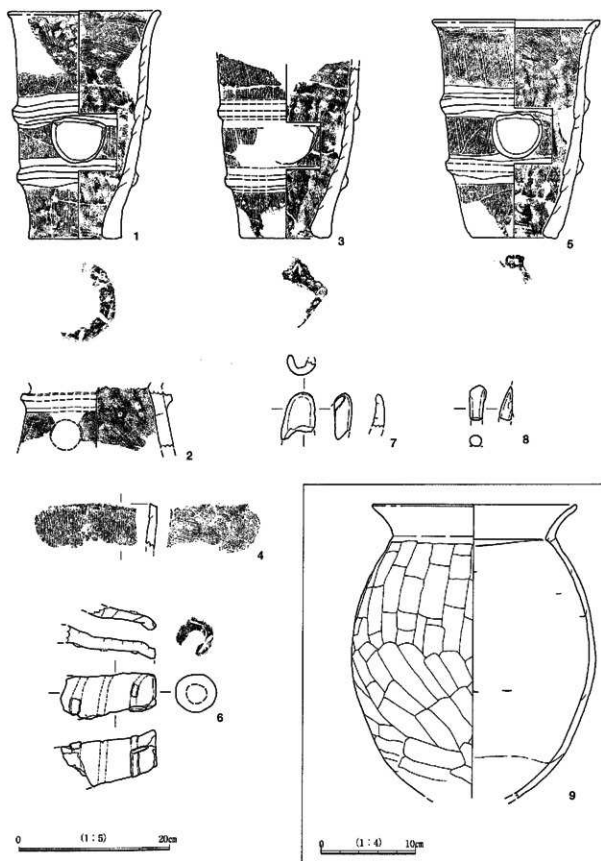
位置：N26～Q27グリッド。北西に23号古墳、北側に28号古墳、南側に29号古墳が隣接。重複：中央部に14号溝(中世船跡の堀)に、北側周溝を17号溝・22号溝に切られる。形態：円墳。規模：径13.5m。墳丘：既に削平。葺石：なし。主体部：削平のため不明。墳丘部面積：推定122.7㎡。周溝部面積：推定129.9㎡。周溝：全周。断面形態はU字状もしくは皿状。上端最大幅3.08m。下端最大幅2.56m。残存深度27cm。埋没土はローム粒・白色軽石粒等を含む黒褐色土～暗褐色土で底面より5cmほど上にFA(2層)が堆積する。時期：5世紀後半～末葉頃と想定される。

遺物出土状態：周溝内に流れ込むような状態で出土しており、全体的にややまばらである。

遺物：2は朝顔形円筒埴輪と思われる。円筒埴輪は凸帯2条3段構成で、器高28.2～29.8cm程度、凸帯台形、半円形透し孔を基調とする。口縁端部は外反する。外面整形は一次縦ハケのみで、二次横ハケを施すものは確認されなかった。ヘラ記号は、1の内面第3段に認められる。赤彩は全体の50%程度に施されている。形象埴輪は馬形埴輪(6・7)を確認している。6は筒状の尻尾部分で、7は耳の部分と思われる。土師器类(9)は胎土に結晶片岩・白色針状粒の含有が認められる。遺物総重量142kg。掲載遺物9点。



第223図 22号古墳



第224図 22号古墳出土遺物

23号古墳 (遺構：第225図、P L 85・86 遺物：第226～232図、P L 145～149、遺物観察表P 70)

位置：P 27～R 29グリッド。東側に28号古墳、南東に22号古墳が隣接。重複：14号溝（中世館跡の堀）・22号溝・23号溝に切られる。23号溝は北側墳丘裾部に沿うように位置し、土層の状態から周溝埋没土3層以前の溝と判断される。墳丘部東端には大きな溝状の落ち込み（43号溝）がある。また、墳丘部下にあたる位置には古墳時代前期の30号住居跡が存在していた。形態：円墳。規模：径21.4m。墳丘：既に削平。墓石：なし。主体部：削平のため不明。墳丘部面積：推定345.7㎡。周溝部面積：推定343.2㎡。周溝：全周。周溝幅は北西から北側が最も広く上端最大幅6.25m・下端最大幅5.85mであるのに対し、南東部は上端幅2.09m・下端幅1.86mと極端に狭くなっている。残存深度40cm。埋没土はローム粒・ロームブロック等を含む暗褐色土～黒褐色土。時期：6世紀中葉頃と想定される。

遺物出土状態：周溝内に流れ込んだ状態で出土しているものが多い。形象埴輪の内、人物埴輪及び馬形埴輪は南側周溝に、家形埴輪は北西側周溝に多い傾向が認められる。

遺物：朝顔形円筒埴輪・円筒埴輪・形象埴輪（人物・馬・家）・須恵器（高坏）等がある。

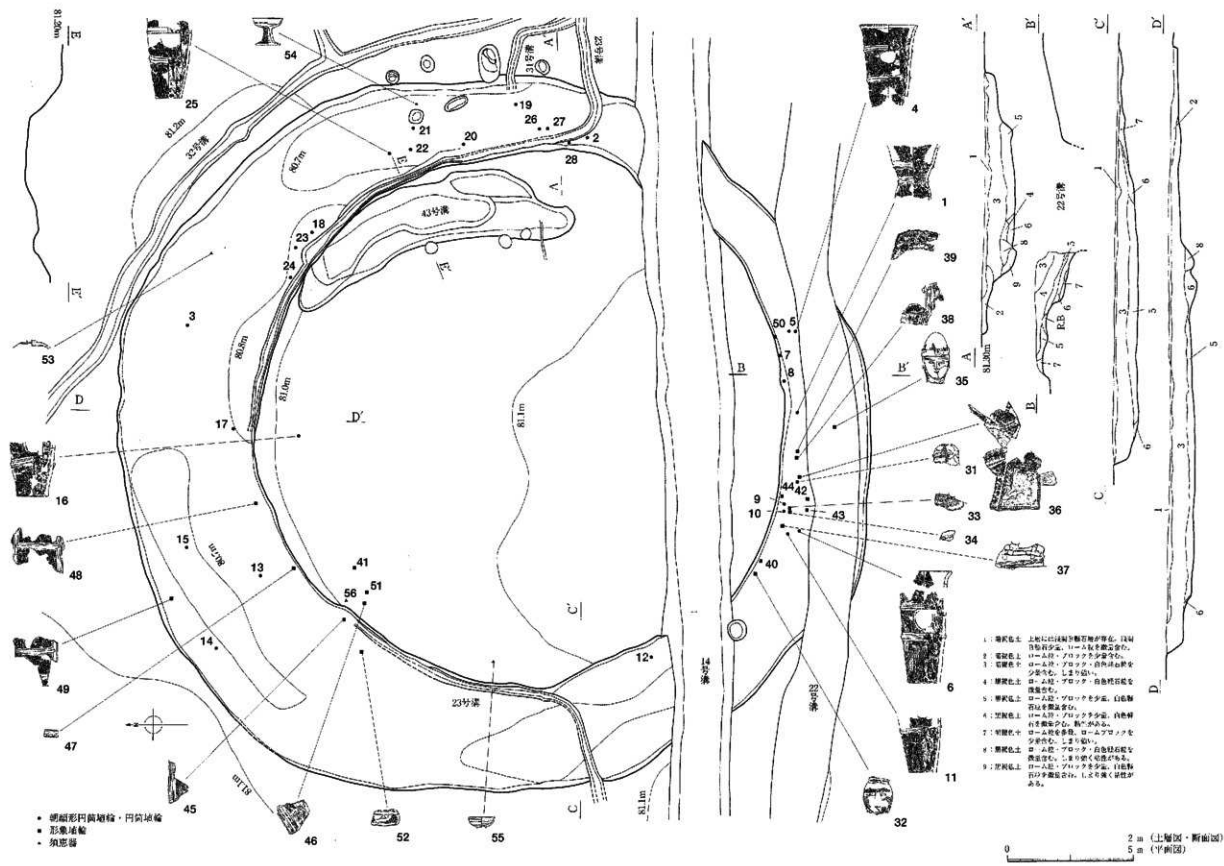
朝顔形円筒埴輪は全容を把握できるものではなく、景的にも少ないが他の古墳出土のものと同様であると判断し6段構成と推定した。凸帯は括れ部及びその他の段間も三角形のもの（1）と、括れ部凸帯は三角形形状であるがその他の段間は低い台形状のもの（3）とが存在するようである。前者には胎土に結晶片岩・白色針状粒の含有が認められる。

円筒埴輪も全容を把握できるものはないが、各段の状態から凸帯2条3段構成と想定される。第1段高が低い傾向が認められ、各段高は第1段12.9～18.5cm・第2段10.2～11.8cm・第3段8.6～10.3cmのものが存在し、平均値は第1段16.1cm・第2段10.9cm・第3段9.4cmである。凸帯は三角形で、透し孔は円形を基調とし、口縁端部が外反するものが多い。胎土には大半に結晶片岩・白色針状粒の含有が認められる。ヘラ記号は7・12・14・18・22・25・26・28の8点で確認しており、外面第3段に弧状線や斜め線1～2本のものがみられる。赤彩が施されるものは円筒埴輪全体の10%未満と少ない。

形象埴輪も胎土に結晶片岩・白色針状粒の含有が認められる。人物埴輪は男子頭部2（31・35）、女子頭部1（32）を確認している。31は振り分け髪を立体的に表現している。32の髪は分銅形で、欠損するが前後に大きく開くものと推定される。35は、輪積み後に縦ハケ整形を施し、その後に粘土を貼り付け額・鼻をつくり、額にはち巻きを巻く。52は上着の裾端部と判断した。また、33・34は首の部分の破片で勾玉・丸玉が交互に配されている。33と34は別個体であり、女子人物も2個体以上が存在していたと考えられる。馬形埴輪（36～39）の頭部は筒状と想定される。障泥の縁辺部には粘土紐に刺突を加え、皮装を表現している。鍔は割落するが剝離痕から鍔と推定される。鞍の山部分には円形貼付文で銚を表現している。なお、馬形埴輪の復元想定図（第232図）は神保下條遺跡2号古墳出土の馬形埴輪（石高和夫1992『神保下條遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団）をモデルとした。家形埴輪（45～51）は屋根部分の破片と軸部分の破片のほか、堅魚木がある。49には一部赤彩が認められる。

須恵器高坏（54）は脚部内面に灰かぶりか認められ、焼成時には倒立していたものと判断される。胎土には白色針状粒の含有が認められる。

遺物総重量145.7kg。掲載遺物56点。

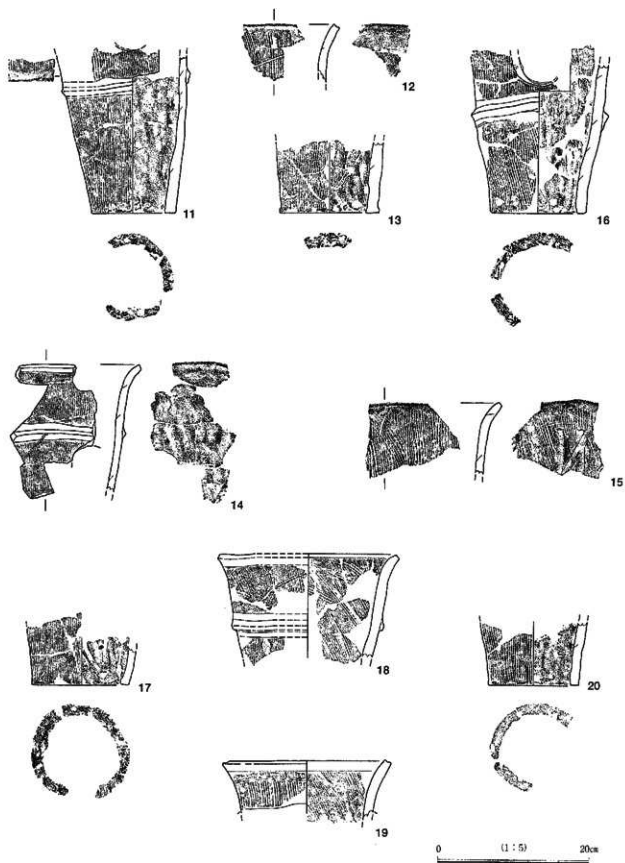


第225図 23号古墳

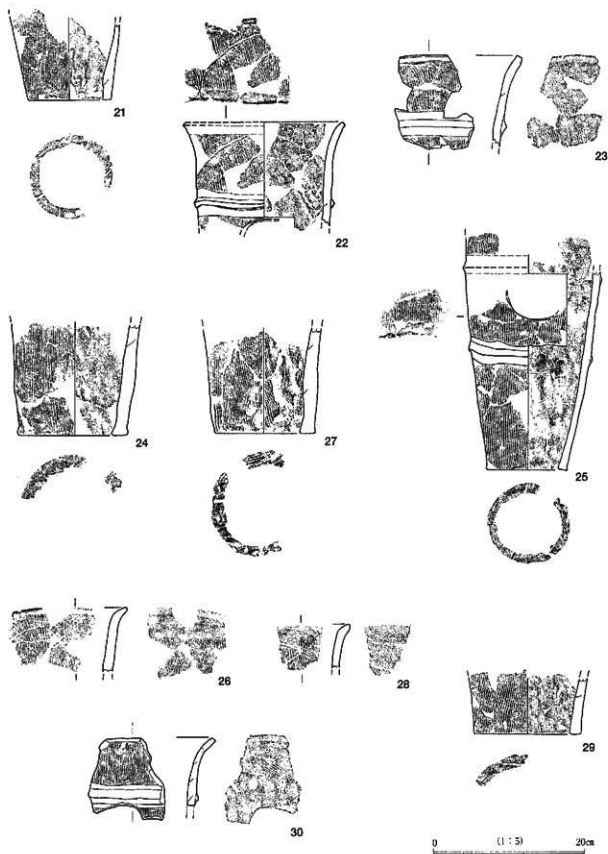




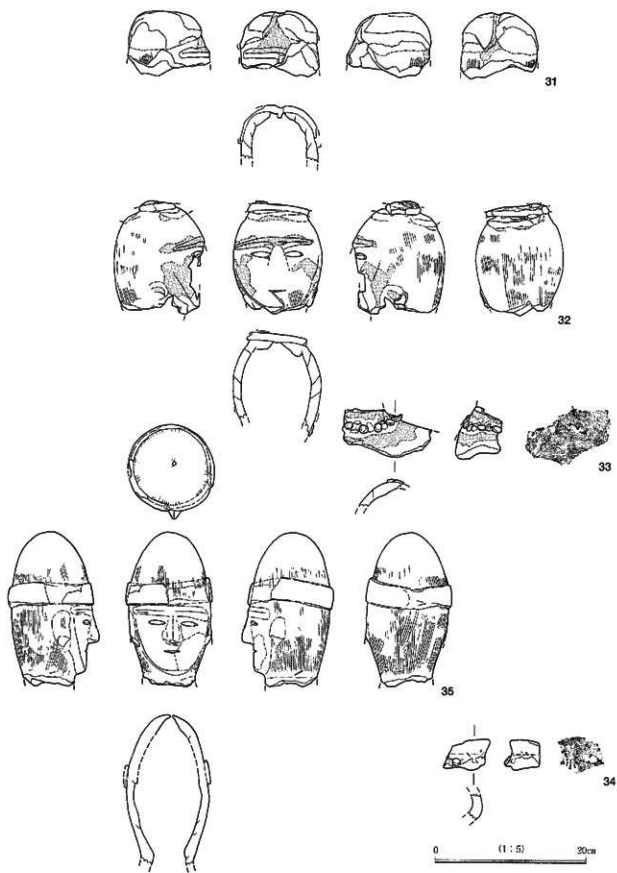
第226図 23号古墳出土遺物①



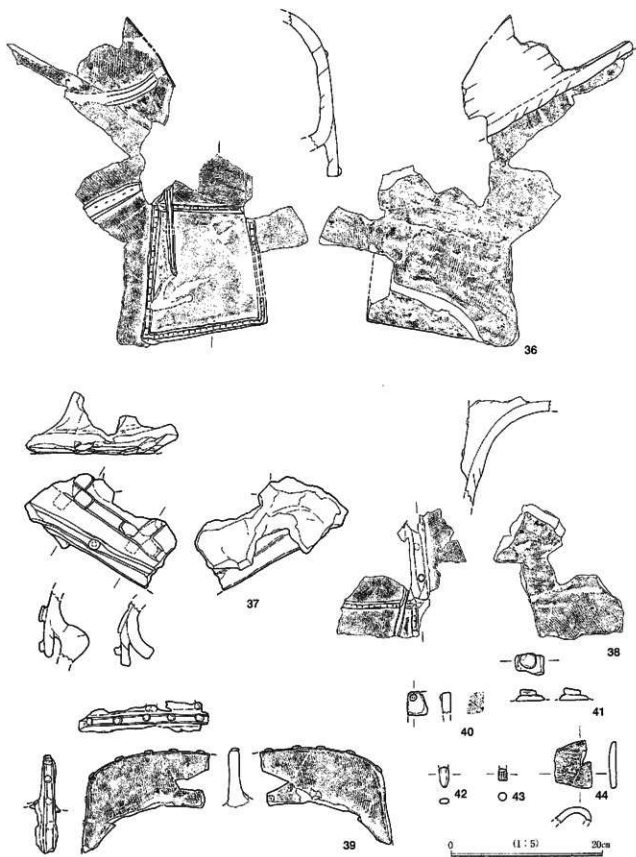
第227図 23号古墳出土遺物②



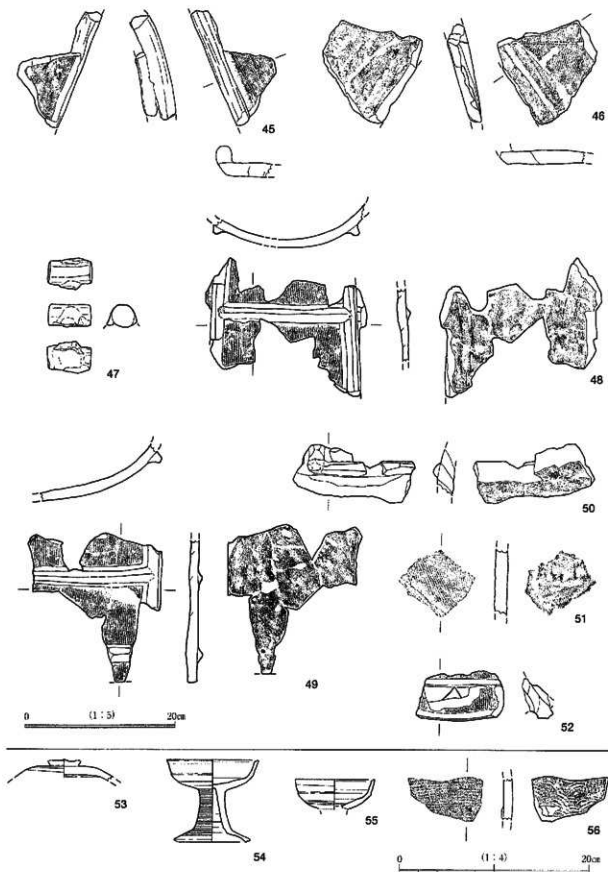
第228図 23号古墳出土遺物③



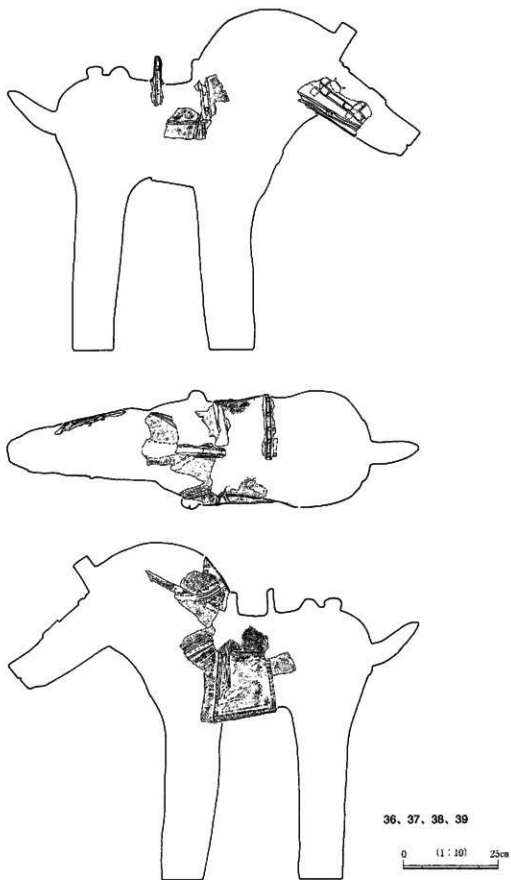
第229図 23号古墳出土遺物④



第230圖 23号古墳出土遺物⑤



第231図 23号古墳出土遺物⑥



36、37、38、39

0 (1:10) 25cm

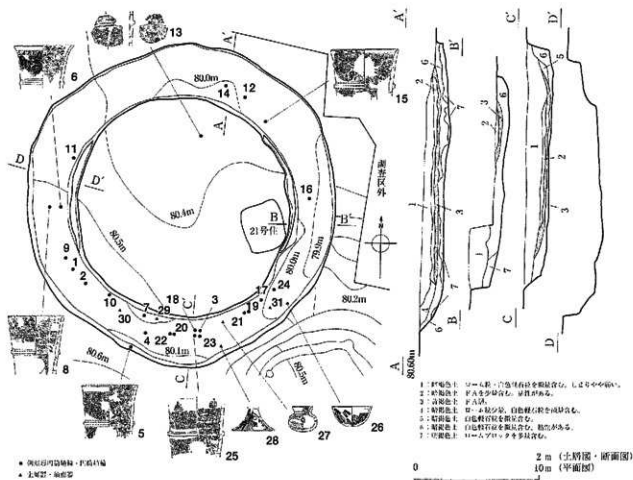
第232図 23号古墳出土遺物⑦

24号古墳 (遺構：第233図、P.L86・87 遺物：第234～235図、P.L150・151、観察表P74)

位置：Q13～Q14グリッド。南東に15号古墳が隣接。重複：北西部は平安時代の水田に利用されていた。南東部に位置していた古墳時代前期の22号住居跡を切る。東側の墳丘部下にあたる位置には古墳時代前期の21号住居跡がある。また、調査前には東側に南北方向のアスファルト道路が存在していた。形態：円墳。規模：径18.0m。墳丘：既に削平。墓石：なし。主体部：削平のため不明。墳丘部面積：245.9㎡。周溝部面積：256.4㎡。周溝：全周。断面形態はU字状～箱状。上端最大幅4.32m。下端最大幅4.08m。埋没土はローム粒・ロームブロック・白色軽石粒を含む暗褐色土で、底面より5～10cm(ほど)上にF A (3層)が堆積する。時期：5世紀後半と想定される。

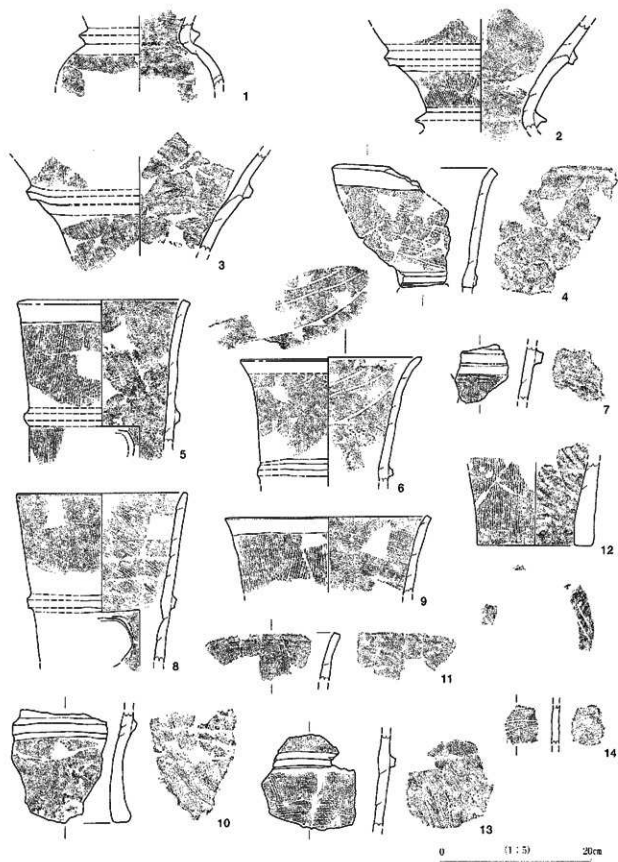
遺物出土状態：すべて周溝内に流れ込んだ状態である。

遺物：朝顔形円筒埴輪・円筒埴輪・土師器・須恵器片がある。土師器(28)は紛れ込みの遺物である。朝顔形円筒埴輪は、擬似口縁上に最上段を接合する。掲載遺物(1～3)は3点とも上半部であるが、いずれも赤彩が施されている。円筒埴輪は全容が把握できるものはないが、各段の状態から凸帯2条3段構成と想定される。凸帯は台形～M字状で、透し孔は半円形を基調とする。外面整形は一次緩ハケのものが大半で、二次横ハケを施すものは全体の10%程度である。ヘラ記号は、外面に条線・弧状条線を施すもの(4・14・18・19)、内面に条線を施すもの(6・15)、内面に「×」を施すもの(25)、計7点を確認している。赤彩は円筒埴輪全体の60%近くに施されている。遺物総重量68.8kg。掲載遺物31点。

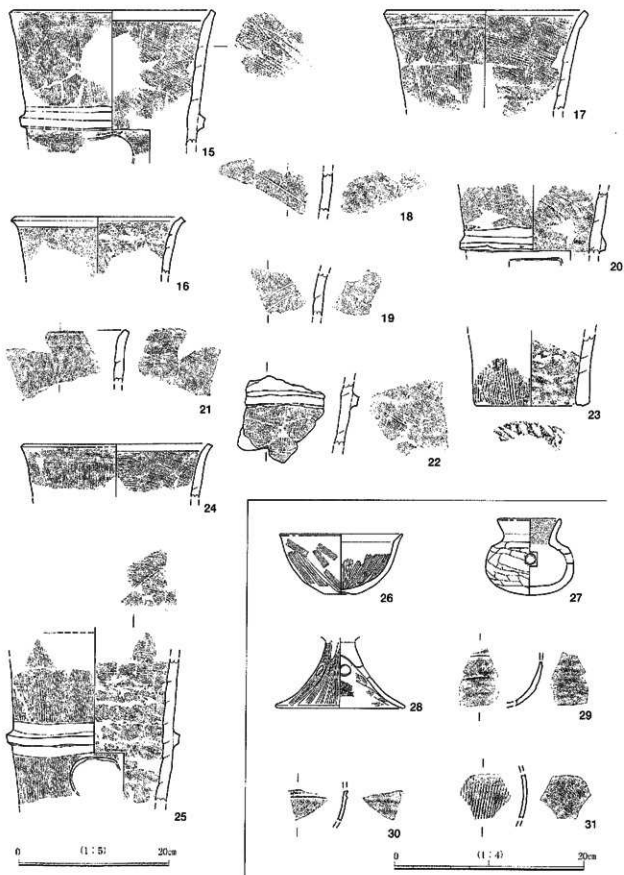


第233図 24号古墳





第234図 24号古墳出土遺物①



第235図 24号古墳出土遺物②

## 25号古墳 (遺構: 236図、P L 88 遺物: 第236図、P L 151、遺物観察表P 75)

位置: I 9 ~ J 10グリッド。西側に16号古墳が隣接。重複: 1号欒状遺構に切られる。形態: 円墳。規模: 径7.8m。墳丘: 既に削平。葺石: なし。主体部: 削平のため不明。墳丘部面積: 35.1㎡。周溝部面積: 41.6㎡。周溝: 全周。断面形態は箱状で、底面はやや凹凸・起伏がみられる。上端最大幅1.78m。下端最大幅1.62m。残存深度13cmと浅い。埋没土はローム粒・ロームブロック・白色軽石粒等を含む暗褐色土~明褐色土。時期: 5世紀末葉頃と想定される。

遺物出土状態: 周溝内から少量の円筒埴輪破片と土師器杯が出土している程度である。

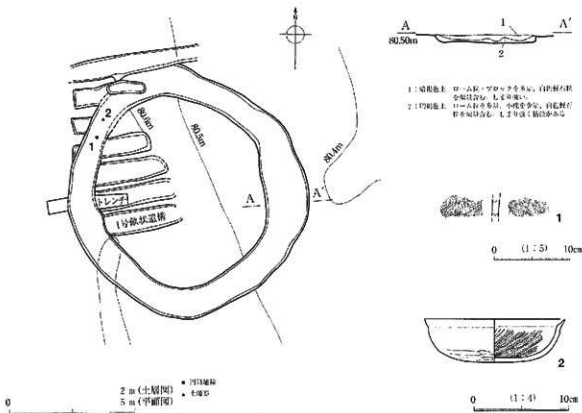
遺物: 円筒埴輪破片はすべて小破片である。外面整形は一次縦ハケのみであった。土師器杯は内斜口縁のもので、口唇部は尖る。遺物総重量0.4kg。掲載遺物2点。

## 26号古墳 (遺構: 第237図、P L 88 遺物: 第237図、P L 151、遺物観察表P 76)

位置: N 15グリッド。南側に17号古墳が隣接。重複: 28号溝に切られる。形態: 円墳。規模: 径6.4m。墳丘: 既に削平。葺石: なし。主体部: 削平のため不明。墳丘部面積: 25.3㎡。周溝部面積: 23.5㎡。周溝: 全周。断面形態は箱状で、底面は多少の凹凸・起伏がある。上端最大幅1.05m。下端最大幅0.80m。残存深度40cm。埋没土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土を基調とし、底面より10~20cmほど上にF A (1層) が堆積する。時期: 5世紀末葉頃と想定される。

遺物出土状態: 周溝内から土師器杯と土師器瓦破片が出土している程度で、埴輪は出土していない。

遺物: 土師器杯は丸底で口縁部が内湾するものである。遺物総重量0.4kg。掲載遺物1点。

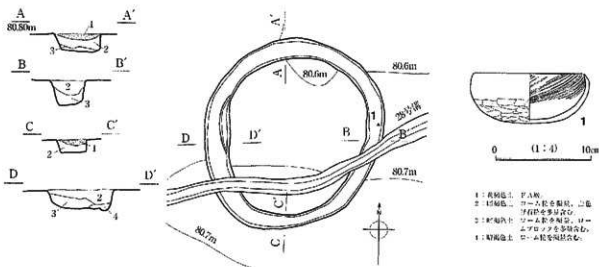


第236図 25号古墳と出土遺物

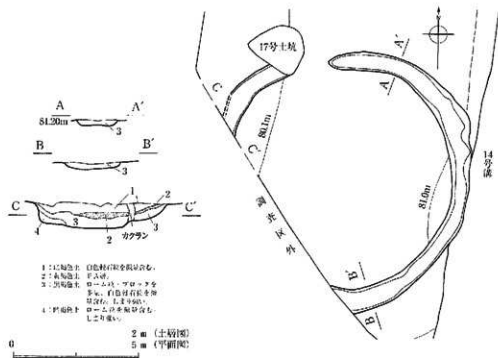
27号古墳 (遺構：第238図、P.L.88)

位置：J 27～K 28グリッド。北東部に8号古墳が隣接。南西部1/4ほどは調査区外。重複：14号溝（中世館跡の堀）及び17号土坑に切られる。形態：円墳。規模：径9.2m。墳丘：既に削平。墓石：なし。主体部：削平のため不明。墳丘部面積・周溝部面積：不明。周溝：北側にブリッジを有す。断面形態はU字状で、底面は多少の凹凸・起伏がある。上端最大幅1.17m。下端最大幅0.70m。残存深度40cm。埋没土はローム粒・ロームブロック等を含む暗褐色土～黒褐色土で、底面より16cmほど上にF A（2層）が堆積する。時期：5世紀末葉頃と想定される。

遺物出土状態：調査部分において出土遺物は皆無であった。



第237図 26号古墳と出土遺物



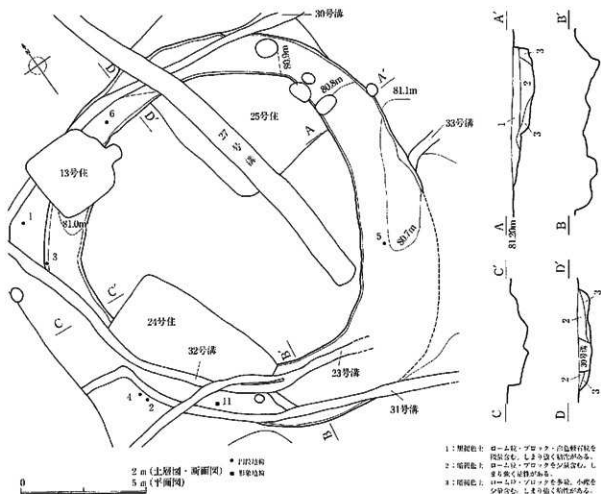
第238図 27号古墳

## 28号古墳 (遺構: 第239回, P.L.86 遺物: 第240回, P.L.151、遺物観察表P.76)

位置: P.25~Q.26グリッド。西側に23号古墳、南西に22号古墳が隣接。重複: 24号・25号住居跡を切る。13号住居跡及び23号・27号・30号・31号・32号・33号溝に切られている。形態: 円墳。規模: 径12.2m。墳丘: 既に削平。葺石: なし。主体部: 削平のため不明。墳丘部面積・周溝部面積: 重複が多く不明。周溝: 全周する。周溝幅は北西部が狭く、南東部が広がる状態にある。南側上端幅2.84m、同下端幅2.63m。北西部上端幅1.50m、同下端幅1.36m。残存深度35cm。埋没上はローム粒・ロームブロック等を含む黒褐色土〜暗褐色土。時期: 6世紀中葉頃と想定される。

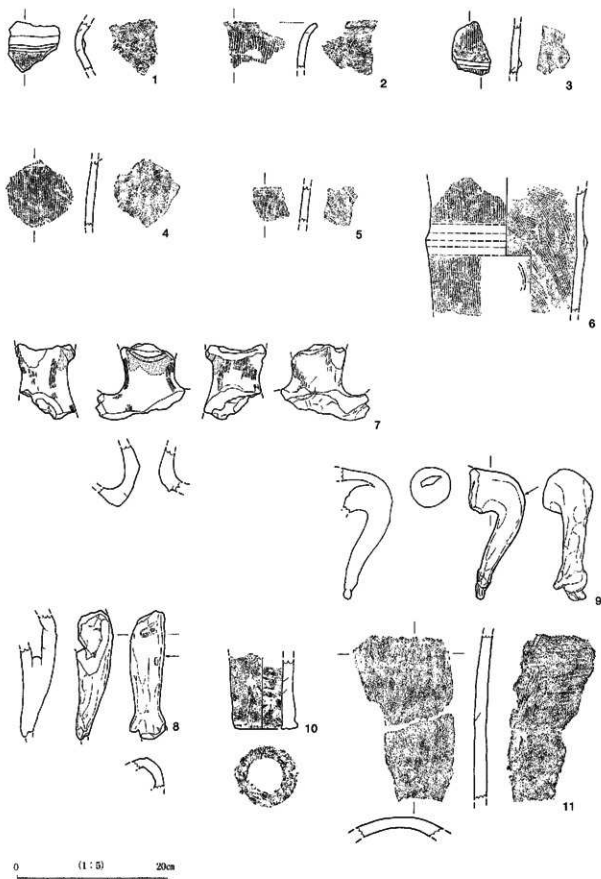
遺物出土状態: 周溝内から円筒埴輪片がややまばらな状態で出土している。形象埴輪の内7~10は近接するグリッド出土のものであり、本古墳には伴わない可能性もある。

遺物: 朝顔形円筒埴輪は全容が把握できるものはない。1は括れ部の破片で、胎土に結晶片岩・白色針状粒の含有が認められる。円筒埴輪も全容を把握できるものはない。外面整形は一次撥ハケのみで、凸帯三角形を基調とする。胎土には結晶片岩・白色針状粒を含有するものが多い。ヘラ記号は1点(3)のみ確認している。赤彩を施すものは確認されなかった。形象埴輪は人物等がある。7は頸~首の部分で、頸の部分に赤彩が施されている。8・9は腕の部分で、手の先から中途まで中実造り、二の腕を中空に造っている。10は馬の脚部か。11は断面がゆるい弧状を描く板状の破片である。遺物総重量10.9kg。掲載遺物11点。



- 1: 埴輪破片: ローム粒・ブロック・白色針状粒を  
含有する。7より深く埋没がある。
- 2: 埴輪破片: ローム粒・ブロックを少量含有し、  
若干の磁粒がある。
- 3: 埴輪破片: ローム粒・ブロックを多量、小粒を  
少量含有。ヒマラヤ製と推定される。

第239回 28号古墳

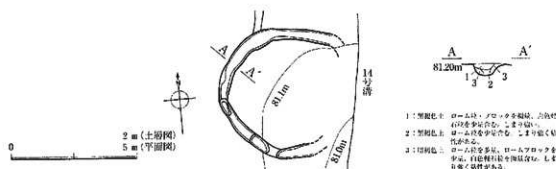


第240図 28号古墳出土遺物

## 29号古墳 (遺構:第241図、P L 88)

位置: M27グリッド。北側に22号古墳が隣接する。重複: 14号溝(中世館跡の堀)が東側に隣接し、東側周溝が削平されている。形態: 円墳。規模: 径4.6m。墳丘: 既に削平。葺石: なし。主体部: 削平のため不明。墳丘部面積・周溝部面積: 不明。周溝: 断面形態はU字状。上端最大幅0.64m。下端最大幅0.50m。埋没土はローム粒・ロームブロック等を含む黒褐色土～暗褐色土。時期: 不明。

遺物出土状態: 出土遺物は皆無であった。



第241図 29号古墳

## 30号古墳 (遺構:第242図、P L 88 遺物:第246図、P L 152、遺物観察表P 77)

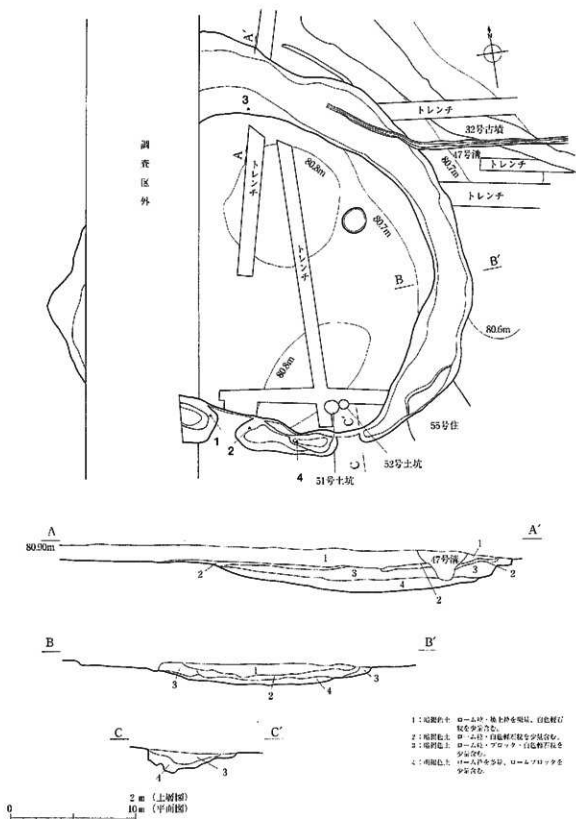
位置: Z20～c22グリッド。北東に32号古墳が隣接する。重複: 47号溝に切られる。南側墳丘裾部付近に中世のものと考えられる51号・52号土坑が位置する。また、西側には南北方向のアスファルト道路が現存する。形態: 円墳。規模: 径23.7m。墳丘: 既に削平。葺石: なし。主体部: 検出されなかった。墳丘部面積・周溝部面積: 不明。周溝: 南側で一部途切れる部分がある。周溝幅・深さ等には規格性がみられず不定形な状態である。上端最大幅7.19m、下端最大幅3.22m。上端最小幅2.58m、下端最小幅2.09m。残存深度65cm。埋没土は、ローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土を基調とする。時期: 7世紀代と想定される。

遺物出土状態: 周溝内から少量の土師器・須恵器片が出土している程度である。

遺物: 土師器(1)の口縁部は体部との境に稜を持ち、ゆるやかに外反して開くものである。須恵器はいずれも小破片である。4の底部は回転ヘラ切りである。遺物総重量14.6kg。掲載遺物4点。

## 31号古墳 (遺構:第243図、P L 90 遺物:第247図、P L 152、遺物観察表P 77)

位置: f24グリッド。北側は調査区外。重複: 47号溝・69号溝・2号河川跡・117号住居跡に切られる。墳丘部及び周溝部に古墳時代前期の70号・83号・87号・88号住居跡等が位置する。規模: 径23.1m。葺石: なし。主体部: 検出されなかった。墳丘部西寄りに長軸5.20mほどの長方形坑があり、横穴式石室を壊した跡である可能性も考えられるが、同坑からはコンクリート等が出土しているため掘乱と判断した。墳丘部面積・周溝部面積: 不明。周溝: 西側で一部途切れる部分がある。周溝幅・深さ等には規格性がみられず不定形な状態である。上端最大幅3.82m。下端最大幅3.10m。残存深度52cm。埋没土は、ローム粒・ロームブロック等を含む暗褐色土を基調とする。時期: 7世紀代と想定される。

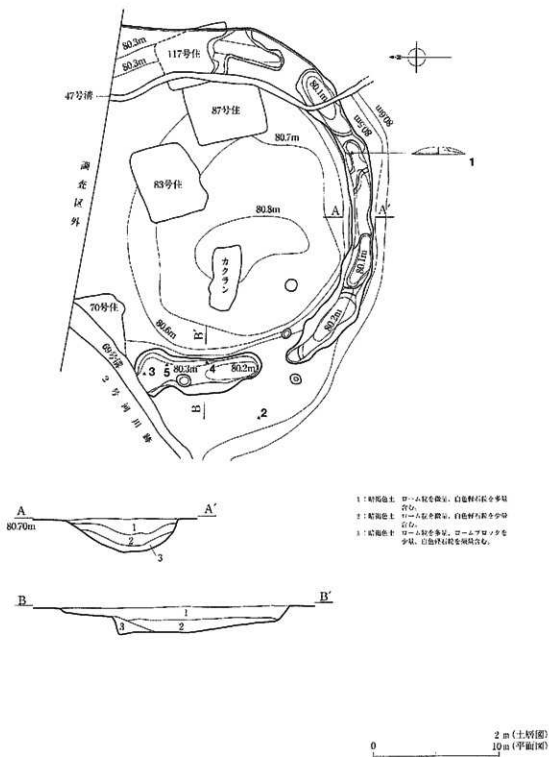


第242図 30号古墳



遺物出土状態：周溝内から須恵器片が出土している程度である。

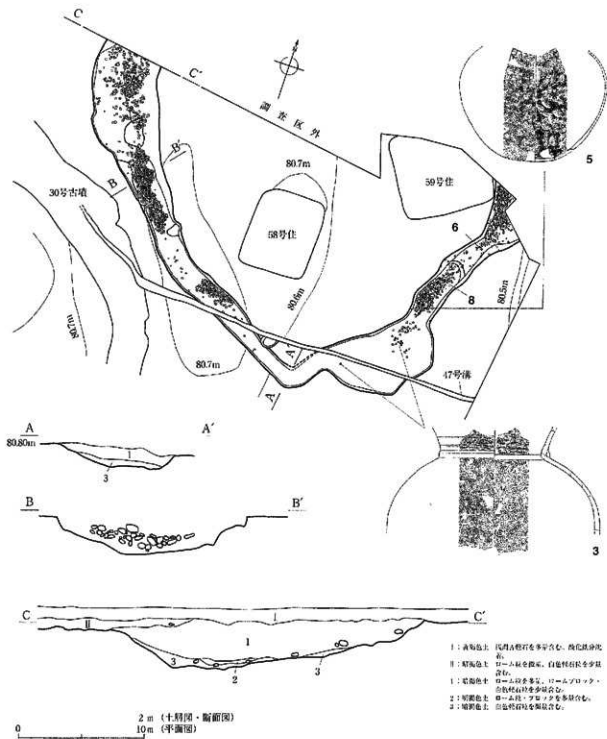
遺物：出土した須恵器はいずれも小破片である。2の甕は口縁端部が上下にのび、胎土に結晶片岩の含有が認められる。遺物総重量10.6kg。掲載遺物5点。



第243図 31号古墳

32号古墳 (遺構：第244図、P L 89 遺物：第248・249図、P L 152・153、遺物観察表P 77)

位置：b17～d20グリッド。北無過半が調査区外。南西に30号古墳が隣接。重葺：42号・47号溝に切られる。墳丘部下にあたる位置に古墳時代前期の58号・59号住居跡が構築されていた。また、後述する道路状遺構(52号・53号溝)は本古墳を乗り越えるような状態にあり、あるいは道路状遺構構築時に本古墳は壊されていた可能性がある。形態：南側周溝は角を持って曲がっており方墳の可能性もあるが、全容は不明であり断定できない。規模：径(全長)27m前後と推定される。墳丘：既に削平。葺石：周溝内から人頭

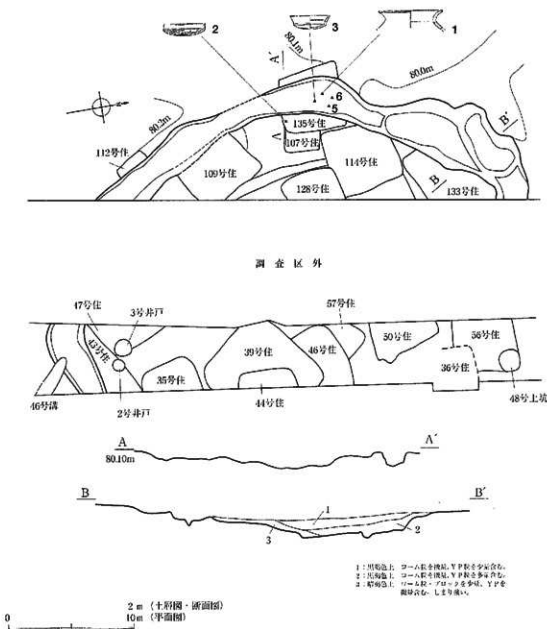


第244図 32号古墳

大前後の河原石が大量に出土しており、珪石が崩れた(崩された)ものと考えられる。主体部：検出されなかった。墳丘部面積・周溝部面積：不明。周溝：調査範囲において全周する。周溝幅・深さ等には規格性がみられず不定形な状態である。周溝南側は幅狭となり直角に近い角度で曲がっている。南東部は外側に広がっている。上端最大幅5.12m、下端最大幅4.93m。上端最小幅1.25m、下端最小幅1.02m。残存深度61cm。埋没土はローム粒・ロームブロック等を含む暗褐色土を基調とする。先述したように、底面より数cm上から大量の河原石(大半が安山岩)が出土している。時期：7世紀代と想定される。

遺物出土状態：周溝内の河原石に混じるような状態で土師器・須恵器が出土している。

遺物：土師器(坏)・須恵器(甕・壺)がある。須恵器大甕(3)は頸部に補強帯を巡らせており、胎土には結晶片岩・白色針状矽の含有が認められる。また、5の須恵器甕は底部付近に焼成後の穿孔がある。遺物総重量13.2kg。掲載遺物8点。



第245図 33号古墳

33号古墳 (遺構：第245図、P L 90 遺物：第250図、P L 153、遺物観察表P 78)

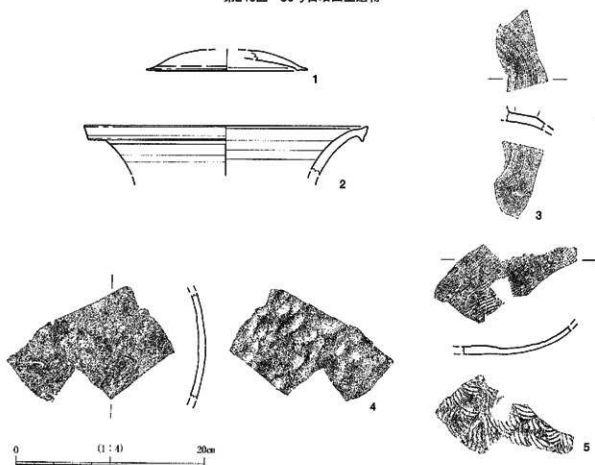
位置：R 4～V 3 グリッド。古墳時代の住居跡密集地域に構築されている。5区・6区間及び東側は調査区外。重複：墳丘部下やその周辺に位置する古墳時代の住居跡多数を切っている。また、平安時代及び中世の遺構に切られている。5区→6区の順に調査したが、5区調査時には調査区が幅狭で重複が激しかったため古墳の存在に気付かず、6区調査時に至って古墳の周溝と判断した。形態：円墳と推定される。規模：不明。径35m前後か。墳丘：既に削平。墓石：なし。主体部：検出されなかった。墳丘部面積・周溝部面積：不明。周溝：幅・深さ等には規格性がみられず不定形な状態である。上端最大幅5.60m、下端最大幅4.60m。上端最小幅1.60m、下端最小幅1.26m。残存深度50cm。埋没土はローム粒・Y P粒を含む黒褐色土～暗褐色土。時期：7世紀代と想定される。

遺物出土状態：周溝内に散在するような状態で出土している。重複する遺構の遺物も多い。

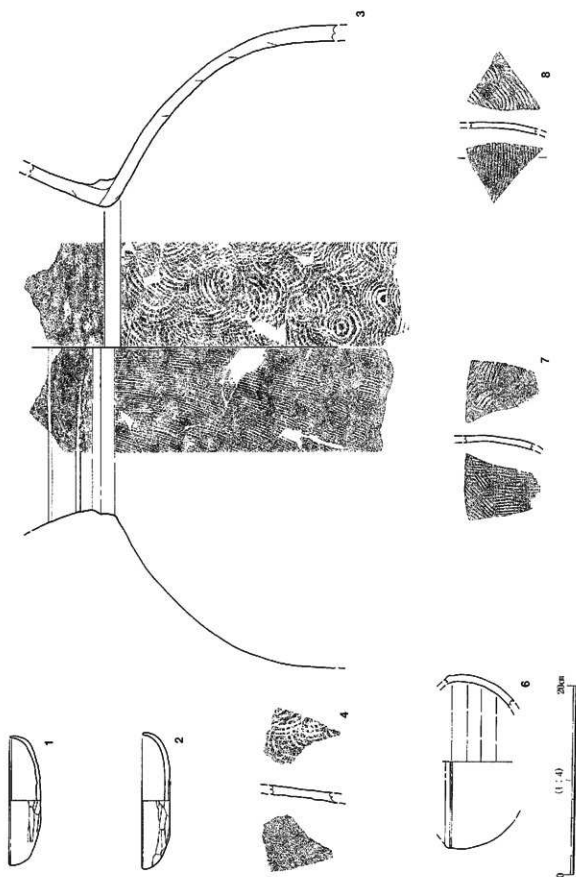
遺物：土師器(甕・坏・高坏)・須恵器片がある。遺物総重量8.0kg。掲載遺物6点。



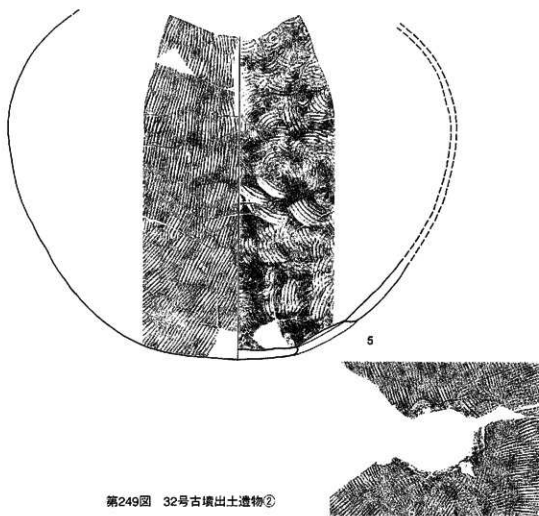
第246図 30号古墳出土遺物



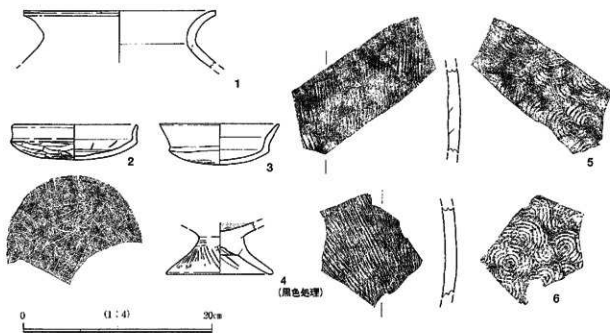
第247図 31号古墳出土遺物



第248図 32号古墳出土遺物①



第249図 32号古墳出土遺物②



第250図 33号古墳出土遺物

## (2) 住居跡

## 28号住居跡 (遺構:第251図 遺物:第274図、P L164、観察表P78)

位置: Y1グリッド。西側・東側は調査区外。重複: 29号住居跡・40号溝・46号土坑に切られる。主軸方位・平面形態・規模・床面積: 不明。残存深度: 21cm。壁の状態: 不明。床面: やや凹凸がみられる。壁周溝: 確認されなかった。柱穴: 遺構内にビット7基があるが主柱穴は不明。カマド: 不明。貯蔵穴: 確認されなかった。掘り方: 確認されなかった。埋没土の特徴: ローム粒・ロームブロック等を含む黒褐色土~暗褐色土。

遺物出土状態: 南東部に遺物が集中する地点がみられる。

遺物: 土師器甕2以上・坏4以上・高坏1を確認している。坏は内斜口縁のものである。掲載遺物7点。

## 29号住居跡 (遺構:第252図、P L154 遺物:第274図、P L164、観察表P78)

位置: Y1グリッド。東端一部が調査区外。重複: 28号・34号住居跡を切る。38号・54号溝に遺構上面を切られる。主軸方位: N-78°-E。平面形態: 方形。規模: 4.15m×3.86m。床面積: 16㎡程度と推定される。残存深度: 42cm。壁の状態: やや傾斜を持って立ち上がる。北東部は既に削平されている。床面: 多少の凹凸がみられる。壁周溝: カマド部分及び北東部を除き全周する。柱穴: カマド以西にビット9基があり、深さ30cm程度の3本が主柱穴と考えられるが、北東部の主柱穴は不明。カマド: 東壁中央部に位置。粘土で構築されている。天井部は既に崩落しており、掛け口の状態は不明。支脚は確認されなかった。煙道部は調査区外であり詳細不明である。カマド内には5層・7層に灰が、9層に灰と炭化材が堆積していた。貯蔵穴: カマドの両脇には20cm程度の凹みがあるが、貯蔵穴とは考えられない。この「凹み」もどのような性格のものか判断できなかった。掘り方: 確認されなかった。埋没土の特徴: ローム粒・ロームブロック等を含む暗褐色土~黒褐色土。2層中にF Aブロックが認められる。

遺物出土状態: 縁辺部に散在するような出土状態であった。西寄り床面付近から欠損品ではあるが陶器製の勾玉が出土している。また、埋没土中から生痕化石が出土している。

遺物: 土師器甕2以上・高坏3以上・坏8以上が存在するが小破片が多い。そのほか、須恵器甕破片・勾玉・生痕化石を確認している。掲載遺物5点。

## 31号住居跡 (遺構:第253図、P L154)

位置: W1グリッド。東側過半が調査区外。重複: 39号・41号溝に切られる。主軸方位: 不明。平面形態: 不明であるが長方形基調と想定される。規模: -×3.25m。残存深度: 10cm。壁の状態: 不明。床面: 多少の凹凸がみられる。壁周溝: 確認されなかった。柱穴: 遺構内にビット2基がある。カマド: 不明。調査区外に存在すると思われる。貯蔵穴: 確認されなかった。掘り方: 確認されなかった。埋没土の特徴: ローム粒・ロームブロック等を含む暗褐色土。

遺物出土状態: 土師器破片が散在するような状態で出土している。

遺物: 土師器(甕・坏・高坏)破片を確認している。いずれも小破片である。掲載遺物0。

## 32号住居跡 (遺構:第253図、P L154 遺物:第274図、P L164、観察表P79)

位置: X1グリッド。西側過半が調査区外。重複: 34号・52号住居跡を切る。浅い54号溝に切られるが、

遺構の上面のみである。主軸方位：N-53°-E。平面形態：不明であるが、方形基調と想定される。規模：-×3.0m前後と推定される。床面積：不明。残存深度：24cm。壁の状態：傾斜を持って立ち上がりはじめる。床面：多少の凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。壁間溝：確認されなかった。柱穴：調査範囲内にピット2基があるが主柱穴は不明。カマド：北東壁中央南寄りに位置。粘土で構築されている。天井部は既に崩落している。カマド床面中央付近に河原石の支脚が埋められていることから、掛け口1か所の可能性が高いが断定はできない。煙道部は急傾斜を持ち、わずかに壁外に出る。カマド床面には灰が堆積していた。貯蔵穴：カマド向かって右脇に径48cm・深さ50cmの円形坑があり、貯蔵穴と判断した。貯蔵穴からの出土遺物はない。掘り方：確認されなかった。埋没土の特徴：2層にFAが堆積している。遺物出土状態：カマド内から土師器杯2点が出土しているほか、土師器・須恵器片が散在するような状態で出土している。

遺物：土師器甕1以上・杯3以上・高坏片、須恵器甕片を確認している。土師器杯には内斜口縁のものと口縁部・体部境に稜を持つものがある。掲載遺物5点。

**33号住居跡**（遺構：第254・255図、P L154・155 遺物：第275図、P L164、観察表P79）

位置：X1グリッド。西側過半が調査区外。重複：52号住居跡を切る。39号溝に切られる。主軸方位：N-66°-E。平面形態：不明であるが、方形基調と想定される。規模：-×5.53m。床面積：不明。残存深度：30cm。壁の状態：やや傾斜を持って立ち上がりはじめる。床面：多少の凹凸はあるが全体的にはほぼ平坦である。壁間溝：確認されなかった。柱穴：調査範囲内に主柱穴の内2本を確認している。カマド：東壁中央やや北寄りに位置。粘土で構築されている。天井部は既に崩落しており、掛け口の状態は不明。カマド内に支脚に使用されていたと思われる被熱痕のある河原石が床面から5cmほど上で1点検出されている。煙道部は1.10mほど壁外にのびる。また、カマド埋没土5・6・7・11層には灰が堆積している。貯蔵穴：カマド向かって右側に径35cm・深さ20cmのピットがあるが貯蔵穴とは考えにくい。掘り方：縁部を幅1.20m前後・深さ20cm前後「回」の字状に掘り込んでいる。また、カマド向かって右脇から西方に溝状の掘り込みがある。埋没土の特徴：ローム粒・ロームブロック・FA等を含む暗褐色土。

遺物出土状態：カマド脇から土師器鉢が出土しているほか、埋没土中から土師器・須恵器破片が出土している。

遺物：土師器甕2以上・鉢1・杯3以上・増1以上・高坏脚部片、須恵器破片を確認。掲載遺物4点。

**35号住居跡**（遺構：第255図、P L155 遺物：第275図、P L164、観察表P79）

位置：S2グリッド。東側過半が調査区外。主軸方位：不明。平面形態：不明であるが、方形基調と想定される。規模：-×4.15m。床面積：不明。残存深度：36cm。壁の状態：やや傾斜を持って立ち上がりはじめる。床面：やや凹凸がみられる。壁間溝：確認されなかった。柱穴：調査範囲内にピット3基がみられるが主柱穴構成は不明。カマド：不明。調査区外に存在すると思われる。貯蔵穴：確認されなかった。掘り方：確認されなかった。埋没土の特徴：ローム粒・ロームブロック・白色軽石粒等を含む黒褐色土〜暗褐色土。

遺物出土状態：埋没土中に散在するような状態であった。

遺物：土師器杯3以上・碗1・高坏片・甕片を確認している。掲載遺物2点。



## 36号住居跡 (遺構:第256図、P L 155 遺物:第275・276図、P L 165、観察表P 79)

位置: V 2 グリッド。東側一部が調査区外。重複: 56号住居跡を切る。主軸方位: N-98°-E。平面形態: 長方形基調と想定される。規模: 不明。床面積: 不明。残存深度: 18cm。壁の状態: 南側を除き遺存状態が悪く既に削平されている部分が多い。床面: 凹凸がみられる。壁間溝: 確認されなかった。柱穴: ビット4基があるが、主柱穴構成は不明。両端のビットは56号住居跡の柱穴と考えられる。カマド: 東壁中央付近に位置。粘土で構築されている。天井部は既に崩落しており、掛け門の状態は不明。カマド中央部床面から支脚に使用されていたと思われる被熱痕のある河原石が検出されている。煙道部は調査区外であり詳細不明である。カマド床面には灰が堆積している。貯蔵穴: 確認されなかった。掘り方: 確認されなかった。埋没土の特徴: ローム粒・ロームブロック・白色軽石粒等を含む暗褐色土。

遺物出土状態: カマドに向かって右脇から土師器埴が正位の状態で出土している。遺物は比較的南東部に集中する状態にあるが、遺構の遺存状態にも起因する可能性がある。

遺物: 土師器甕2以上・埴1・坏4以上・高坏1、須恵器甕片・砥石を確認している。罌は球罌と長罌とがある。埴の内面には澱粉状の付着物が認められる。掲載遺物10点。

## 38号住居跡 (遺構:第256図、P L 155 遺物:第276図、P L 165、観察表P 80)

位置: R 2 グリッド。南側及び西側が調査区外。重複: 弥生時代後期の37号住居跡を切るが、調査当初は遺構の重複に気づかず、37号住居跡の床面まで掘ってしまったため38号住居跡の床面大半を掘り過ぎてしまった。また、上部は大きく攪乱を受けている。主軸方位・平面形態・規模・床面積: 不明。残存深度: 30cm。壁の状態: 傾斜を持って立ち上がりはじめる。床面: 調査部分は多少の凹凸があるものの、ほぼ平坦であった。3層上面が床面と考えられる。壁間溝: 確認されなかった。柱穴: 調査上のミスもあり確認できなかった。カマド: 不明。調査区外に存在していると思われる。貯蔵穴: 確認されなかった。掘り方: 確認されなかった。埋没土の特徴: ローム粒・ロームブロック等を含む暗褐色土。

遺物出土状態: 埋没土中に散乱するような出土状態であった。

遺物: 土師器坏1・甕破片、須恵器片を確認している。掲載遺物2点。

## 39号住居跡 (遺構:第257図、P L 156 遺物:第276・277図、P L 165、観察表P 80)

位置: T 2 グリッド。東側1/3ほどが調査区外。重複: 44号住居跡に切られる。主軸方位: 不明。平面形態: 方形。規模: 推定6.7m×6.6m前後。床面積: 不明。残存深度: 36cm。壁の状態: やや傾斜を持って立ち上がりはじめる。床面: 多少の凹凸があるが、全体的にほぼ平坦である。壁間溝: 確認されなかった。柱穴: 主柱穴4本と想定され、その内の3本を確認している。そのほかビット8基がある。カマド: 調査範囲内において確認されなかった。貯蔵穴: 確認されなかった。掘り方: 確認されなかった。埋没土の特徴: ローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土～黒褐色土。3層は焼土が炭化材を互層に挟むような状態にある。備考: 3層の状態から、土葺き屋根であった可能性も考えられる。

遺物出土状態: 比較的良好な遺存状態で出土している。南西部床面付近に集中していた。また、埋没土中から勾玉の未製品が出土している。

遺物: 土師器甕4以上・埴2・坏10以上・高坏3以上、須恵器甕片、勾玉未製品1、砥石4を確認している。土師器坏には内斜口縁のものと内湾口縁のものがある。掲載遺物17点。

42号住居跡 (遺構：第258図 遺物：第277図、P L166、観察表P81)

位置：R 2 グリッド。東側大半が調査区外。重複：風倒木痕より本遺構が新しい。備考：遺構北側でわずかに壁面の立ち上がりを確認し、方形あるいは長方形の平面形態と推定されたことから住居跡と判断したが、遺存状態が悪く詳細については不明な部分が多い。埋没土の特徴：ローム粒・ロームブロック等を含む暗褐色土。

遺物出土状態：風倒木部分の床面数cm上で土師器環が出土している。

遺物：土師器環2以上を確認している。掲載遺物1点。

43号住居跡 (遺構：第258図 遺物：第277図、P L166、観察表P81)

位置：S 2 グリッド。重複：2号井戸・33号古墳に切られる。備考：北側で壁面の立ち上がりを確認し、また柱穴と思われるピット1基を検出したことから住居跡と判断したが、重複の影響もあり遺存状態が悪く、詳細は不明である。

遺物出土状態：北側壁面付近から埴が出土している。そのほか、埋没土中から土師器片がみられた。

遺物：土師器埴1・瓷破片を確認している。掲載遺物1点。

44号住居跡 (遺構：第259図、P L156 遺物：第278図、P L166、観察表P81)

位置：T 2 グリッド。東側大半が調査区外。重複：39号住居跡を切る。主軸方位：不明。規模：-×4.45 m。床面積：不明。残存深度：30cm。壁の状態：やや傾斜を持って立ち上がる。床面：多少の凹凸がみられる。壁周溝：確認されなかった。柱穴・カマド・貯蔵穴：調査範囲において検出されなかった。掘り方：確認されなかった。埋没土の特徴：ローム粒・ロームブロック・白色軽石粒等を含む暗褐色土を基調とする。4層には炭化材層がみられる。備考：北側床面に焼土が分布する。

遺物出土状態：焼土周辺から土師器瓶・環、石製模造品(剣形)が出土している。また、埋没土中から欠損するが勾玉が出土している。

遺物：土師器瓶1・埴3以上・環3以上、石製模造品(剣形1・勾玉1)を確認。掲載遺物4点。

46号住居跡 (遺構：第259図 遺物：第278図、P L166、観察表P81)

位置：T 2 グリッド。東側は調査区外。重複：39号・57号住居跡に切られる。主軸方位：不明。平面形態：不明であるが、方形基調と想定される。規模・床面積：不明。残存深度：不明。壁の状態：不明。床面：多少の凹凸がみられる。壁周溝：確認されなかった。柱穴：確認されなかった。カマド：調査範囲内において炉跡・カマドとも確認されなかった。貯蔵穴：確認されなかった。掘り方：縁辺部を幅広く10cm前後掘り込む。埋没土の特徴：57号住居跡に切られており不明。

遺物出土状態：埋没土中から出土しているが、切り合いからみて57号住居跡の埋没土であり、遺物の取り上げに事実認識があった。

遺物：土師器埴2以上・環2以上・埴1・高坏3以上を確認しているが、上記の理由から大半は重複する57号住居跡の遺物である可能性が高い。掲載遺物2点。

57号住居跡 (遺構：第259図 遺物：第279図、P L167、観察表P83)

位置：U 2 グリッド。南西部は調査区外。重複：46号住居跡を切る。主軸方位：不明。平面形態：不明。

明瞭に確認し得たのは北側角部分のみである。規模・床面積：不明。残存深度：14cm。壁の状態：不明。床面：多少の起伏はあるがほぼ平坦である。壁間溝：確認されなかった。柱穴：北側で1本を確認しているのみである。カマド・貯蔵穴：調査範囲内において確認されなかった。掘り方：確認されなかった。埋没土の特徴：ローム粒・ロームブロック等を含む暗褐色土。

遺物出土状態：埋没土中に散在するような状態であった。

遺物：土師器埴1・甍片、須恵器片を確認している。また、前述したように47号住居跡出土遺物としたものの大半が本住居跡の遺物と考えられる。掲載遺物2点。

#### 47号住居跡 (遺構：第260図、P L 156 遺物：第278図、P L 166、観察表P82)

位置：S 2 グリッド。33号古墳墳丘部下にあたる位置。西側大半が調査区外。重複：カマド燃焼部を3号井戸に切られる。主軸方位：N-68°-E。平面形態：不明であるが方形基調と想定される。規模・床面積：不明。残存深度：13cm。壁の状態：やや傾斜を持って立ち上がりはじめる。南側壁面は既に削平されている。床面：多少の凹凸がみられるものの全体的にはほぼ平坦である。壁間溝：確認されなかった。柱穴：調査範囲内にピット2基があるが、主柱穴構成は不明。カマド：東壁南寄りに位置。先述したように燃焼部付近を3号井戸に切られており、構築状態は不明である。煙道部は1.2mほど壁外にのび、南側手前がやや広がる。この広がっている部分に土師器埴の底部が伏せたような状態で出土しており、その下から被熱痕のある礫が出土している。出土状態：位置から断定はできないが支脚として使用されていた可能性も考えられる。貯蔵穴：確認されなかった。掘り方：確認されなかった。埋没土の特徴：ローム粒・ロームブロック等を含む暗褐色土を基調とする。

遺物出土状態：カマド煙道部及びその周辺に散在するような状態であった。

遺物：土師器埴1・土師器破片を確認している。掲載遺物1点。

#### 50号住居跡 (遺構：第260図、P L 156 遺物：第278図、P L 166、観察表P82)

位置：U 2 グリッド。33号古墳の墳丘部下にあたる位置。西側大半が調査区外。主軸方位：不明。平面形態：不明であるが、方形基調と想定される。規模：-×5.15m。床面積：不明。残存深度：29cm。壁の状態：やや傾斜を持って立ち上がる。床面：5層上面が床面と考えられる。多少の凹凸がみられる。壁間溝：確認されなかった。柱穴：ピット2基があるが主柱穴は不明。カマド：調査範囲内において確認されなかった。貯蔵穴：南東隅に楕円形坑があるが貯蔵穴とは断定できない。掘り方：確認されなかった。埋没土の特徴：F A・ローム粒・ロームブロック等を含む暗褐色土。

遺物出土状態：埋没土中に散在するような状態であった。

遺物：土師器埴2以上、須恵器高環1を確認している。掲載遺物3点。

#### 52号住居跡 (遺構：第261図、P L 156・157 遺物：第278・279図、P L 166、観察表P82)

位置：X 1 グリッド。南東隅部及び西側の一部は調査区外。重複：32号・33号住居跡に切られる。主軸方位：N-58°-E。平面形態：不明であるが方形基調と想定される。規模：-×推定4.6m。床面積：不明。残存深度：18cm。壁の状態：やや傾斜を持って立ち上がる。床面：多少の凹凸がみられる。壁間溝：確認されなかった。柱穴：ピット8基があるが、主柱穴構成は不明。カマド：北東壁中央部に位置。粘土を含む明褐色土で構築されている。天井部は既に崩落しており、掛け口の状態は不明。煙道部は壁外には出な

い状態にある。燃焼部中央付近から土師器坏が伏せた状態で出土しており、支脚に転用されていた可能性もある。貯蔵穴：カマド向かって右側に、径65cm前後・深さ37cmの円形坑がある。貯蔵穴内からは径20cm前後の球礫が出土しているのみである。埋没土の特徴：ローム粒等を含む暗褐色土。

遺物出土状態：南東側床面付近から多く出土している。

遺物：土師器甕4・瓶2・坏2以上・高坏片、須恵器片を確認している。掲載遺物8点。

56号住居跡（遺構：第261図、P.L157 遺物：第279図、P.L166、観察表P82）

位置：V2グリッド。西側は調査区外。重複：36号・49号住居跡及び48号上坑に切られる。主軸方位：不明。平面形態：不明。規模：不明。南北軸は4.7m前後と推定される。床面積：不明。残存深度：12cm。壁の状態：壁面は南側の一部を除き重複等の影響で削平されている。床面：多少の凹凸がある。壁間溝：確認されなかった。柱穴：主柱穴の内2本を検出している。東端の柱穴は36号住居跡のものである。そのほかピット3基がある。カマド・貯蔵穴：調査範囲内において確認されなかった。掘り方：確認されなかった。埋没土の特徴：ローム粒・FA等を含む暗褐色土。

遺物出土状態：北側に土師器甕・坏が集中するほかは、破片がまばらに分布する程度である。

遺物：土師器甕1・坏3・高坏片を確認している。掲載遺物4点。

95号住居跡（遺構：第262図、P.L157）

位置：L1グリッド。東側過半が調査区外。主軸方位：不明。平面形態：不明であるが方形基調と想定される。規模：不明。東西軸は2.8m前後と推定される。床面積：不明。残存深度：47cm。壁の状態：傾斜を持って立ち上がる。床面：多少の凹凸がみられる。壁間溝：確認されなかった。柱穴：主柱穴の内1本を確認している。カマド・貯蔵穴：調査範囲内において確認されなかった。掘り方：縁辺部を幅50cm前後残し、内側を深さ10cm前後掘り込んでいる。埋没土の特徴：ローム粒等を含む暗褐色土。

遺物出土状態：土師器破片がまばらに分布する程度であった。

遺物：土師器坏2（内斜口縁1・内湾口縁1）・高坏片1を確認している。掲載遺物0。

96号住居跡（遺構：第262図、P.L157・158 遺物：第279図、P.L167、観察表P83）

位置：X3グリッド。重複：古墳時代前期の130号住居跡を切る。主軸方位：N-88°-E。平面形態：長方形。規模：4.25m×3.20m。床面積：11.8㎡。残存深度：31cm。壁の状態：わずかに傾斜を持つが、東壁面は直角に近い角度で立ち上がる。床面：多少の凹凸がみられる。壁間溝：カマド両脇・南壁沿いを除いて廻っている。柱穴：主柱穴4本を確認しているが、やや掘り込みが浅い。そのほかにピット2基がある。カマド：東壁の南端付近に位置。粘土で構築されている。天井部は既に崩落しており、掛け口の状態は不明。支脚は燃焼部中央に角を持った礫が埋め込まれている。煙道部は30cmほど壁外に出る。カマド床面付近には灰が堆積している。また、焚き口付近は楕円形状に浅く凹む。貯蔵穴：確認されなかった。掘り方：確認されなかった。埋没土の特徴：ローム粒等を含む暗褐色土を基調とする。

遺物出土状態：北東側床面付近から管玉が出土している。そのほかは、埋没土中から土師器片・須恵器片がまばらに散在するような状態で出土している。

遺物：土師器甕・高坏・坏片、須恵器片、管玉（蛇紋岩製）1を確認している。掲載遺物2点。

## 97号住居跡 (遺構:第263図、P L 158 遺物:第280図、P L 167、観察表P 83)

位置: X 4 グリッド。重複: 88号土坑に切られる。主軸方位: N-84°-E。平面形態: 長方形。規模: 3.75m×2.60m。床面積: 9.1㎡。残存深度: 11cm。壁の状態: 不明。床面: 多少の凹凸がみられる。壁間溝: 北東隅付近で確認されるが、そのほかではあまり明瞭ではない。柱穴: 確認されなかった。カマド: 東壁中央部付近に位置。粘土混じりの明褐色土で構築される。カマド下部が遺存するのみで、掛け口等の状態は不明。煙道部は壁外には出ない状態にある。貯蔵穴: 確認されなかった。掘り方: 明瞭に確認されなかった。埋没土の特徴: ローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土。

遺物出土状態: カマド付近から土師器甕が、北壁際から土師器甕が出土している。

遺物: 土師器甕1以上・埴1・坏2以上・高坏1以上を確認している。掲載遺物4点。

## 98号住居跡 (遺構:第263図、P L 158 遺物:第279図、P L 167、観察表P 83)

位置: X 4 グリッド。長軸方位: N-9°-W。平面形態: 方形。規模: 3.40m×3.30m。床面積: 11.4㎡。残存深度: 3cmと浅く、遺構の範囲を確認できる程度であった。壁の状態: 不明。床面: 凹凸・起伏がみられる。北東隅付近に粘土が、中央北寄りに焼土が分布する。また、東壁際付近の楕円形坑にも焼土と粘土がみられた。壁間溝: 確認されなかった。柱穴: ビット2基があるが、主柱穴は不明。カマド: カマド・炉ともに確認されなかった。貯蔵穴: 北西隅に位置。平面形態は長方形。規模1.39×1.01m・深さ29cm。貯蔵穴内から遺物は出土していない。掘り方: 遺構内に浅い楕円形の土坑が確認されている。埋没土の特徴: ローム粒等を含む暗褐色土。

遺物出土状態: 北東隅付近から土師器甕が出土している。

遺物: 土師器甕1以上・坏2以上を確認している。掲載遺物1点。

## 100号住居跡 (遺構:第264図、P L 158・159 遺物:第280図、P L 167、観察表P 83)

位置: Z 3 グリッド。重複: 84号溝に南東壁際を切られる。主軸方位: N-50°-E。平面形態: 方形。規模: 3.55m×。床面積: 不明。残存深度: 31cm。壁の状態: やや傾斜を持って立ち上がる。床面: 多少の凹凸・起伏がみられる。壁間溝: 南西壁沿いで確認されるが、そのほかの部分では不明瞭。柱穴: 確認されなかった。カマド: 北東壁中央部付近に位置。粘性のある暗褐色土・明褐色土で構築されている。天井部は既に崩落しており、掛け口等の状態は不明。底面付近4層に灰が堆積する。煙道部は35cmほど壁外に出る状態にある。カマド内に河原石2点があるが、手前のものは支脚と判断され、煙道部のものは不明。支脚の位置は向かって左側にやや偏在しており、掛け口が2か所であった可能性もある。また、カマド中央部の2・3層中から土師器甕が正位で出土している。貯蔵穴: カマド向かって右側に位置。平面形態は楕円形。規模64cm×48cm・深さ46cm。貯蔵穴内から遺物は出土していない。掘り方: 明瞭に確認されなかった。埋没土の特徴: ローム粒等を含む暗褐色土。

遺物出土状態: カマド内から土師器甕が、カマド向かって左側から土師器甕が出土しているほかは、埋没土中に散在するような状態であった。

遺物: 土師器甕2・甕1・坏2を確認している。掲載遺物4点。

## 103号住居跡 (遺構:第265図、P L 159 遺物:第280図、P L 167、観察表P 84)

位置: X 3 グリッド。東側は調査区外。主軸方位: 不明。平面形態: 不明であるが方形基調と想定される。

規模：5.20m×。床面積：不明。残存深度：遺存状態の良い部分で6cmと浅く、遺構の範囲を判断できる程度。壁の状態：不明。床面：既に床面まで削平されていた。壁間溝：確認されなかった。柱穴：ピット7基を確認しているが、主柱穴構成は不明。カマド・貯蔵穴：調査範囲において確認されなかった。掘り方：浅い円形土坑があるほか、縁辺部を不規則に掘り込んでいる。埋没土の特徴：不明。

遺物出土状態：ピット内から土師器甕が出土しているほか、掘り方埋土内に少量の土師器・須恵器片がみられる。

遺物：土師器甕1・甕片・高坏片、須恵器片を確認している。掲載遺物3点。

104号住居跡（遺構：第265図、P L 159）

位置：W 3 グリッド。東側半分は調査区外。主軸方位：不明。平面形態：方形基調と想定される。規模：-×約5.0m。残存深度：遺存状態が悪く、遺構の範囲を判断できる程度。壁の状態：不明。床面：既に床面は削平されているものと思われる。壁間溝：確認されなかった。柱穴：ピット3基がある。東側のピットは主柱穴の内の1本と思われ、底面より15cmほど上に礎が配されている。カマド・貯蔵穴：調査範囲内において確認されなかった。掘り方：凹凸が多数みられる。埋没土の特徴：不明。

遺物出土状態：遺構範囲内に少量の土師器片・須恵器片が散在していた。

遺物：土師器坏片・甕片・甕片、須恵器片を確認。土師器坏は内斜I縁部破片である。掲載遺物0。

105号住居跡（遺構：第266図、P L 159 遺物：第281図、P L 167、観察表P 84）

位置：U 4 グリッド。重複：西側一部を風倒木に切られている。長軸方位：N-88°-E。平面形態：長方形。規模：5.00m×4.30m。床面積：推定20.1m<sup>2</sup>。残存深度：22cm。壁の状態：やや傾斜を持って立ち上がる。床面：7層上面が床面と考えられる。凹凸・起伏がみられる。壁間溝：確認されなかった。柱穴：貯蔵穴以外に柱穴・ピットは確認されなかった。カマド：カマド・炉跡ともに確認されなかった。風倒木に切られている部分にカマドが存在していたとも考えられるが、西側カマドは本遺跡では稀有であり、その可能性は低い。貯蔵穴：南西隅に位置。平面形態は楕円形。規模48cm×40cm・深さ22cm。貯蔵穴内及びその周辺に土師器甕・坏が集中していた。掘り方：西側2m四方ほどを鳥状に残し、その周辺を10cm前後掘り込んでいる。埋没土の特徴：ローム粒を含む暗褐色土を基調とする。

遺物出土状態：先述したように貯蔵穴内及びその周辺から土師器甕・坏が集中して出土しているほか、土師器甕が中央東寄りから出土している。

遺物：土師器甕2以上・甕1以上・坏9以上・高坏1以上、須恵器片を確認している。甕・甕には胎土に結晶片岩の含有が認められる。掲載遺物10点。

107号住居跡（遺構：第266図、P L 159 遺物：第281図、P L 168、観察表P 84）

位置：U 3 グリッド。33号古墳の墳丘部下にあたる位置。重複：135号住居跡を切る。長軸方位：N-5°-E。平面形態：方形。規模：推定2.9m×2.7m。床面積：推定7.1m<sup>2</sup>。残存深度：21cm。壁の状態：やや傾斜を持って立ち上がる。西側は遺構の範囲が判断できる程度であった。床面：凹凸・起伏がみられる。壁間溝：確認されなかった。柱穴：ピット2基があるが主柱穴は不明。カマド：確認されなかった。貯蔵穴：確認されなかった。掘り方：明瞭に確認できなかった。埋没土の特徴：図示しなかったが、ローム粒を含む暗褐色土を基調としていた。

遺物出土状態：中央付近で土師器壺・須恵器壺が出土しているほか、埋没土中に少量の遺物がみられる。  
遺物：土師器壺4以上・坏2以上、須恵器壺1を確認している。掲載遺物5点。

**109号住居跡**（造構：第267図、P L 160 遺物：第282図、P L 168、観察表P 85）

位置：T 3 グリッド。東側一部が調査区外。重複：33号古墳及び77号溝に切られる。主軸方位：推定N-60°-E。平面形態：長方形。規模：5.15m×4.60m。床面積：不明。残存深度：36cm。壁の状態：やや傾斜を持って立ち上がる。床面：掘り方にロームブロック混じりの黄褐色土を充填し、6層上面を床面としている。多少の凹凸はあるが全体的にはほぼ平坦である。東壁際中央付近に焼土が分布し、焼土の下には灰の堆積が認められた。壁間溝：北壁沿い及び南壁沿いで確認されるが、東・西壁沿いでは重複の影響もあり確認されなかった。柱穴：主柱穴4本と想定されるが北西及び南東の柱穴は浅い。そのほかにビット4基がある。カマド：カマド・炉跡ともに確認されなかったが、77号溝に切られる東壁際の焼土・灰の堆積状態から判断して、この部分にカマドが構築されていた可能性がある。貯蔵穴：南西隅に位置。平面形態は楕円形。規模71cm×63cm・深さ16cm。掘り方：全体を10~30cmほど掘り込んでいる。埋没土の特徴：ローム粒等を含む暗褐色土を基調とする。

遺物出土状態：比較的破損が少なく、床面付近に散乱するような状態であった。焼土分布範囲からは土師器高坏が出土している。

遺物：土師器壺2以上・壺1・坏2以上・高坏6以上を確認しており、高坏の存在比率が高い。土師器壺には胎上に結晶片岩の含有が認められる。掲載遺物7点。

**110号住居跡**（造構：第267図、P L 160 遺物：第282図、P L 168、観察表P 85）

位置：X 3 グリッド。重複：130号住居跡を切る。主軸方位：推定N-93°-E。平面形態：方形。規模：2.30m×2.25m。床面積：5.3㎡。残存深度：31cm。壁の状態：やや傾斜を持って立ち上がる。床面：多少の凹凸がみられるが全体的にはほぼ平坦である。中央付近に焼土と炭化材、中央西寄りに焼土が分布する。また、その周辺には礫がやや集中して分布していた。壁間溝：確認されなかった。柱穴：確認されなかった。カマド：東壁中央南寄りに焼土が分布し、支脚に使用されたとと思われる河原石があることから判断して、この位置にカマドが構築されていたと想定されるもの、ほとんど崩壊した状態であった。貯蔵穴：南東隅に位置。平面形態は隅丸方形。規模48cm×47cm・深さ19cm。掘り方：北西部及び北東部を10~15cmほど広範囲に掘り込むほか、中央部付近に楕円形の土坑がある。埋没土の特徴：ローム粒等を含む暗褐色土を基調とする。1層及び2層には多量の炭化材が輸出されている。備考：炭化材・焼土の分布状態からみて、本住居跡は火災に遭った可能性がある。

遺物出土状態：南壁際中央付近から土師器壺が、貯蔵穴内から土師器坏と礫が出土している。

遺物：土師器壺2・坏1・高坏脚部片、須恵器片、(台石) 1、礫8を確認している。掲載遺物4点。

**111号住居跡**（造構：第268図、P L 161 遺物：第283図、P L 169、観察表P 85）

位置：Z 3 グリッド。重複：131号・134号・136号・137号住居跡を切る。主軸方位：N-71°-E。平面形態：方形。規模：5.35m×5.10m。床面積：25.6㎡。残存深度：24cm。壁の状態：やや傾斜を持って立ち上がる。東壁中央付近に焼土がみられた。床面：多少の凹凸はあるが全体的にはほぼ平坦である。壁間溝：カマド部分を除き全周する。柱穴：主柱穴4本構成と想定される。そのほかにビット5基があり、この内南

側のピットは径65cm・深さ39cmと規模が大きい。北西隅のピットは137号住居跡の柱穴と考えられる。カマド：東壁中央付近に位置。粘土で構築されている。天井部は既に崩落しており掛け口等の状態は不明。2層及び3層に灰が堆積する。煙道部は55cmほど壁外に出る状態にある。貯蔵穴：南東隅付近に位置。平面形態は長方形で、底面は円形。規模88cm×72cm・深さ40cm。周辺に長さ20cm前後の河原石4点と焼土が分布していた。掘り方：確認されなかった。埋没土の特徴：ローム粒・白色軽石粒等を含む暗褐色土。遺物出土状態：比較的縁辺部からの出土が多い状態にある。北東部柱穴上面から土師器甕（1）、その北東にも土師器甕（2）がみられる。またこれらに近接して管玉・石製品・台石が出土している。また、南壁際中央付近からは須恵器蓋が出土している。

遺物：土師器甕4以上・坏5以上、須恵器夾灰片・蓋1・坏1以上、管玉1、石製品1、台石1、滑石原石1、薬4を確認している。管玉（7）は片岩質の滑石裂である。また石製品としたもの（8）は滑石裂勾玉の未製品と考えられる。滑石の原石が出土していることから、本住居跡で滑石製品の製作を行っていた可能性もあるが、先述した遺物のほかには滑石製品・未製品・滑石片等は確認されなかった。

112号住居跡（遺構：第269図、P.L161）

位置：S3グリッド。南東隅は調査区外。重複：33号古墳に切られる。長軸方位：N-53°-E。平面形態：長方形。規模：3.30m×2.40m。床面積：不明。残存深度：12cm。壁の状態：傾斜を持って立ち上がりはじめる。床面：凹凸がみられる。埋没土の特徴：ローム粒等を含む暗褐色土。備考：壁周溝・柱穴・カマド・貯蔵穴は確認されなかった。

遺物出土状態：土師器片がわずかにみられる程度であった。

遺物：土師器片（甕・坏・高坏）、薬（結晶片岩）を確認している。掲載遺物0。

113号住居跡（遺構：第270図、P.L162 遺物：第284図、P.L169、観察表P86）

位置：a1グリッド。西側大半が調査区外。主軸方位：N-46°-E。平面形態：不明であるが方形基調と想定される。規模・床面積：不明。残存深度：20cm。壁の状態：やや傾斜を持って立ち上がる。床面：多少の凹凸がみられる。壁周溝：南壁沿いで確認している。柱穴：深さ9cmのピット1基を確認しているが、主柱穴構成は不明。カマド：東壁に位置。一部粘土が残存しているが、既に天井部は崩落しており、遺存状態はあまり良好ではない。煙道部は90cmほど壁外に出る状態にある。カマド内からは土師器甕と坏が出土している。貯蔵穴：東隅付近に位置。平面形態は楕円形。規模56cm×47cm・深さ45cm。掘り方：確認されなかった。埋没土の特徴：ローム粒等を含む暗褐色土。

遺物出土状態：カマド向かって右脇からまとまって出土している。

遺物：土師器甕1・瓶2・埴1・坏3を確認している。掲載遺物7点。

114号住居跡（遺構：第269図、P.L162 遺物：第284・285図、P.L170、観察表P86）

位置：U3グリッド。重複：33号古墳・128号住居跡に切られ、77号溝を切る。長軸方位：N-12°-W。平面形態：方形。床面積：不明。残存深度：5cm弱でほとんど残存せず、周溝によって遺構の範囲が判断できる状態であった。壁の状態：不明。床面：多少の凹凸がみられる。中央南東寄りに1.00m×0.85mほどの範囲で炭・灰の分布がみられた。壁周溝：全周する。柱穴：主柱穴4本を確認している。カマド：カマド・炉跡ともに確認されなかった。貯蔵穴：南東隅付近に位置。2基が重複するような状態であるが、新旧関係は



確認できなかった。あるいは同時存在していた可能性もある。貯蔵穴内には少量の粘土ブロックがみられた。掘り方：確認されなかった。埋没土の特徴：不明。

遺物出土状態：貯蔵穴内から土師器壺・甗が、西側に近接して壺が出土している。また、炭・灰分布範囲の北側からは高坏が出土している。

遺物：土師器壺4以上・甗1・埴2以上・坏2以上・高坏5以上を確認している。壺(2)・高坏(6)には胎土に結晶片岩の含有が認められる。掲載遺物6点。

#### 122号住居跡 (遺構：第271図、P L 162 遺物：第285図、P L 170、観察表P 86)

位置：Y 3 グリッド。重複：39号溝に切られる。長軸方位：N - 67° - E。平面形態：方形。規模：5.70 m × 4.70 m。床面積：推定22.5 m<sup>2</sup>。残存深度：21 cm。壁の状態：不明。床面：1・2層上面が床面と考えられる。遺構検出時には既に床面が露出している状態であった。壁周溝：確認されなかった。柱穴：主柱穴4本を確認している。西側2本に比べて、東側2本の柱穴は深く掘り込まれている。炉跡：確認されなかった。貯蔵穴：南西隅に位置。平面形態は楕円形。規模93 cm × 69 cm・深さ45 cm。掘り方：縁辺部を10～20 cm程度掘り込む。埋没土の特徴：掘り方にローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土を充填している。

遺物出土状態：貯蔵穴内から土師器大甗が、西壁際中央北寄りから小形甗が出土している。

遺物：土師器大甗1・埴1・坏片を確認している。掲載遺物2点。

#### 124号住居跡 (遺構：第270図、P L 163 遺物：第285図、P L 170、観察表P 87)

位置：W 3 グリッド。重複：99号住居跡を切る。長軸方位：N - 2° - W。平面形態：方形。規模：5.05 m × 5.00 m。床面積：24.9 m<sup>2</sup>。残存深度：10 cm。壁の状態：傾斜を持って立ち上がりはじめる。床面：検出時には既に床面の大半が露出している状態であった。壁周溝：確認されなかった。柱穴：主柱穴4本を確認している。南東部の柱穴は他の3本に比べて深い。カマド：カマド・炉跡ともに確認されなかった。貯蔵穴：南東隅に位置。平面形態は楕円形。規模1.03 m × 0.75 m・深さ30 cm。掘り方：北東部及び南東部を不定形に残し全体を5～10 cm程度掘り込んでいる。埋没土の特徴：不明。

遺物出土状態：貯蔵穴内から土師器坏が2点重なって出土しており、坏の中には礫がみられた。南側柱穴間からは埴が出土している。

遺物：土師器坏4以上・埴1・甗破片を確認している。掲載遺物4点。

#### 128号住居跡 (遺構：第271図、P L 163 遺物：第286図、P L 171、観察表P 87)

位置：U 3 グリッド。33号古墳墳丘部にあたる位置。東側道半が調査区外。重複：114号住居跡を切る。長軸方位：不明。平面形態：不明であるが方形基調と想定される。規模：～4.15 m。床面積：不明。残存深度：15 cm。壁の状態：やや傾斜を持って立ち上がる。床面：多少の凹凸がある。壁周溝・柱穴：確認されなかった。炉跡：調査範囲においてカマド・炉跡ともに確認されなかった。貯蔵穴：南壁沿い西側に位置。平面形態は方形。規模61 cm × 57 cm・深さ31 cm。掘り方：縁辺部を5～20 cm程度掘り込んでいる。埋没土の特徴：ローム粒等を含む暗褐色土を基調とする。

遺物出土状態：貯蔵穴内から土師器台付甗・壺、砥石、礫2点が出土している。

遺物：土師器台付甗1・甗1・壺1・坏1、砥石1、礫2を確認している。台付甗及び壺は胎土に結晶片岩の含有が認められる。礫2点は結晶片岩で磨石と思われる。掲載遺物6点。

131号住居跡 (遺構: 第272図、P L 163 遺物: 第286図、P L 171、観察表P 87)

位置: Y 1 グリッド。東側過半が調査区外。重複: 111号住居跡に切られる。長軸方位: 不明。平面形態: 不明であるが方形基調と想定される。規模:  $\sim \times 4.30\text{m}$ 。床面積: 不明。残存深度: 16cm。壁の状態: やや傾斜を持って立ち上る。床面: 多少の凹凸がある。壁間溝: 調査範囲において全周する。柱穴: 南西部の柱穴が主柱穴の内の1本と思われる。このほか南西隅にやや大きめのピット2基がある。伊跡: 調査範囲においてカマド・炉跡ともに確認されなかった。貯蔵穴: 北西隅に位置。平面形態は楕円形。規模 $65\text{cm} \times 55\text{cm}$ ・深さ12cm。掘り方: 確認されなかった。埋没土の特徴: ローム粒等を含む暗褐色土。遺物出土状態: 南側床面から土師器片が出土している。そのほかには、ほとんど遺物はみられなかった。遺物: 土師器片1を確認している。掲載遺物1。

134号住居跡 (遺構: 第272図、P L 163 遺物: 第287図、P L 171、観察表P 87)

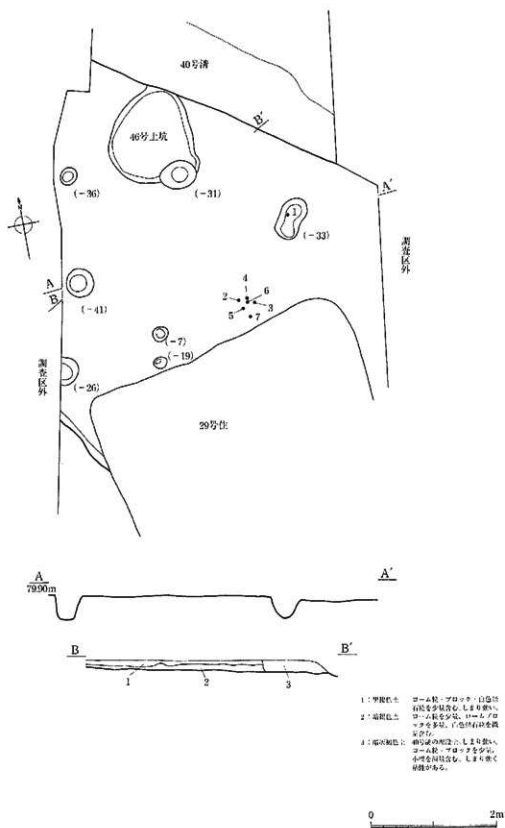
位置: Y 3 グリッド。重複: 39号溝に切られる。111号・122号・137号住居跡と重複するが、明確に遺構の新旧関係を確認できなかった。備考: 南側において2~4cm程度の掘り込みが確認できた程度で、長軸方位・平面形態・規模・床面積・壁の状態等は不明である。壁間溝・カマドは確認されなかった。遺構内にピット3基があるが位置関係から本遺構に伴わない可能性もある。また、南壁を切るような状態で平面楕円形の上坑(規模 $1.09\text{m} \times 0.95\text{m}$ ・深さ38cm)があるが、貯蔵穴であるかどうかは確認できなかった。遺物出土状態: 南側床面及び南壁際東端のピット内から出土している。遺物: 土師器片2・小形瓦1・須恵器片、台石1を確認している。掲載遺物4点。

136号住居跡 (遺構: 第273図、P L 163 遺物: 第287図、P L 171、観察表P 87)

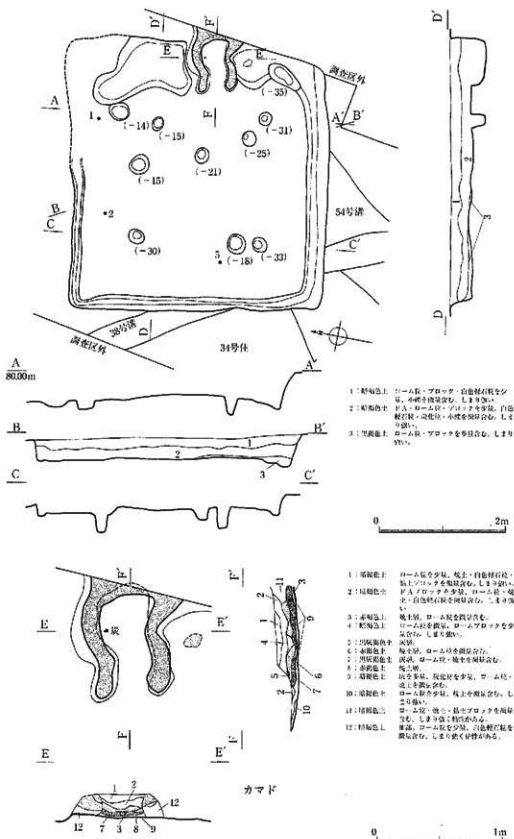
位置: Z 2 グリッド。カマド煙道部は調査区外。重複: 111号住居跡・90号溝・93号土坑に切られる。主軸方位:  $N-61^{\circ}-E$ 。平面形態: 長方形。規模:  $3.90\text{m} \times 3.40\text{m}$ 。床面積: 不明。残存深度: 15cm。壁の状態: やや傾斜を持って立ち上がる。床面: 凹凸がみられる。壁間溝: 確認されなかった。柱穴: 主柱穴4本と想定されるが、やや不均整な配置である。カマド: 東壁中央付近に位置するが90号溝によって壊されており詳細は不明である。煙道部は壁外に出る状態にある。また、焚き口付近に焼土の分布がみられる。貯蔵穴: 確認されなかった。93号土坑の位置に存在していた可能性がある。掘り方: 東側及び西側の縁辺部を幅広く7cm前後掘り下げている。埋没土の特徴: ローム粒を含む暗褐色土を基調としていた。遺物出土状態: 南壁際から瓦2点が出上しているほか、埋没土中に少量の遺物がみられる。遺物: 土師器片2以上・坑破片・坏1、小礫多数(被熱痕あり)を確認している。掲載遺物3点。

137号住居跡 (遺構: 第273図、P L 163)

位置: Y 3 グリッド。重複: 111号住居跡・73号溝に切られる。残存深度: 20cm。壁の状態: やや傾斜を持って立ち上がる。床面: 2層上面が床面で全体的にほぼ平坦である。壁間溝: 確認されなかった。柱穴: 主柱穴4本と想定される。貯蔵穴: 南壁際に平面不整楕円形の土坑(規模 $65\text{cm} \times 55\text{cm}$ ・深さ28cm)があるが貯蔵穴とは断定できない。埋没土の特徴: ローム粒・白色軽石粒を含む暗褐色土。備考: 重複の影響で残存する部分が少なく、長軸方位・平面形態・規模・床面積・カマドの状態等は不明である。遺物出土状態: 埋没土中から少量の遺物が出土している程度である。遺物: 土師器片・坏片を確認している。掲載遺物0。



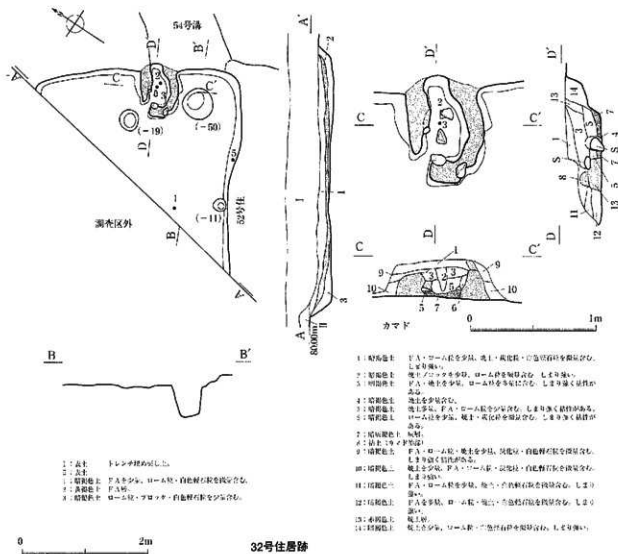
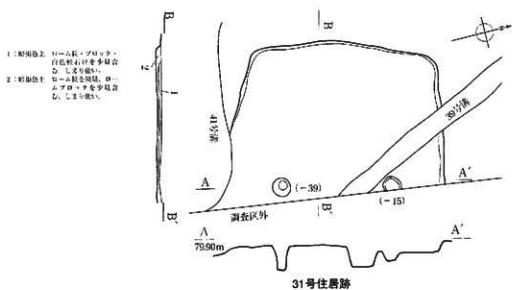
第251図 28号住居跡



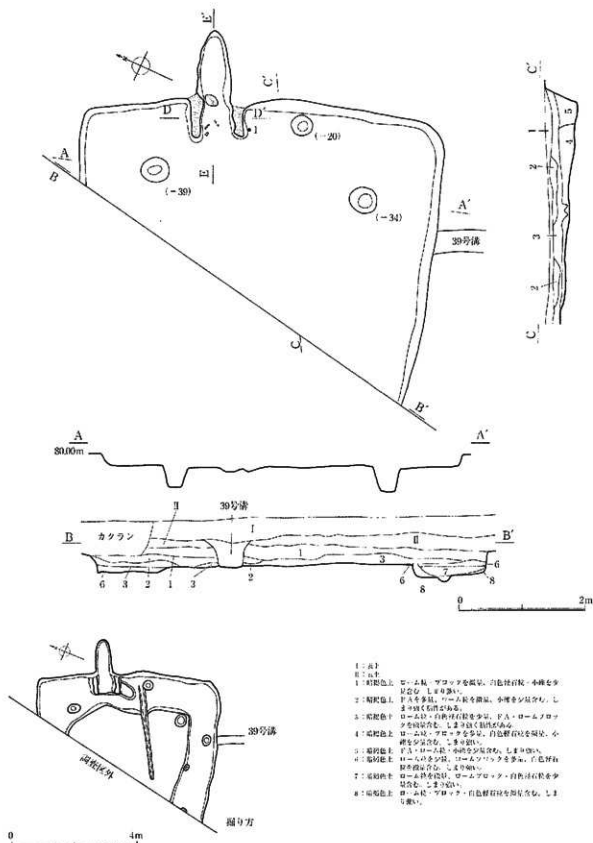
- 1: 野面土。ローム質・ブロック、白磁粒石を含む。少量の焼土を含む。しりり強い。
- 2: 野面土。ローム質・ブロックを少量。白磁粒石・焼土・小礫を含む。しりり強い。
- 3: 野面土。ローム質・ブロックを少量含む。しりり強い。

- 1: 野面土。ローム質を少量。焼土、白磁粒石・粘土・ブロックを含む。しりり強い。F A / ブロックを少量。ローム質・焼土・白磁粒石を含む。しりり強い。
- 2: 野面土。ローム質を少量。焼土、白磁粒石を含む。しりり強い。
- 3: 野面土。ローム質を少量。焼土、白磁粒石を含む。しりり強い。
- 4: 野面土。ローム質を少量。焼土、白磁粒石を含む。しりり強い。
- 5: 野面土。ローム質を少量。焼土、白磁粒石を含む。しりり強い。
- 6: 野面土。ローム質を少量。焼土、白磁粒石を含む。しりり強い。
- 7: 野面土。ローム質を少量。焼土、白磁粒石を含む。しりり強い。
- 8: 野面土。ローム質を少量。焼土、白磁粒石を含む。しりり強い。
- 9: 野面土。ローム質を少量。焼土、白磁粒石を含む。しりり強い。
- 10: 野面土。ローム質を少量。焼土、白磁粒石を含む。しりり強い。
- 11: 野面土。ローム質を少量。焼土、白磁粒石を含む。しりり強い。
- 12: 野面土。ローム質を少量。焼土、白磁粒石を含む。しりり強い。

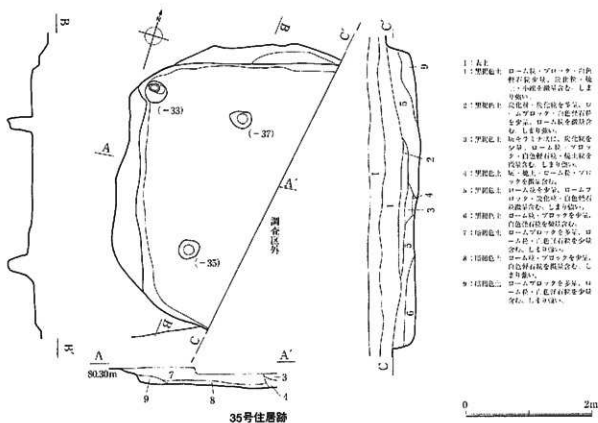
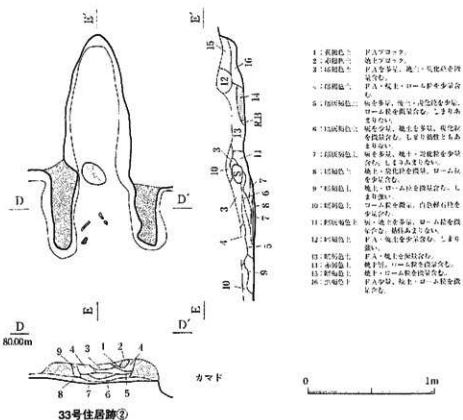
第252図 29号住居跡



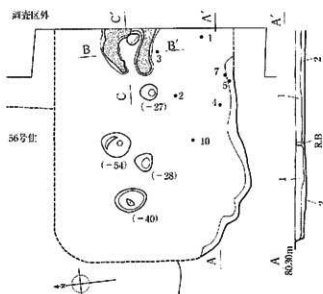
第253図 31号住居跡・32号住居跡



第254図 33号住居跡①

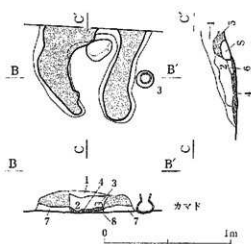


第255図 33号住居跡②・35号住居跡

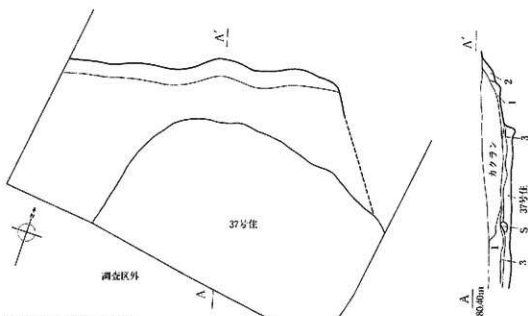


- 1 : 緑褐色土 コーム状・ブロッコ・白色粒石少量、炭化小骨散見含む。土層が深い。
- 2 : 緑褐色土 コーム状・ブロッコ少量、白色粒石を散見含む。土層が深い。

36号住居跡

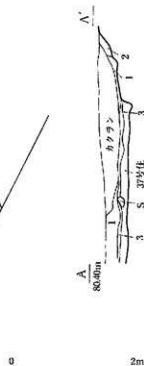


- 1 : 緑褐色土 コーム状・白色粒石少量、ロームブロッコを散見含む。
- 2 : 黄褐色土 粘土を多量に含む。砂粒石を少量含む。地中に根状物を散見含む。土層が深い。
- 3 : 緑褐色土 粘土・白色粒石を散見含む。土層が深い。
- 4 : 白褐色土 灰層。粘土・炭化小骨・ロームを散見含む。
- 5 : 黄褐色土 粘土を多量に含む。砂粒石を少量含む。ローム状・白色粒石を散見含む。
- 6 : 黄褐色土 粘土を多量に含む。砂粒石を少量含む。ローム状・白色粒石を散見含む。
- 7 : 黄褐色土 粘土を多量に含む。砂粒石を少量含む。ローム状・白色粒石を散見含む。
- 8 : 緑褐色土 コーム状・ブロッコ少量、白色粒石を散見含む。



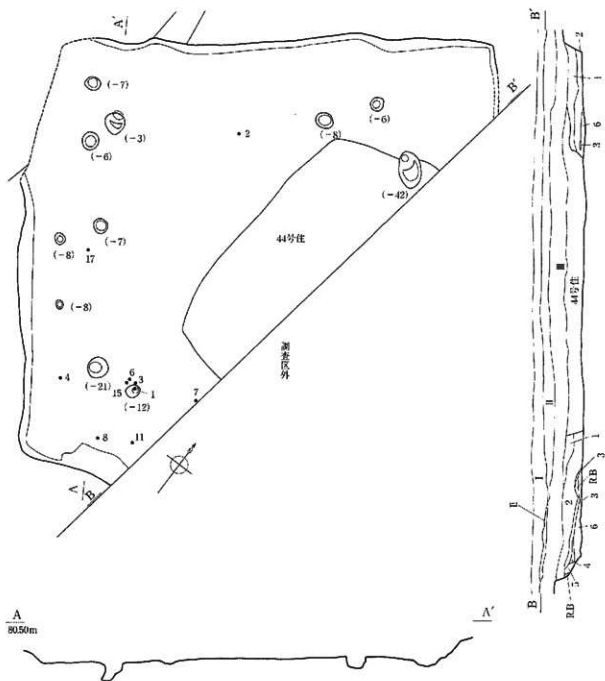
- 1 : 黄褐色土 コーム状・ブロッコを多量に含む。白色粒石を少量含む。
- 2 : 黄褐色土 コーム状を多量に含む。白色粒石を散見含む。
- 3 : 緑褐色土 粘土・ロームを少量含む。ロームブロッコを散見含む。

37号住居跡



第256図 36号住居跡・37号住居跡

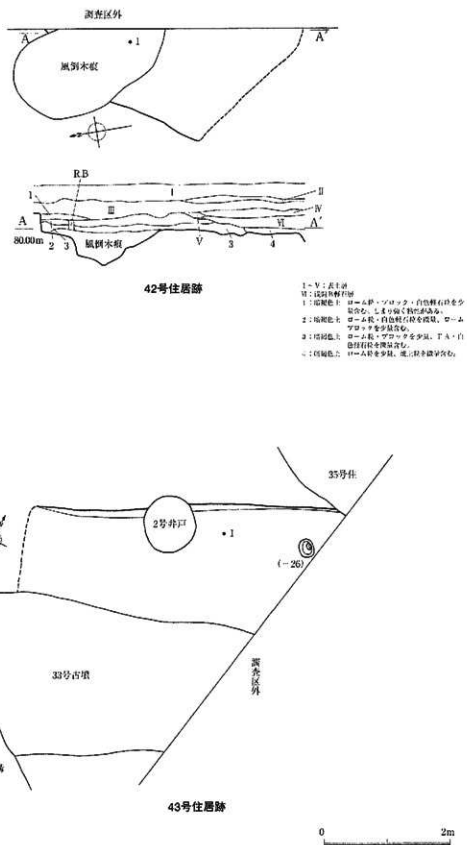




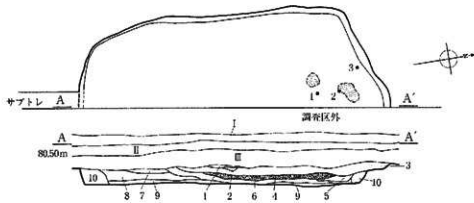
- 1 : 黄土  
 2 : 黄土、磁器、軽石を含む。  
 3 : 黄土、磁器が軽石を含む。  
 4 : 埴輪地土。ローム状、ブロック、炭化穀・雑土・草木を混じり、自然特有の少量腐植。  
 5 : 埴輪地土。ローム状、ブロック、自然軽石状、浮点を少量、炭化穀を混在含む。少量腐植。

- 6 : 埴輪地土。黄土・炭化穀が少量を混じり互層状あり。地上部が磁器・軽石を含む。ローム状、ブロック、自然軽石を含む。  
 7 : 埴輪地土。ローム状、自然特有の少量腐植を含む。  
 8 : 埴輪地土。浮点を少量、ローム状、自然軽石状、炭化穀を混在含む。少量腐植。  
 9 : 埴輪地土。浮点を少量、ローム・ブロックを多量、炭化穀を混在含む。少量腐植。

第257図 39号住居跡

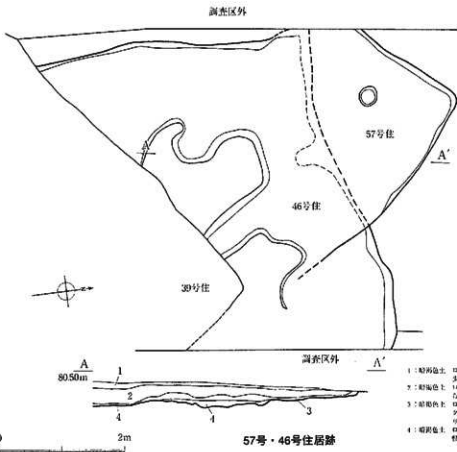


第258図 42号住居跡・43号住居跡



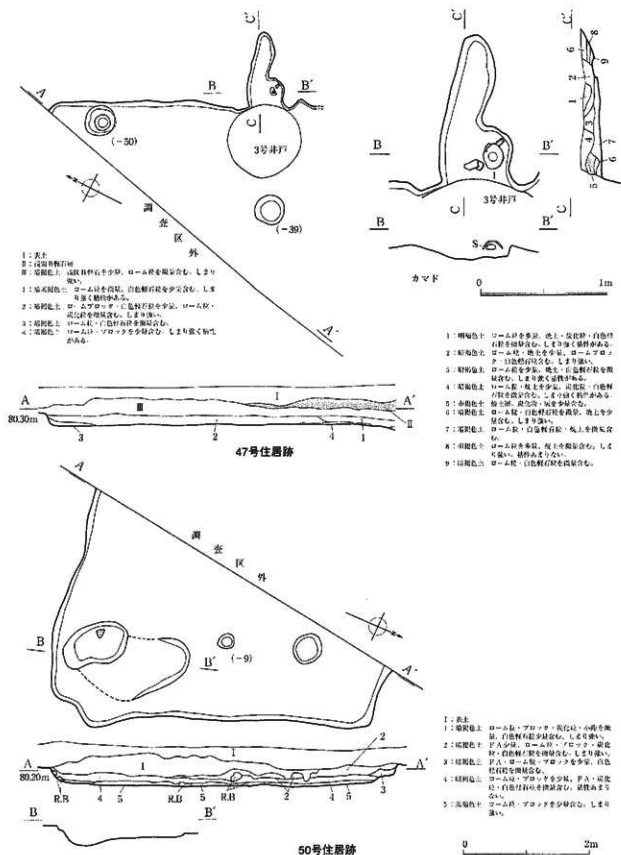
- |                |        |        |        |
|----------------|--------|--------|--------|
| 1: 遺土          | 2: 堀跡土 | 3: 堀跡土 | 4: 堀跡土 |
| 1: 遺土 試掘層の中心部。 | 1: 堀跡土 | 1: 堀跡土 | 1: 堀跡土 |
| 2: 堀跡土         | 2: 堀跡土 | 2: 堀跡土 | 2: 堀跡土 |
| 3: 堀跡土         | 3: 堀跡土 | 3: 堀跡土 | 3: 堀跡土 |
| 4: 堀跡土         | 4: 堀跡土 | 4: 堀跡土 | 4: 堀跡土 |

44号住居跡

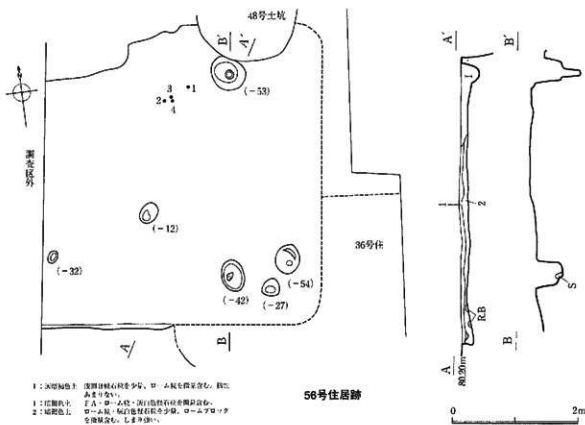
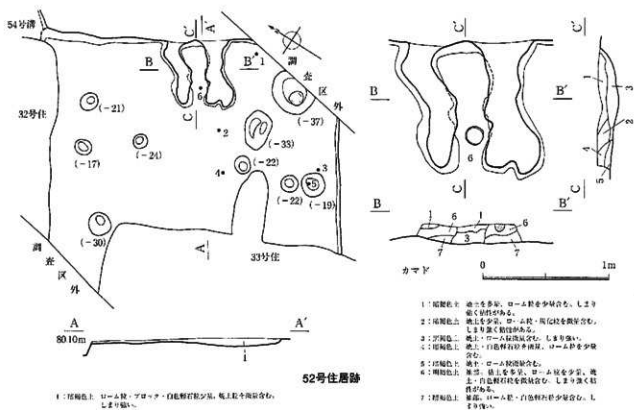


- |        |        |        |        |
|--------|--------|--------|--------|
| 1: 堀跡土 | 2: 堀跡土 | 3: 堀跡土 | 4: 堀跡土 |
| 1: 堀跡土 | 2: 堀跡土 | 3: 堀跡土 | 4: 堀跡土 |
| 3: 堀跡土 | 4: 堀跡土 |        |        |

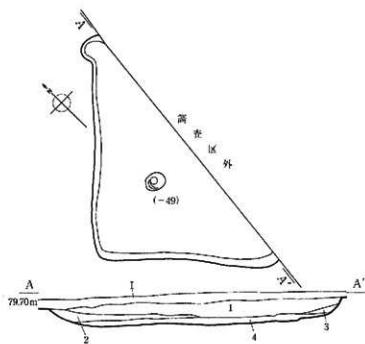
第259図 44号住居跡・57号・46号住居跡



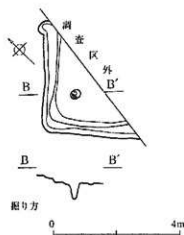
第260図 47号住居跡・50号住居跡



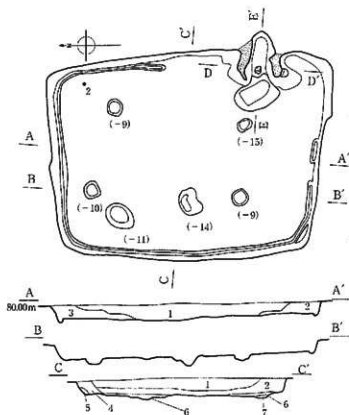
第261図 52号住居跡・56号住居跡



95号住居跡

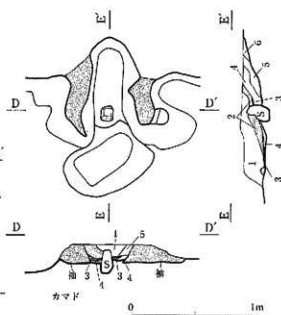


- 1: 表土  
 1: 埋藏色土 ローム質・ブロックを多量、白色砂石を少量、  
 地上段を構成する。  
 2: 埋藏色土 焼土を構成する。  
 3: 埋藏色土 焼土を構成する。  
 4: 埋藏色土 ローム質・ブロックを少量含む、しまり強い。

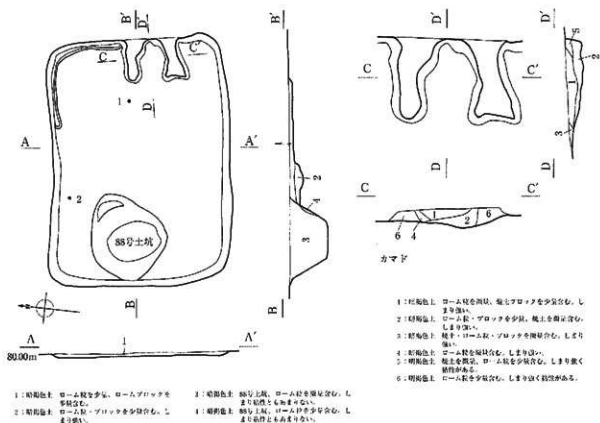


96号住居跡

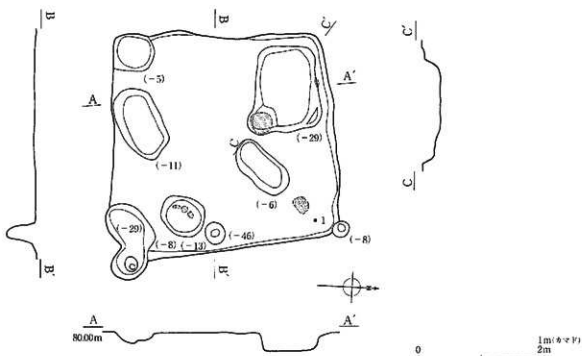
- 1: 埋藏色土 ローム質・ブロックを多量、Y P 少量、焼土質、炭化物を構成する。  
 2: 埋藏色土 ローム質・炭化物を多量含む、しまり強い。  
 3: 埋藏色土 ローム質を多量、Y P 少量、焼土を少量含む、白色砂石を構成する。  
 4: 埋藏色土 ローム質を構成する。  
 5: 埋藏色土 ローム質を少量含む。  
 6: 埋藏色土 ローム質を少量含む。  
 7: 埋藏色土 Y P 少量を構成する。



- 1: 埋藏色土 焼土・炭化物・ローム質を構成する、しまり強い。  
 2: 埋藏色土 焼土質、ローム質を構成する。  
 3: 埋藏色土 焼土。  
 4: 埋藏色土 焼土・Y P 少量を構成する、しまり強い。  
 5: 埋藏色土 焼土を少量、ローム質を構成する、しまり強い。  
 6: 埋藏色土 ローム質を構成する、しまり強い。

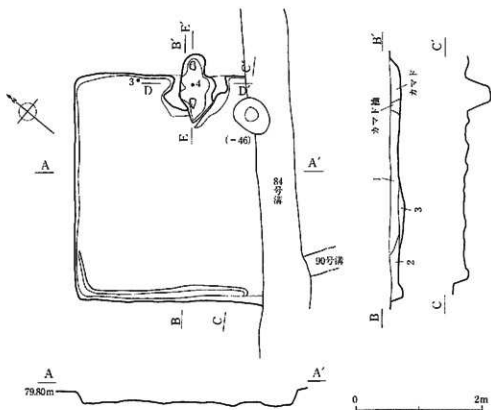


97号住居跡

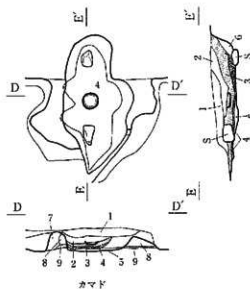


98号住居跡

第263図 97号住居跡・98号住居跡



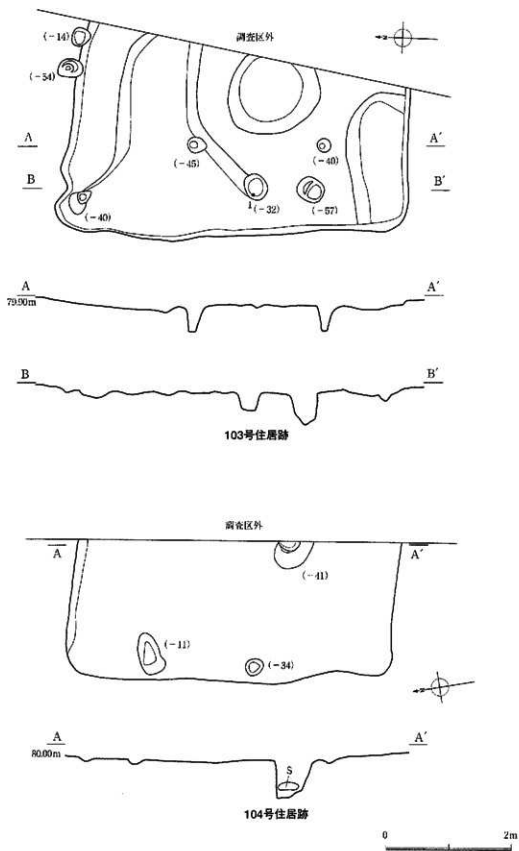
- 1: 初期地土: ローム状、白色軽石を少量、粘土質、炭化粒を多量含む。
- 2: 初期地土: ローム状を少量含む。
- 3: 初期地土: 白土層を多量含む、しりぞり。



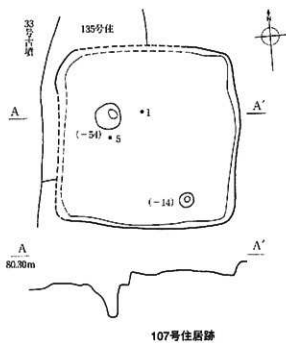
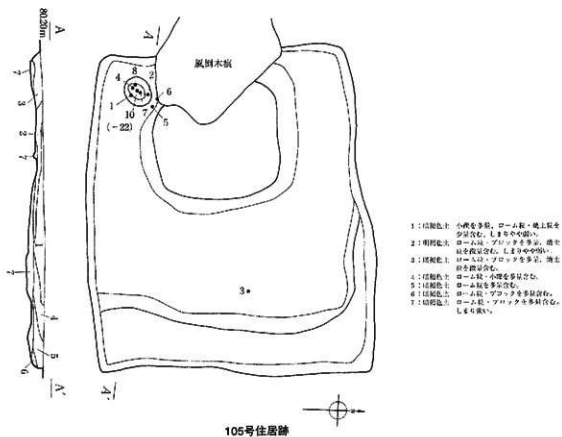
- 1: 初期地土: ローム状を少量、粘土質、炭化粒、ロームブロック、白磁石を多量含む。
- 2: 初期地土: 無。ローム状を少量、粘土質、炭化粒を多量含む。
- 3: 初期地土: 粘土質、炭化粒、ローム状を多量含む。
- 4: 初期地土: 無。粘土を多量含む。
- 5: 初期地土: ローム状を少量、粘土質、炭化粒、炭を多量含む。
- 6: 初期地土: 炭化粒、ローム状を少量、粘土質、炭を多量含む。
- 7: 初期地土: 粘土質、炭化粒、ローム状、炭化粒を多量含む、しりぞり。
- 8: 初期地土: ローム状を多量含む、しりぞり。
- 9: 初期地土: 炭化粒を多量、無を少量含む、しりぞり。

第264図 100号住居跡

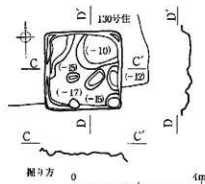
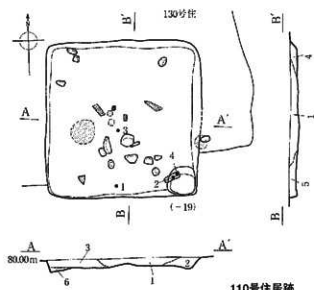
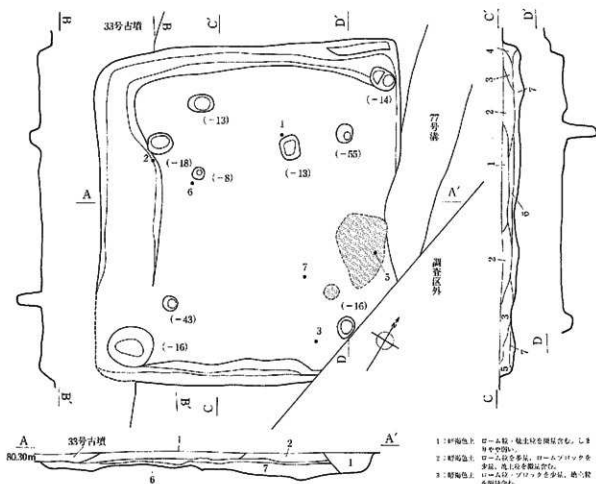




第265図 103号住居跡・104号住居跡

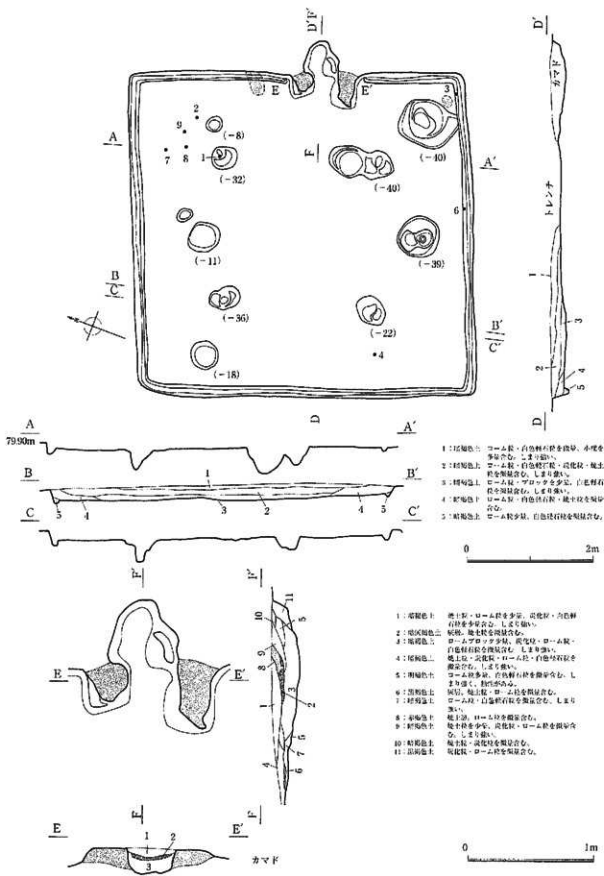


第266図 105号住居跡・107号住居跡



- 1: 貯蔵土 土間敷・壁土等を埋め合む。土中や中層。
- 2: 貯蔵土 土間敷を多量に埋め合む。
- 3: 貯蔵土 土間敷を多量に埋め合む。土間アソビを多量に埋め合む。
- 4: 貯蔵土 土間敷を多量に埋め合む。土間アソビを多量に埋め合む。
- 5: 貯蔵土 土間敷を多量に埋め合む。
- 6: 貯蔵土 土間アソビ・壁土等を少量に埋め合む。土中や中層。

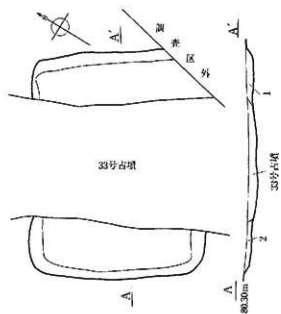
第267図 109号住居跡・110号住居跡



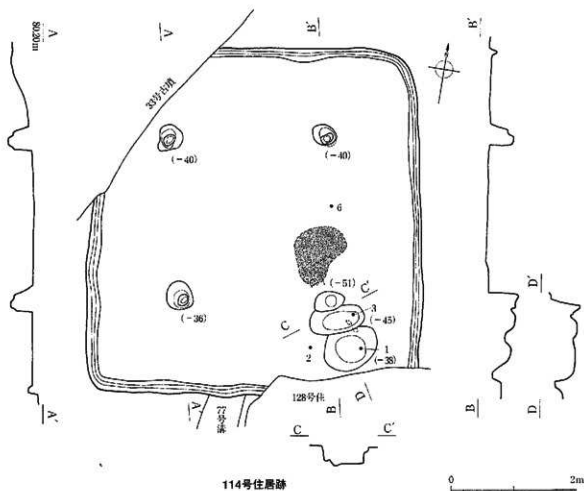
- 1: 灰層地 1 コーム状、白色軽石を散見、小塊を多量含む。土量不揃い。
- 2: 灰層地 1 コーム状、白色軽石散見、炭化穀・糠土を多量含む。土量不揃い。
- 3: 灰層地 1 コーム状、アロウチを多量、白色軽石を多量含む。土量不揃い。
- 4: 灰層地 1 コーム状、白色軽石散見、土量不揃い。
- 5: 灰層地 1 コーム状、白色軽石を多量含む。

- 1: 灰層地 1 焼土質、コーム状を多量、炭化穀、白色軽石を多量含む。土量不揃い。
- 2: 灰層地 1 焼土、炭化穀を多量含む。
- 3: 灰層地 1 コーム状を多量、炭化穀、コーム状、白色軽石を多量含む。土量不揃い。
- 4: 灰層地 1 コーム状を多量、炭化穀、白色軽石を多量含む。土量不揃い。
- 5: 灰層地 1 コーム状を多量、炭化穀を多量含む。土量不揃い。
- 6: 灰層地 1 焼土、炭化穀を多量含む。
- 7: 灰層地 1 コーム状、白色軽石を多量含む。土量不揃い。
- 8: 灰層地 1 焼土、炭化穀を多量含む。土量不揃い。
- 9: 灰層地 1 焼土、炭化穀を多量含む。土量不揃い。
- 10: 灰層地 1 焼土、炭化穀を多量含む。土量不揃い。
- 11: 灰層地 1 焼土、炭化穀を多量含む。土量不揃い。

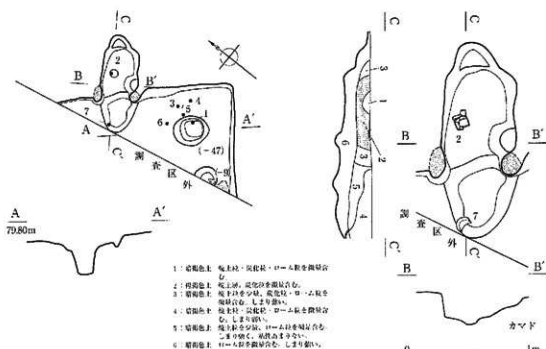
第268図 111号住居跡



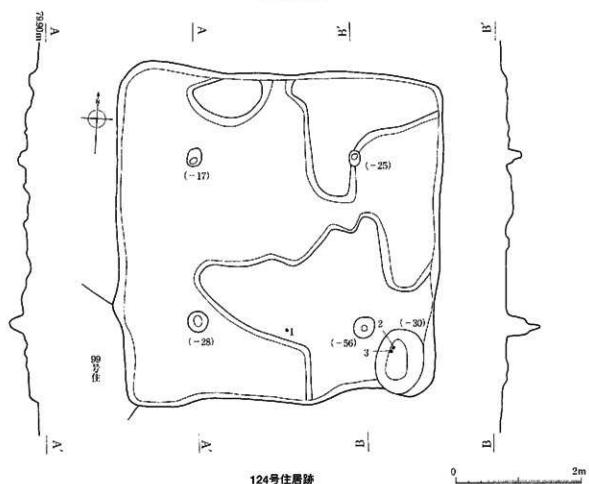
112号住居跡



第269図 112号住居跡・114号住居跡

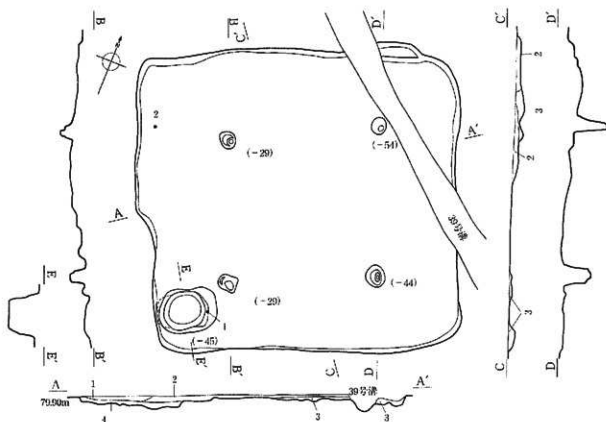


113号住居跡



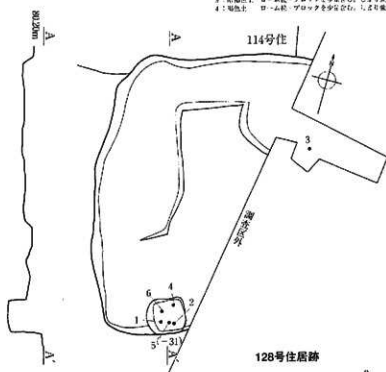
124号住居跡

第270図 113号住居跡・124号住居跡



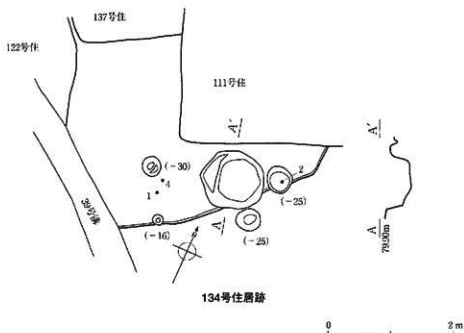
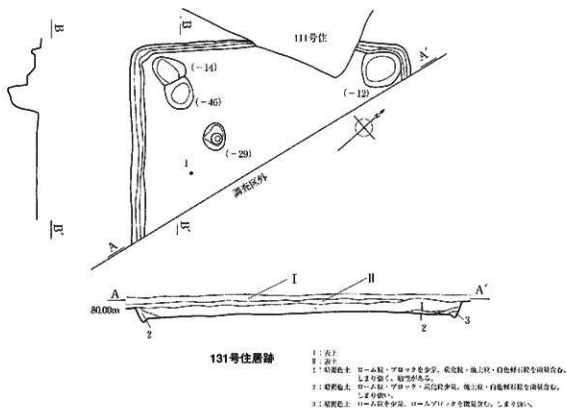
122号住居跡

- 1: 灰褐色土 ローム質・アロク・塊土アロクを少量含む。しきり悪い。
- 2: 灰褐色土 ローム質を少量。ロームアロクを多量含む。しきり悪い。
- 3: 灰褐色土 ローム質・アロクを多量含む。しきり悪い。
- 4: 褐色土 ローム質・アロクを少量含む。しきり悪い。



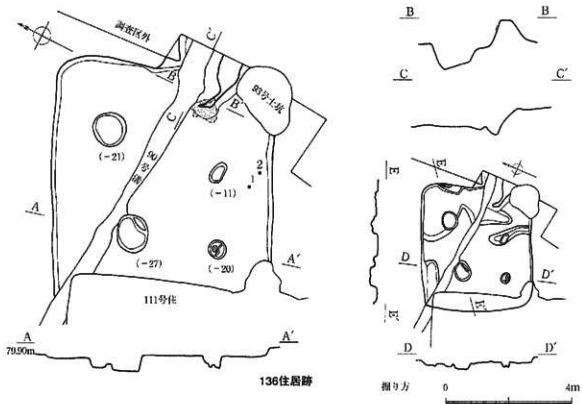
128号住居跡

第271図 122号住居跡・128号住居跡

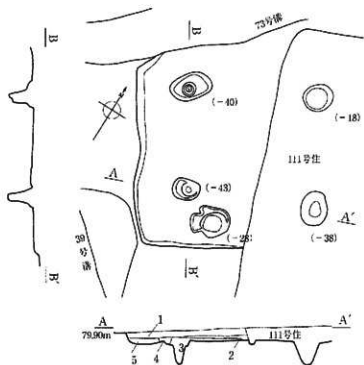


第272図 131号住居跡・134号住居跡





136住居跡

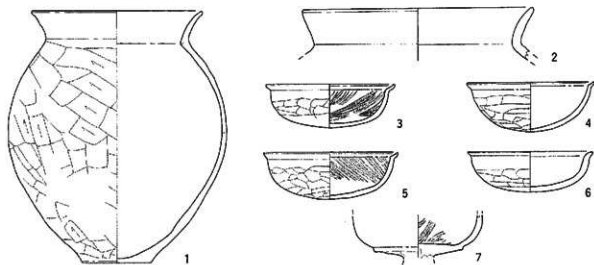


137号住居跡

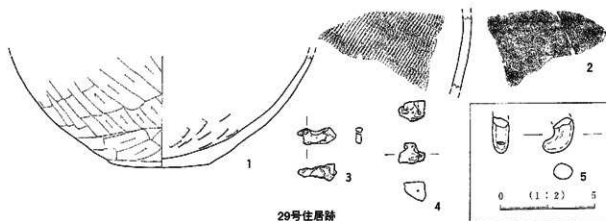
- 1: 砂礫面土 砂-土粒、白磁礫が散在埋合。L.5m幅、
- 2: 泥面土 砂-土粒多量、白磁礫が散在埋合。L.5m幅、
- 3: 泥面土 砂-土粒、白磁礫が散在埋合。L.5m幅、
- 4: 泥面土 砂-土粒、白磁礫が散在埋合。L.5m幅、
- 5: 砂礫面土 砂-土粒多量、白磁礫が散在埋合。L.5m幅、

0 2m

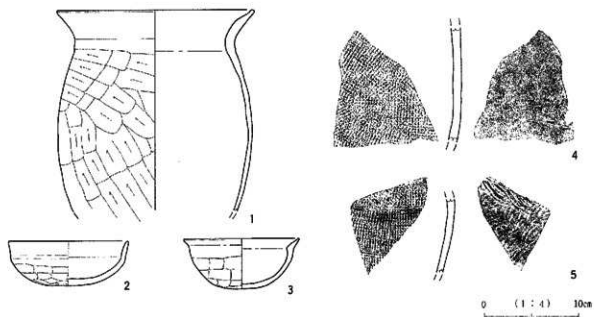
第273図 136号住居跡・137号住居跡



28号住居跡

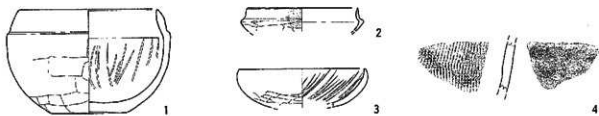


29号住居跡



32号住居跡

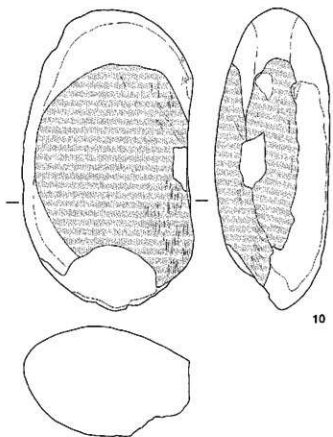
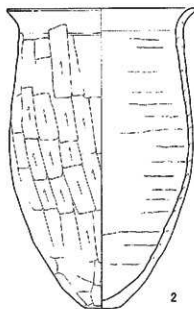
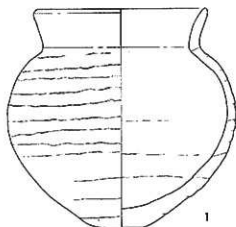
第274図 28号・29号・32号住居跡出土遺物



33号住居跡



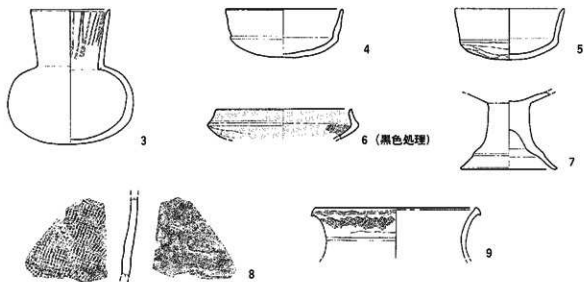
35号住居跡



36号住居跡①

0 (1:4) 10cm

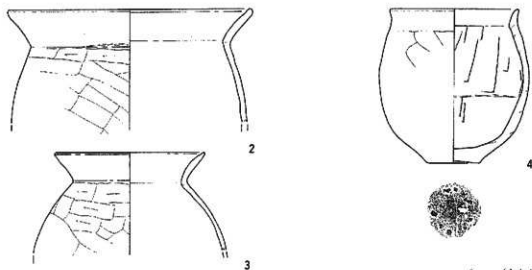
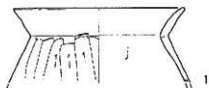
第275図 33号・35号・36号住居跡出土遺物



36号住居跡②



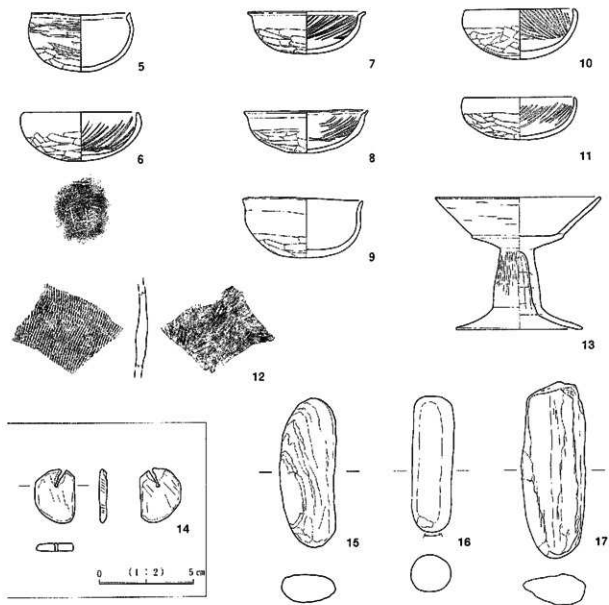
38号住居跡



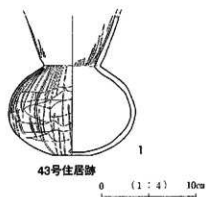
39号住居跡①

0 (1:4) 10cm

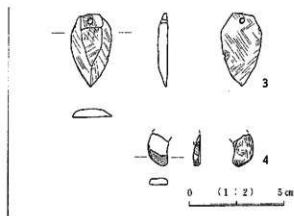
第276図 36号・38号・39号住居跡出土遺物



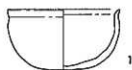
39号住居跡②



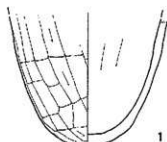
第277図 39号・42号・43号住居跡出土遺物



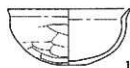
44号住居跡



46号住居跡



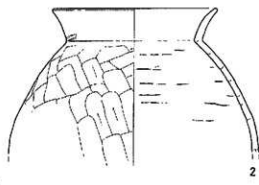
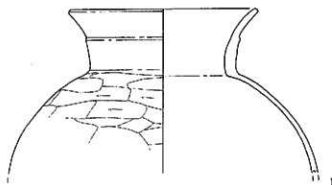
47号住居跡



2 (黑色処理)



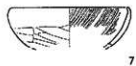
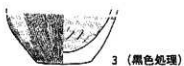
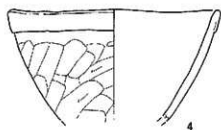
50号住居跡



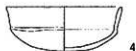
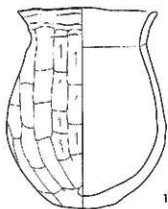
52号住居跡①

0 (1:4) 10cm

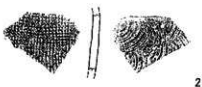
第278図 44号・46号・47号・50号・52号住居跡出土遺物



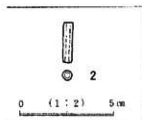
52号住居跡②



56号住居跡



57号住居跡

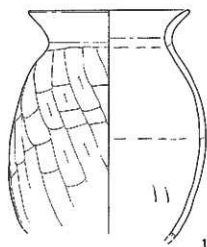


96号住居跡

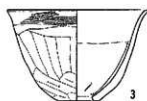
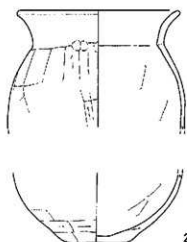
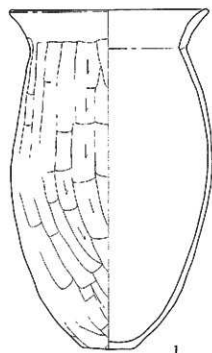
98号住居跡

0 (1:4) 10cm

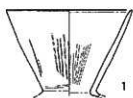
第279図 52号・56号・57号・96号・98号住居跡出土遺物



97号住居跡



100号住居跡

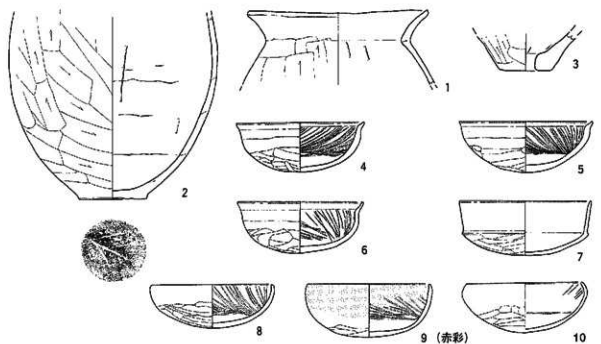


103号住居跡

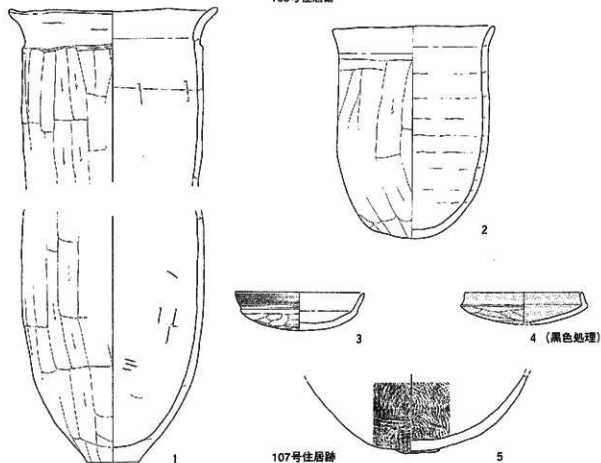
0 (1:4) 10cm

第280図 97号・100号・103号住居跡出土遺物





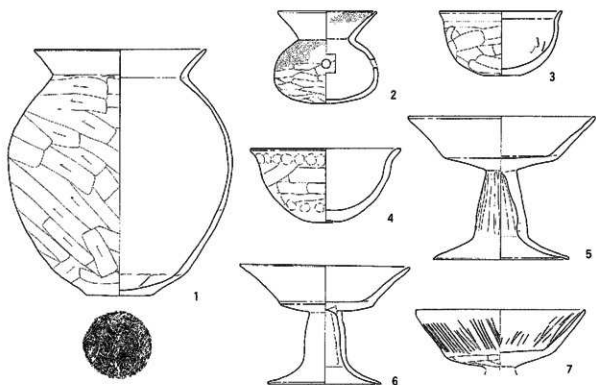
106号住居跡



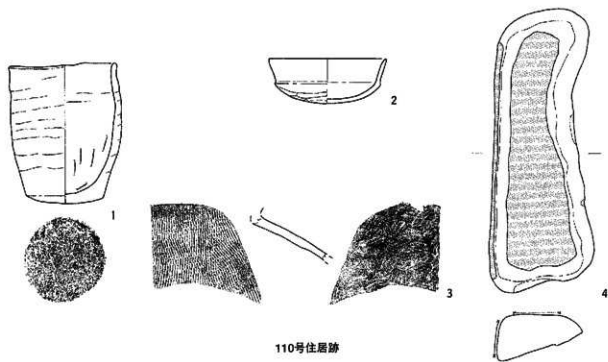
107号住居跡

0 (1:4) 10cm

第281圖 105号・107号住居跡出土遺物

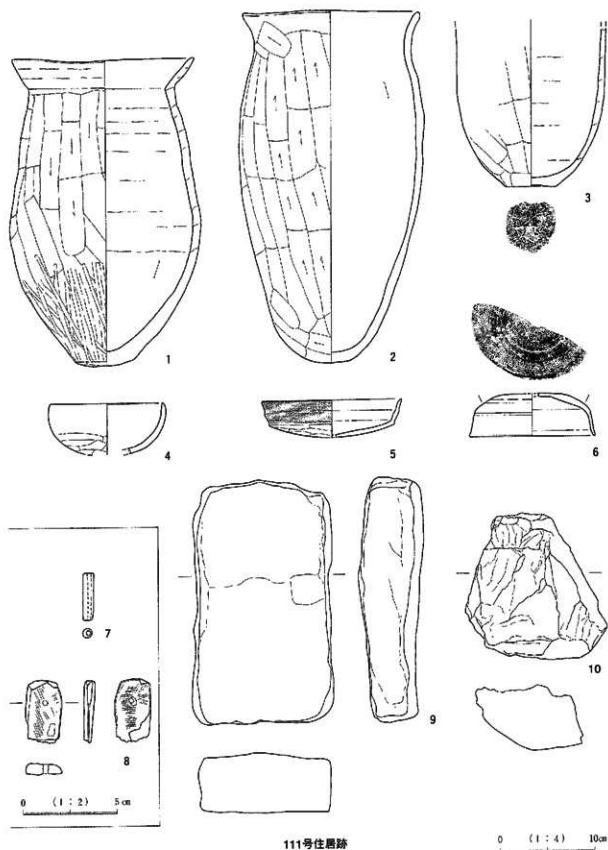


109号住居跡



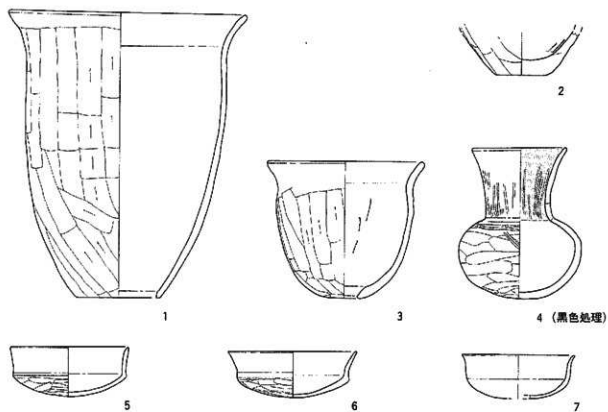
110号住居跡

0 (1:4) 10cm

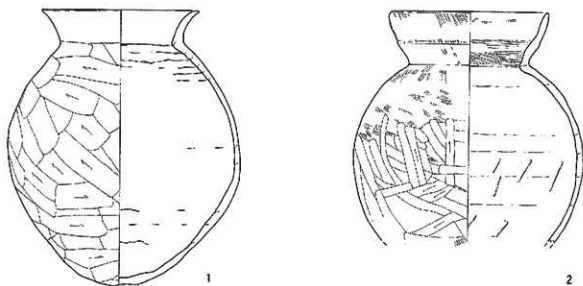


111号住居跡

第283図 111号住居跡出土遺物



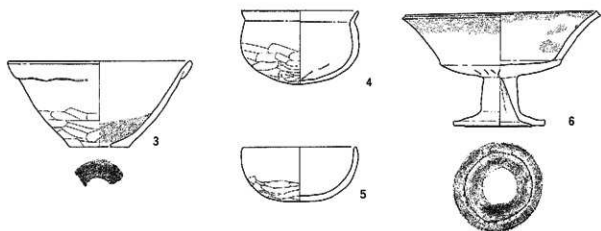
113号住居跡



114号住居跡①

0 (1:4) 10cm

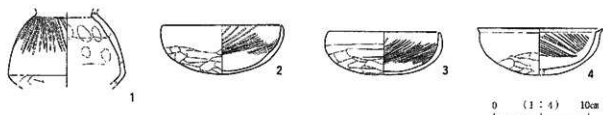
第284図 113号・114号住居跡出土遺物



114号住居跡②

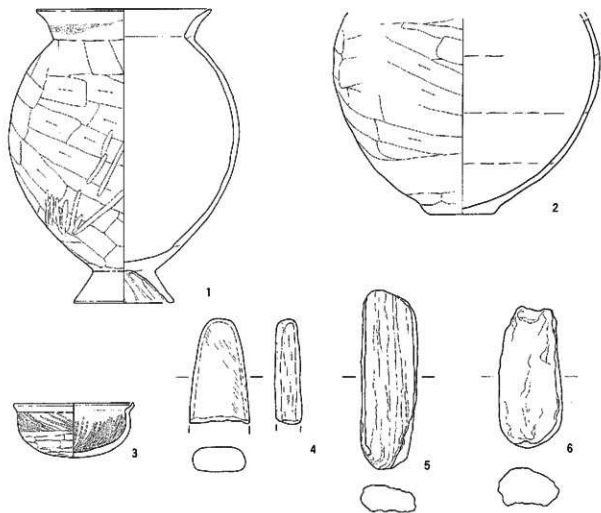


122号住居跡

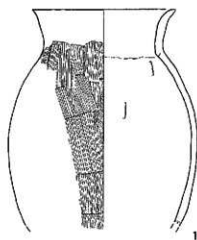


124号住居跡

第285図 114号・122号・124号住居跡出土遺物



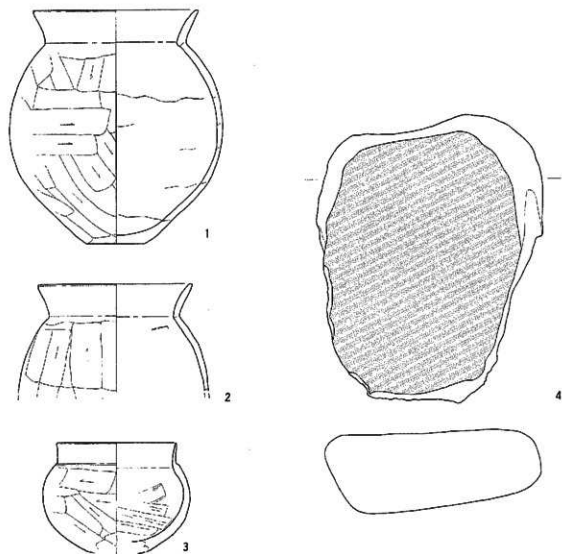
128号住居跡



131号住居跡

0 (1:4) 10cm

第286図 128号・131号住居跡出土遺物



134号住居跡



136号住居跡

第287図 134号・136号住居跡出土遺物

(3) 土坑

45号土坑 (遺構：第288図、P L 172)

遺物：第289図、P L 177、観察表P 88)

位置：N 28グリッド。長軸方位：N-63°-E。

平面形態：長方形。断面形態：基本的に箱状であるが凹凸がある。規模：2.49m×0.98m。残存深度：20cm。埋没土の特徴：ローム粒・ロームブロック・白色軽石粒を含む暗褐色土～黒褐色土で、人為埋没と思われる。備考：土坑墓の可能性あり。遺物出土状態：南東壁際から刀子と砥石が、中央部から刀子が出土している。

遺物：刀子2、砥石1、土師器片。掲載遺物2点。

46号土坑 (遺構：第288図、P L 172)

位置：Y 1グリッド。重複：40号溝に一部切られる。

長軸方位：N-24°-E。平面形態：不整円形。断面形態：皿状。規模：1.55m×1.31m。残存深度：19cm。埋没土の特徴：ローム粒・F A等を含む暗褐色土で人為埋没と思われる。

遺物出土状態：埋没土中から土師器破片が出土。

遺物：土師器破片。掲載遺物0。

61号土坑 (遺構：第288図、P L 172)

遺物：第289図、P L 177、観察表P 88)

位置：f 30グリッド。長軸方位：N-89°-E。平面形態：楕円形。断面形態：逆台形状。規模：0.81m×0.61m。残存深度：48cm。埋没土の特徴：ローム粒等を含む黒褐色土が自然埋没する。

遺物出土状態：底面付近より土師器底部出土。

遺物：土師器底部のみ。掲載遺物1点。

75号土坑 (遺構：第288図、P L 172)

遺物：第289図、P L 177、観察表P 88)

位置：h 29グリッド。63号溝の南東に近接。長軸方位：N-56°-W。平面形態：楕円形。断面形態：台形。北西壁面はほぼ垂直に立ち上がる。規模：0.67m×0.62m。残存深度：46cm。埋没土の

特徴：浅間C軽石を含む黒褐色土。

遺物出土状態：底面より10cmほど上で塔が出土。

遺物：土師器塔1。掲載遺物1。

76号土坑 (遺構：第288図、P L 172)

遺物：第289図、P L 177、観察表P 88)

位置：i 29グリッド。63号溝南東壁。長軸方位：N-77°-E。平面形態：円形。断面形態：逆台形。規模：0.67m×0.64m。残存深度：44cm。

遺物出土状態：底面付近から塔・高坏が出土。

遺物：土師器塔1・高坏2。掲載遺物2点。

78号土坑 (遺構：第288図、P L 172)

位置：h 29グリッド。63号溝南東壁。長軸方位：

N-73°-W。平面形態：楕円形。断面形態：逆台形。規模：1.06m×0.75m。残存深度：36cm。

遺物出土状態：埋没土中から遺物少量が出土。

遺物：土師器片・S字台付壺片。掲載遺物0。

79号土坑 (遺構：第288図、P L 173)

遺物：第289図、P L 177、観察表P 88)

位置：i 29グリッド。63号溝南東壁に位置。長軸

方位：N-24°-E。平面形態：楕円形。断面形態：底面は丸みを持つ。規模：0.75m×0.56m。

残存深度：28cm。備考：近接する75号・76号・78号・79号土坑4基は、ほぼ同時期とみられ、63号溝に関連する可能性がある。

遺物出土状態：底面付近を中心に塔4点が出土している。また、縁辺部には長方形溝がみられる。

遺物：土師器塔4、籬1。掲載遺物4点。

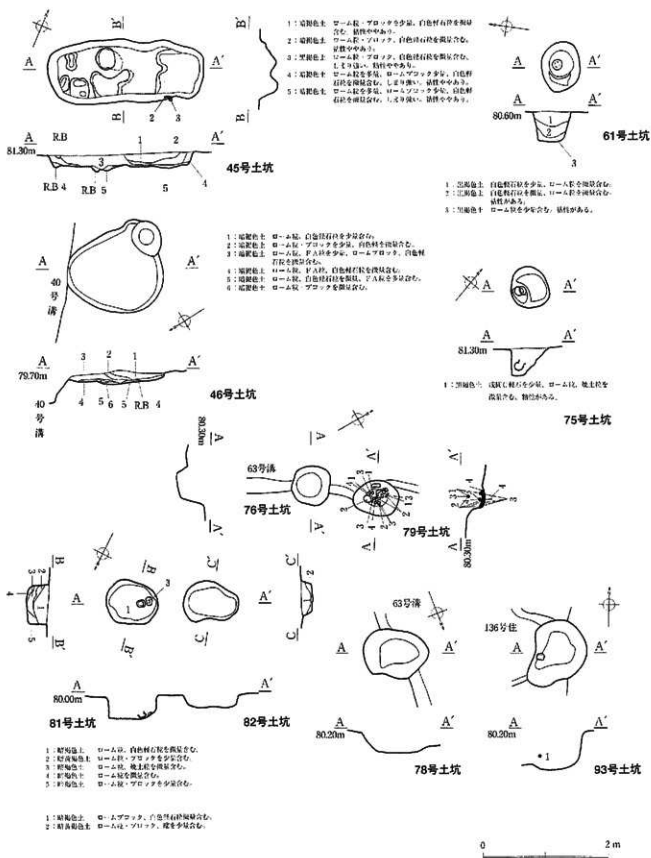
81号土坑 (遺構：第288図、P L 173)

遺物：第289図、P L 177、観察表P 89)

位置：X 3グリッド。82号土坑に隣接。長軸方位：

N-75°-E。平面形態：楕円形。断面形態：箱状。規模：0.88m×0.58m。残存深度：38cm。





第288図 古墳時代(2)土坑

埋没土の特徴：ローム粒・白色軽石粒を含む暗褐色土を基調とし、人為埋没と思われる。

遺物出土状態：西側底面付近から土師器・砥石等が出土している。

遺物：土師器：小形甕1・壺片・高坏片、須恵器片、砥石1を確認している。掲載遺物3点。

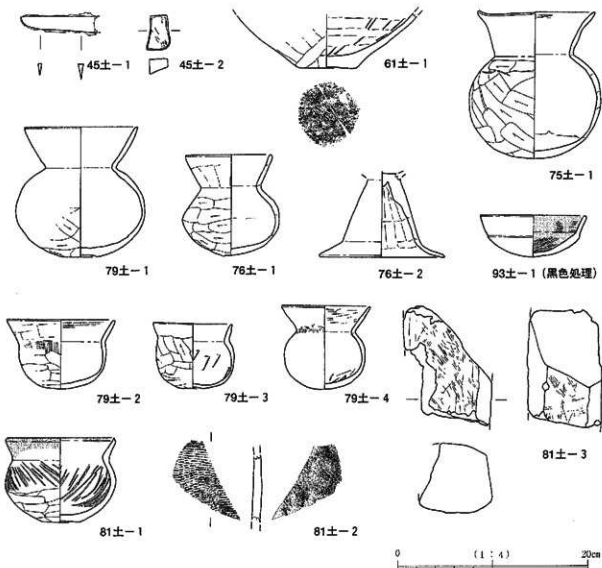
82号土坑（遺構：第288図）

位置：X3グリッド。長軸方位：N-75°-E。  
平面形態：楕円形。断面形態：箱状。規模：0.82m×0.67m。残存深度：20cm。埋没土の特徴：暗褐色土を基調とし、自然埋没と思われる。

遺物出土状態：埋没土中より少量出土している。  
遺物：土師器壺破片を確認。掲載遺物0。

93号土坑（遺構：第288図、P L173）

遺物：第289図、P L177、観察表P89  
位置：Z2グリッド。136号住居跡カマド右側に位置し貯蔵穴の可能性も考えられたが、壁外に出るため土坑と判断した。長軸方位：N-38°-E。  
平面形態：不整楕円形。断面形態：U字状。規模：1.15m×0.84m。残存深度：56cm。  
遺物出土状態：底面より20cmほど上で坏が出土。  
遺物：土師器坏1、須恵器片。掲載遺物1点。



第289図 古墳時代(2)土坑出土遺物

## (4) 溝

## 2号溝・57号溝

(遺構：第115・290図、P.L.2・3)

遺物：第295図、P.L.177、観察表P.89)

位置：h26～G17グリッド。重複：58号・59号溝・59号上坑を切る。52号・53号・56号・1号・22号・24号・25号・29号溝・1号河川跡・2号河川跡に切られる。また、3号古墳・12号古墳を切るが、切り合い関係を見ると12号古墳(P.184)に堆積したF.A.よりは古い時期に構築されたと考えられる。走行方向(底面の標高)：北北西(80.77m)～南東(80.25m)。断面形態：北西部は箱状で、南東部に向かって深い逆台形状になる。上端幅：90～40cm。下端幅：80～15cm前後。残存深度：20～57cm。埋没土の特徴：ローム粒・白色軽石粒等を含む暗褐色土・黒褐色土。備考：調査区内において280mあまりの長さにわたって確認している。南東部で低湿地に流れ込むような状態にあり、古墳時代の水田耕作に関連する可能性もある。

遺物出土状態：埋没土中から少量の土師器片が出土している程度である。

遺物：土師器片・破片。掲載遺物1点。

## 43号溝 (遺構：第225図、P.L.175)

位置：P27～Q28グリッド。23号古墳墳丘部下東端にあたる位置。重複：30号住居跡を切る。断面形態：逆台形状。上端最大幅：2.70m。下端最大幅：1.02m。残存深度：60cm。備考：平面形態は三日月状で、長さ11.7m程度。23号古墳構築に関連する可能性もある。

遺物出土状態：埋没土中からごく少量出土。

遺物：土師器片。掲載遺物0。

## 55号溝 (遺構：第115・290図、P.L.2・3)

位置：b25～Z23グリッド。重複：57号溝から分岐するような状態。走行方向(底面の標高)：北西(80.78m)～南東(80.56m)。断面形態：箱状。

上端最大幅：92cm。下端最大幅：58cm。残存深度：24cm。埋没土の特徴：ローム粒・白色軽石粒を含む暗褐色土。

遺物：遺物は出土していない。掲載遺物0。

## 63号溝 (遺構：第292～294図、P.L.174・175)

遺物：第295・296図、P.L.177・178、観察表P.89)

位置：g32～k27グリッド。南西及び北東は調査区外にのびる。重複：平安時代の溝が同方向に重なる。72号上坑に切られる。走行方向(底面の標高)：南西(79.70m)～北東(79.64m)。高低差はそれほど顕著なものではない。断面形態：U字状～菜研状。上端最大幅：1.78m。下端最大幅：0.40m。残存深度：55cm。埋没土の特徴：1・2層は暗灰褐色粘質土で平安時代の溝と思われる。7・8層を中心に砂粒の堆積が認められる。備考：ほぼ直線的に走行する溝である。調査区内において約60mにわたって確認されている。南東側壁面沿いにはピット数基がある。また、同じく南東側には本溝とはほぼ同時期とみられる75号・76号・78号・79号土坑が近接するが、調査区内北西側には同時期の遺構は確認されなかった。

遺物出土状態：埋没土中に散乱するような状態で比較的多量の遺物が出土している。特に29グリッド周辺からの出土が多かった。

遺物：遺物の時期は5世紀前半代が中心とみられる。土師器片8以上・台付甕4・壺5以上・瓶3以上・埴10以上・高坪1以上・埵2・埦1以上・器台2、S字台付甕破片、礫1を確認している。掲載遺物30点。

## 75号溝 (遺構：第115・290図、P.L.175)

遺物：第296図、P.L.178、観察表P.91)

位置：b1～a1グリッド。重複：76号溝と交差するが新旧関係は確認できなかった。82号溝を切る。1号河川跡に切られる。走行方向(底面の標高)：北西(78.97m)～南東(78.85m)。断面形態：U字状～菜研状。上端最大幅：1.88m。下端

最大幅：0.38m。残存深度：80cm。埋没土の特徴：ローム粒等を含む暗褐色土を基調とする。2層には砂粒を含み、底面付近には礫がみられる。備考：北西延長方向に93号溝がある。

遺物出土状態：埋没土中から少量の遺物が出上している。

遺物：土師器甕片・坏口縁部片・高坏脚部、須恵器甕片・坏片を確認している。掲載遺物3点。

76号溝 (遺構：第115・290図、P L 176)

位置：b 1～a 1グリッド。重複：75号溝と交差する。走行方向（底面の標高）：東（79.21m）～西南西（79.06m）。断面形態：逆台形～菜研状。上端最大幅：80cm。下端最大幅：28cm。残存深度：56cm。埋没土の特徴：ローム粒等を含む暗褐色土。

遺物出土状態：埋没土中からわずかに出上。

遺物：土師器片。掲載遺物0。

78号溝 (遺構：第291図、P L 176)

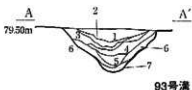
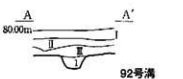
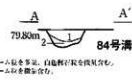
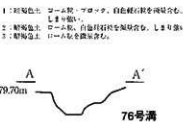
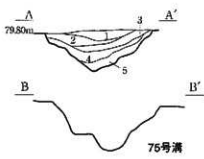
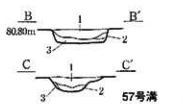
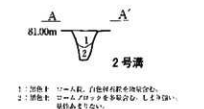
遺物：第296図、P L 178、観察表P 91)

位置：V 5～U 3グリッド。東側に33号古墳が隣接。断面形態：皿状。長さ：約13m。上端最大幅：2.50m。下端最大幅：2.32m。残存深度：29cm。埋没土の特徴：ローム粒・白色軽石粒を含む黒褐色土。備考：平面形態は緩やかな弧状で、溝周辺には径20～80cm程度のピットが多数あり。遺物出土状態：埋没土中から少量の遺物が出上。遺物：土師器壺2以上・坏1・高坏3以上、須恵器片を確認している。掲載遺物2点。

84号溝 (遺構：第115・290図、P L 176)

遺物：第296図、P L 178、観察表P 91)

位置：Y 4～Z 2グリッド。北東延長方向に76号溝が位置する。重複：100号住居跡を切り、1号河川跡・39号溝・40号溝に切られる。走行方向（底面の標高）：南西（79.43m）～北東（79.42m）。ほとんど高低差はない。断面形態：逆台形状。上



第290図 古墳時代(2)溝土層図・断面図

端最大幅：85cm。下端最大幅：42cm。残存深度：27cm。埋没土の特徴：ローム粒等を含む暗褐色土。遺物出土状態：埋没土中から少量出土している。遺物：土師器環1、須恵器片。掲載遺物1点。

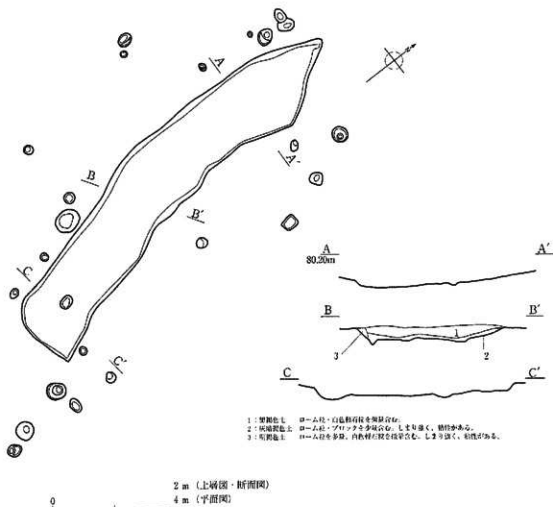
#### 92号溝 (遺構：第115・290図、P L 176)

位置：a 6～d 4グリッド。重複：93号・89号・40号・95号・108号・112号溝に切られる。走行方向(底面の標高)：南南西(80.53m)～北北東(79.23m)。断面形態：U字状。上端最大幅：54cm。下端最大幅：20cm。残存深度：28cm。埋没土の特徴：ローム粒を含む暗褐色土。遺物出土状態：埋没土中から土師器片が少量出土している。また、a 6グリッドでは上面から土製の駒輪が出土しているが、出土状態から本遺構に伴う遺物と断定できなかったため次項で扱っている(遺構外出土遺物18)。

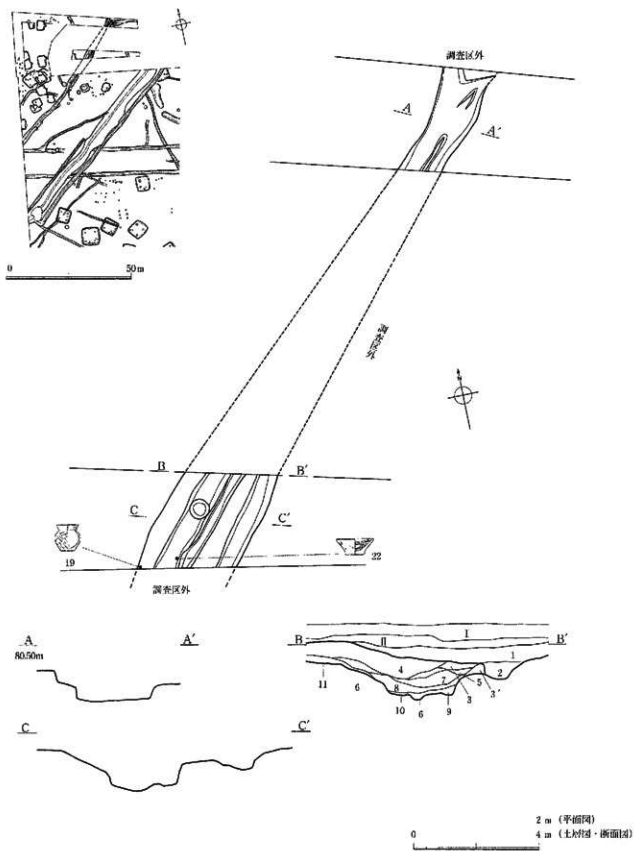
遺物：土師器破片、台付茶碗破片。掲載遺物0。

#### 93号溝 (遺構：第115・290図、P L 176)

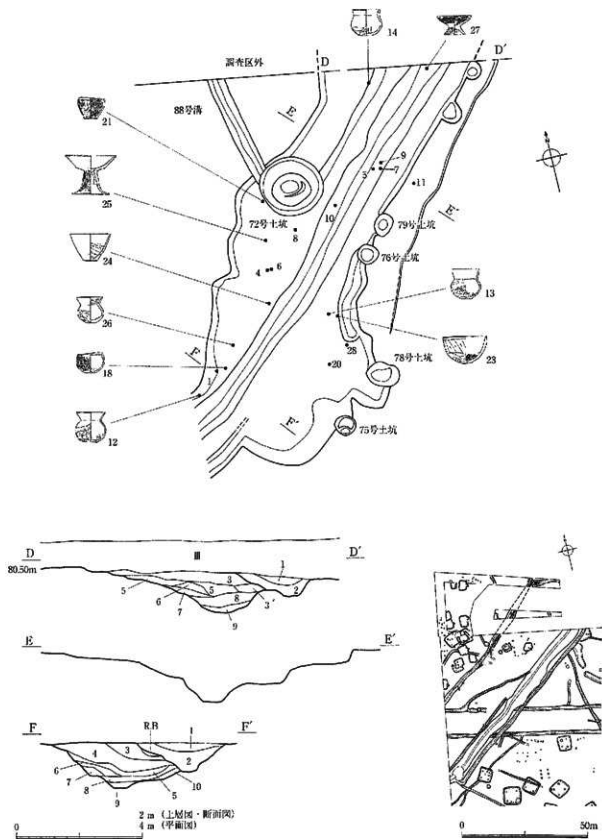
位置：c 3～d 4グリッド。重複：1号河川跡・91号溝に切られる。92号溝を切る。走行方向(底面の標高)：南東(78.82m)～北西(78.67m)。断面形態：渠状。上端最大幅：1.68m。下端最大幅：0.48m。残存深度：75cm。埋没土の特徴：ローム粒を含む暗褐色土。備考：南東延長方向に1号河川跡を挟んで75号溝がある。両溝の断面形態・規模等は類似するが、走行方向は逆方向。遺物出土状態：埋没土中から少量出土している。遺物：土師器壺1・高坏4以上、円筒埴輪片、須恵器片を確認している。掲載遺物0。



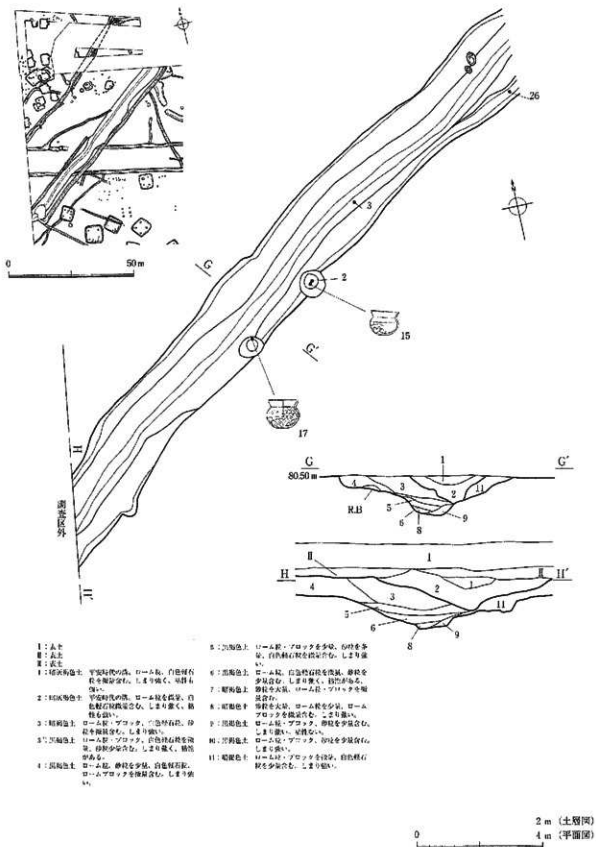
第291図 78号溝



第292図 63号溝①



第293図 63号溝②

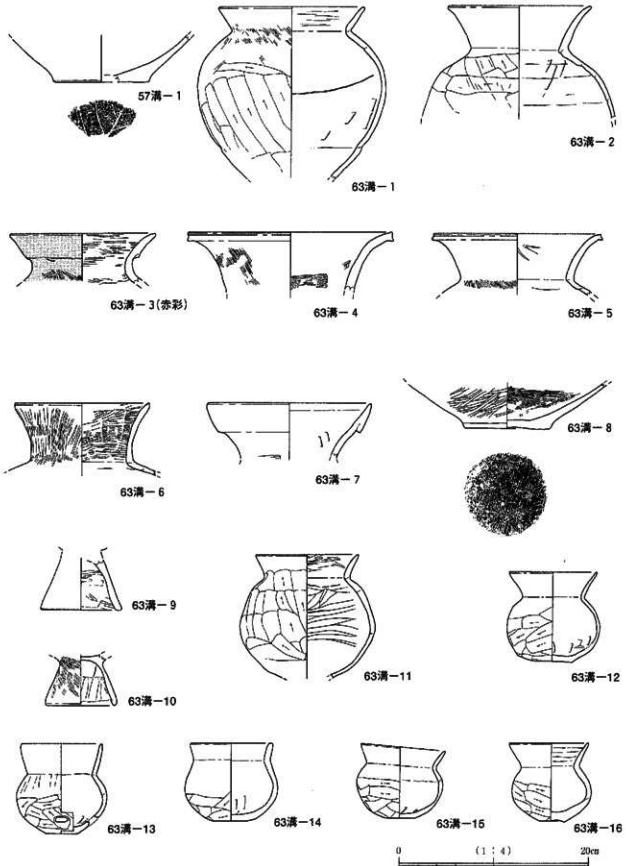


- 1: 土中  
2: 土上  
3: 瓦土
- 1: 緑泥陶器土 平造り焼物の瓦、ローム瓦、白色輝石を少量含む。しまり強く、磁石を多く含む。
- 2: 緑泥陶器土 平造り焼物の瓦、ローム瓦を少量含む。白色輝石を少量含む。しまり強く、磁石を多く含む。
- 3: 緑泥陶器土 ローム瓦・ブワッタ、平造り焼物、砂を多く含む。しまり強い。
- 3': 灰泥陶器土 ローム瓦・ブワッタ、白色輝石を少量含む。砂を少量含む。しまり強く、磁石を多く含む。
- 4: 灰泥陶器土 ローム瓦、砂を少量含む。白色輝石を少量含む。しまり強い。

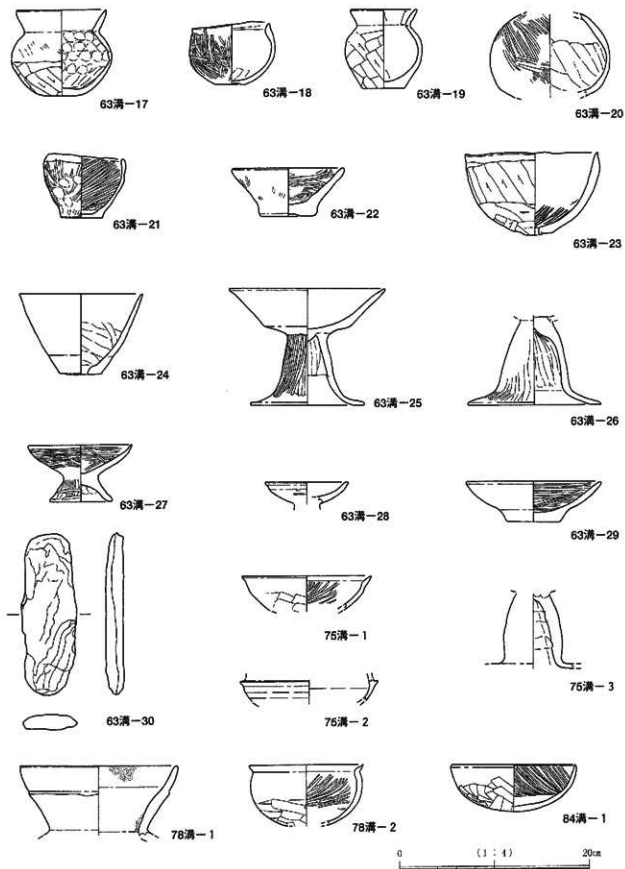
- 5: 灰泥陶器土 ローム瓦・ブワッタを多く含む。砂を少量含む。白色輝石を少量含む。しまり強い。
- 6: 灰泥陶器土 ローム瓦、白色輝石を少量含む。砂を少量含む。磁石を多く含む。しまり強く、磁石を多く含む。
- 7: 灰泥陶器土 砂を多く含む。ローム瓦・ブワッタを少量含む。
- 8: 灰泥陶器土 砂を多く含む。ローム瓦を少量含む。ローム瓦・ブワッタを少量含む。しまり強い。
- 9: 灰泥陶器土 ローム瓦、ブワッタ、砂を少量含む。しまり強い。
- 10: 灰泥陶器土 ローム瓦・ブワッタ、砂を少量含む。しまり強い。
- 11: 灰泥陶器土 ローム瓦・ブワッタを少量含む。白色輝石を少量含む。しまり強い。

第294図 63号溝③





第295図 古墳時代(2) 溝出土遺物①



第296図 古墳時代(2) 溝出土遺物②

## (5) 遺構外出土遺物 (第297・298図、P.L.179、観察表P91)

ここでは、本節に関連する遺構外出土遺物及び奈良・平安時代以降の溝・土坑・井戸等から紛れ込むような状態で出土した古墳時代中期・後期と考えられる遺物22点を掲載した。

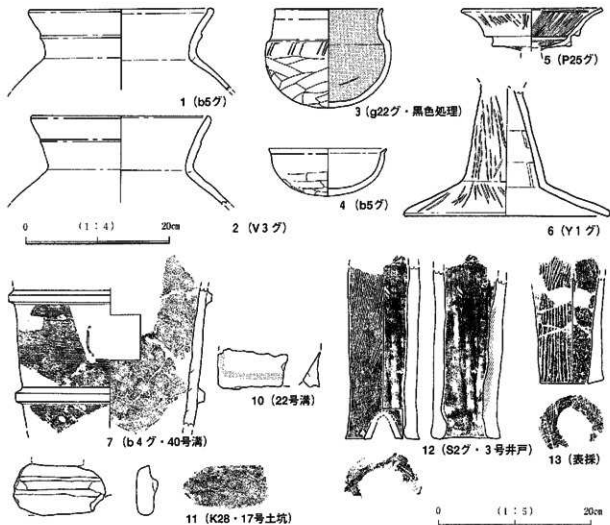
1～6に土師器、8～17に埴輪、18に土製品、19～22に石製模造品をまとめた。

円筒埴輪(7)には二次横ハケ整形が施されており、胎土には結晶片岩の含有が認められる。平安時代と考えられる40号溝から出土したものであるが、岡溝に近接する古墳はない。楕形埴輪(8・9)は中世の井戸とみられる97号土坑から出土したものである。なお、復元想定図には「群馬県内古墳出土の武器・武具」(1995群馬県古墳時代研究会)を参考にした。馬形埴輪(10・15)・人物埴輪(16)は重複する23号古墳の遺物である可能性が高い。家形埴輪は27号古墳を切る平安時代～中世の17号土坑から出土したもので、同古墳の遺物である可能性もある。なお、17号土坑からは円筒埴輪片も出土している。

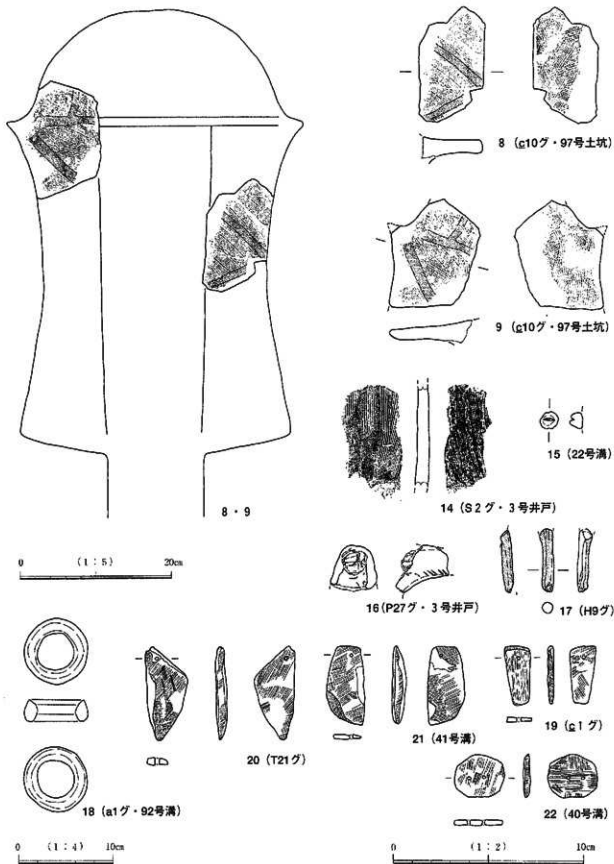
馬形埴輪(12・14)は3号井戸から出土したもので、12には再切開の痕跡がみられる。

土製品(18)は腕輪(土製鋼)と判断した。外径6.7～7.0cm、内径3.7～4.0cmである。

石製模造品には、剣形(20・21)、双孔川板(22)などがある。



第297図 古墳時代(2) 遺構外出土遺物①



第298回 古墳時代(2) 遺構外出土遺物②